
ゼロの白夜叉

近衛 陸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの白夜叉

【Zコード】

N4009Q

【作者名】

近衛 陸

【あらすじ】

ゼロの使い魔と銀魂のコラボ。

ルイズが才人の代わりに召喚したのは銀魂の主人公皆の銀さんこと坂田銀時。

銀さんの異世界ドタバタコメディが今始まる

必読つて書いてなれ、ただの挨拶じゃねえ？

はい。閲覧ありがとうございます。

このふざけた小説を書かせて頂いています。近衛陸です。気安く陸と呼んで頂けると幸いです。

ちなみに作者のキャラは日々変わるのでご了承下さい。
何故なら変態だからです！

ダメガネ「初っ端からあんた何言つてんだああああああつーーー！」

…………眼鏡ケースから突っ込みダメガネが現れた。

たたかう

抹殺

抹殺

抹殺

ダメ「たたかう以外全部抹殺じやねえかアアアーーーってか誰がダメガ
ネだあああ」

とりあえず陸はダメを抹殺する。

ダメ「誰がダメ…え？陸さん？ちょっとその刀なんですか？じょ、『凡
談ですよね。僕こうみえても一応レギュラーキャラなんんですけど』

大丈夫。この小説では銀ちゃん以外の銀魂キャラは出さないから安

心して迷わず逝け（笑）

ダ「逝けるかああああつ！-!つてか銀さん以外出ないって何重要事項
サラツと言つて…ぎやあああああつ」

陸はダメガネを倒した。眼鏡抹殺値が1上がった。
ボロボロの眼鏡を手に入れた。
しかし、いらないので川に捨てた。

プロローグ

「」はかぶき町スナックお登勢の上にある万事屋銀ちゃんから少し離れたところにある、ジャンボパチ「」。

そのパチ「」屋の前に1人の男が立っていた。
男の風貌は、銀髪天然パー・マに死んだ魚のような瞳。服装は黒い服に着流しを片腕だけたれ下げ腰には洞爺湖と書かれた木刀。

「」まで説明をすれば誰が立っていたのかお気付きになるであろう。
そり、この物語の主人公坂田銀時である。

しかし、今この場に居る銀時はいつもと違うみたいだ。何故ならいつもダルそうなら雰囲気とは違い冷や汗がダラダラと流れしており、今にも足元に水溜まりが出来そうだ。

つてか銀ちゃんどうしちゃったの？

「やべえ…やべえよ…何がヤバいかと言つてマジヤバい」

天の声（作者の声）を聞くと銀時は応えるようヤバいヤバいと呟きはじめた。

この状況から推理するとどうやら銀時は、パチ「」でボロ負けをしたみたいだ。

「オイオイオイ、これどうするよ。今月の食費どころかジャンプ代さえねえよ」

銀時はがっくりと肩を落とし、この状態で万事屋に帰つたら自分の身がどうなるかを想像しては顔を真つ青に染める。

「大体よオ。可笑しくねえ？この小説の作者銀さんのこと大好きじやん。普通好きなら勝たすんじやねえ？それが何これ、勝たす気ないどじろかいつも以上に負けたんですけど…」

あー、すいません。作者は変態なんで銀さんの格好良い姿も好きだけど痛い目にあつてる銀さんはもつと好きです（笑）

「…………か、帰るうううーーー」この小説に居たらなんか銀さんの大事な物を失いそつてか笑いじやねえええつーーー

天の声の言葉に銀時は空高く叫んだ。

しかし、今さら騒いでももう遅い。すでに小説は始まつている。

「あああ、俺が甘かつた。作者が俺を好きなんだし、この小説でパチ 口すれば大勝ちボロ儲けなんじやねえ？なんて考えた過去の俺を殴りに行きてえ」

銀時は軽く絶望しながらその場にしゃがみこんだ。つとその時、銀時の目は路地裏で光る物を捉えた。

「あ、あれは…俺のだあああああ…」

銀時は叫び声を上げながらその光る物…もとい500円玉ぐとスライディングした。

しかしその時、いきなり銀時と500円玉の間に高さは2メートル

ほど。幅は一メートルぐらいの橢円形の鏡のよつたものが現れた。

「え？ええええっ！…」

銀時はその鏡に気づくもスライディングをしていた為、止まることがままならずそのまま鏡のよつた物の中へと消えていった。

第1訓 使い魔でも天然パーマに悪い奴はない（前書き）

やつと出来たアアア！！

大変お待たせしました。第1訓の完成です。

銀「いや、誰もこんな小説待つてねえだろ」「いやいやいや、何言つてんの銀ちゃん。誰か待つてくれるとと思つたほうが創作意欲わくじゃん！！

まあ、誰も待つてないのは知つてゐるけどね…

銀「あー、なんか作者が暗くなりそうだから第1訓始めるだ。それではじつわ！」

第1訓 使い魔でも天然パーマに悪い奴はない

今、ここハルケギニアのトリステイン魔法学院では春の使い魔召喚の儀式が行われている。

儀式はもうすでに終わりに近く周りには色々な使い魔が召喚されたいた。

「では次が最後だ。ルイズ…ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」

「はいっ！！」

どうやらハゲ…じゃなかつた。ちょっとアレな教師に呼ばれ1人の少女が返事をした。

その少女は黒いマントに白いブラウス、グレーのプリーツスカート。ピンク色の髪に神楽並みの白い肌、顔は可愛らしい…文句無しの美女少女だった。

「出来るのか？」

「どうせ失敗するに決まってる」

少女…ルイズが前に出ると周りが馬鹿にするよう囁き始めた。つてか名前もない雑魚キャラには黙つていてもらいたいものだ。

「「酷つ……」「

雑魚キャラAとBが天の声に文句を言つたが無視をしようつ。

さて、ルイズは緊張を解すため深呼吸をした。今から使い魔を呼び出す儀式をするのだ。失敗などしたら周りになんて言われるか分からぬ

ルイズは息を整え杖を握り両手を空中に上げ氣合いを込めて呪文を唱えた。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペントゴン……我の運命に従いし……強くて美しい使い魔を召喚せよ……！」

ルイズが唱え終わつた途端に爆発が起き、辺りは白い煙でいっぱいになつた。

しばらくすると白い煙は消えていき、爆発の中心部にはヘンテコな格好をした銀髪天然パーマの男が気絶して倒れていた。

(え？平民？)

ルイズはがつくりと肩を落とした。平民を使い魔にするなど聞いたことがない。

しかし、この春の使い魔召喚の儀式は神聖なものであり、やり直しはできない。

仕方なさげにルイズは嫌そうに眉を寄せ、男を起こそう声をかけた。

「ちよつと…起きなれよつ…」

ルイズは男の胸倉を掴み力の限り揺さぶった。手加減の知らない子だ。

つてか…乱暴だね（b y 作者）

「…うえつ、うぶつ……き、気持ちわらい」

その乱暴な起^レし方に口に手を当て気持ち悪^レいに男は起きた。

「やつと…起きたよ^レうね。といひであんた誰？」

「うつ…は？誰って人にものを尋ねる時は自分から尋ねるのが…まあ、良い。俺ア坂田銀時」

「やつ、ビ^レの平民？」

（平民？なんだそれ…つてか「ビ^レ」おおおおお…）

ルイズの言葉に銀時は眉を寄せても周つを見渡すと心の中で叫んだ。そりやあ、もう大絶叫だ。

しかしそれは仕方がないこと、何故なら先ほどまで江戸で500円玉に向かつてスライディングをしていたはずなのに、今は周りに豊かな草原が広がっている。遠くには江戸城とは全く異なる石造りの大きな城が見えた。確實に江戸ではない。それビ^レか日本でもなさそうだ。

銀時がキヨロキヨロと辺りを見渡していると人垣をかき分けて中年

の男性が現れた。銀時は現れた男を見ると眉間にシワを寄せた。男があんまりな格好だつたからだ。大きな木の杖を持ち、真っ黒なローブを身に包んでいる。そして頭はハゲ…もといアレだった。

（なんだあの格好。まるで魔法使いじゃ……そ、そつか分かつた。ここはハーポッターファンのオフ会だ…世の中にはジラみみたいな奴がたくさん居るからなア（コスプレ好きのことです））

自分の考えにそうだ。そうだ。つと頷いていると…ハゲ…もといコルベールがルイズに話しかけた。

「さて、ミス・ヴァリエール。そろそろ次の授業が始まってしまつ。儀式の続きをしなさい」

コルベールに言われるルイズは銀時に近付いた。

（なんだ？なんだ？銀さんは一体何をされちゃうわけ？）

「ねえ」

ルイズは、銀時に声をかけた。

「あ？」

「あんた、感謝しなさいよね。貴族にこんなことされるなんて、普通は一生ないんだから」

（貴族？何言つてんだこいつ。お前らはただのコスプレ大好きハーポッターファンじやねえか）

ルイズは田をつむると、手に持った小さな杖を銀時の田の前で振つた。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペントゴン。この者に祝福を与え、我的使い魔となせ」

朗々と、呪文らしき言葉を唱え。すつと、杖を銀時の額に置いた。そして、ゆっくりと唇を近付けてくる。

「え？ な、なんだ？」

「いいからじつとしてなさい」

怒つたよつてルイズは言つて、さりに顔を近付けさせた。

「ちよ、ちよつと…あの、俺アそんな趣味ないから…銀さん口りコンじやないから」

近付くルイズに慌てだす銀時。ふふつ、情けない奴だ

「テメエーーー作者今なんつったゴラアアアーーー！」

銀時が天の声にかみついた隙を見計らいルイズは銀時の頭を左手でがつと掴んだ。

「え？」

ルイズの唇が、銀時の唇に重ねられる。

(えええええっ！…)

銀時は声にならない叫び声をあげた。まあ、唇を塞がれているのだから当たり前と言えば当たり前だが。

ルイズは唇を離し顔を真っ赤にしている。生意氣だがまだ幼い少女…どうやら照れているらしい。

「ちよっ、 いきなり何しやがる…！ いくら銀さんが格好良いからつて物事には順序があるだろ！ がああああああああ…！」

銀時はルイズに悪態をつく。しかし、銀時はまるっきり無視をされた。

(いきなりキスしといってそれはないだろ。ほんとこいつらはただのハーポッターファンか？ か、帰りてえええ…！ 何もかも忘れて帰つて定春にモフモフしてええええ…！)

銀時が心の中で何度もかの叫び声を上げていると、突然銀時の身体が熱くなつた。

「あちいあちいあつちいいいつ…！」

あまりの暑さにその場に「ロロロロ転がる銀時。少し涙目なのは見てあげないでおいづ。

そんな銀時にルイズが、苛立たしそうな声で言つた。

「すぐ終わるわよ。待つていなさい。『使い魔のルーン』が刻まれてこるだけよ。まあ、作者が楽しむためいつもの倍熱いらしきけど」

ルイズがそう言つと熱いのが收まり、身体の平静を取り戻した。

「熱かつた…つーかむつき聞き捨てならないこと聞いたんだけど作者が何したつて？」

すいませーん。銀ちゃんの涙目拝みたかつたんです。『ひかりさまでした。』

「『ひかりさまじやねええええつ…!…!』

叫ぶ銀時に「ルベール」と呼ばれている中年コスプレ魔法使いが近寄つてきて、銀時の左手の甲を確かめる。

そこには、見慣れない文字が踊つている…つていうか、これは文字なのか？ヘビがのたくつているような見たことのない模様である。銀時も見つめ、そして顔を歪めた。

「ふむ…珍しいルーンだな。つとそれでは儀式は終了だ。各自寮へと戻るよ!」

中年コスプレ魔法使いがそう言つてきびすを返すと、宙に浮いた。

「え？え？ええええ…!…う、浮いてる…」

流石の銀時も目をパチクリさせ浮いたハゲベール…あつ、間違えた。コルベールを見上げた。

すると周りの少年たちも次々と浮いていくではないか。浮かんだ全員はすうっと、城のよつたな石造りの建物へ向かつて飛んでいった。

「ルイズ、お前は歩いてこよーー！」

「『フライ』はおのれか『レビューション』でできない。その平民、お前の使い魔にお似合いだな」

口々にそう言って笑いながら飛び去つていく。

残されたのはルイズと銀時の二人。

「なあ、君は一体どなんだ？ ってかなんで飛ぶーー？」

銀時は一人つきりになると君とばかりに質問をした。

「つたぐ、君の田舎から来たか知らないけど、説明してあげる」

「田舎？ 田舎？ だらつ？ 江戸はこんなド田舎じゃないーー！」

「ハド？ なにそれ。君の鍊金術師？」

「いやいやいや、ダメだからね。鍊金術師なんて言つたらつてかなんぞ知つてんのおおおおーー！」

ルイズの言葉にヤバいと思つて即座突つ込む銀時。

「つてかないだろ。これはナイナイ。江戸を知らないわ。空は飛んでるわ。銀さんは突つ込みだわ。夢だろこれ？ 夢つて言つてくれよーーほんと300円あげるからアアアーー！」

銀時は頭を抱えるもルイズはまったく動じない。江戸は知らないが空を飛ぶことのどこがおかしいの？ といつた様子だった。

「そりゃ飛ぶわよ。メイジが飛ばなくてビリすんの?」

「メイジ? 大体こにはビリなんだ」

メイジ? と、いつ言葉に「チヨコレート」を連想させながら銀時は呟いた。

「トリステインよ! そしてこにはかの高名なトリステイン魔法学院! !

「魔法学院?」

「わたしは一年生のルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。わたしがあんたを召喚したの。今日からあんたのご主人様よ。覚えておきなさい! !」

「は? マ、 マジでかああああああ! !」

トリステイン魔法学院に銀時の叫び声がこだました。

第2訓 異世界つて意外と行けるもんだね（前書き）

お待たせしました。

第2訓田始まります。

つてか前書きつて何書けばいいんだろ…

第2訓 異世界つて意外と行けるもんだね

「それほんと?」

ルイズが、疑わしげに銀時を見つめながら言った。二人は今十二畳ほどの大きさがある、ルイズの部屋のテーブルを挟んだ椅子に腰掛けっていた。

「本當だ。嘘はついてねえよ」

薄々は感じていたがここは日本ではない。それどころか地球ですらない。魔法使いがいて、空を飛ぶ国があるなんて聞いたことがない。それに窓からはでかい月が一つ浮かんでいた。

「それにしても信じられないわ」

「俺だつて信じられねえよ」

ルイズの言葉にハアッとため息をつく銀時。

「別の世界つて、どういうこと?」

「魔法使いがいない。月は一つ…それに天人がいる」

「天人? 何よそれ」

銀時の言葉に眉を寄せて聞き返す。

「天人は宇宙からやってきた生き物。分かりやすくて「宇宙人だ」

「う、う、宇宙人ンソツー！」

銀時の言葉に驚きを隠せないルイズ。

「宇宙人なんて嘘でしょーー貴族に嘘をつくなんて平民の分際で」

流石に宇宙人などは信じれないので、ルイズは怒鳴るよう言った。

「誰が平民だつーー大体嘘じゃねえよ」

「いいえ、嘘よ。そんなこと聞いたことないもの。それにあんたメイジじゃないんでしょ。だつたら平民じゃない」

「だから嘘じやねえつてーー大体なんだ？そのメイジとか平民つてのはよオ」

「もう、ほんとにあんたこの世界の人間なの？メイジつてのは魔法使いに決まつてるじやない」

「いやいや、銀さんさつきから違う世界の人間だつて言つてるじゃん。大体召喚とか魔法とか、一体なんなの」

顔に手を当てハアつとため息をつく銀時。そんな銀時を見て仕方がなさげにルイズが口を開いた。

「仕方ないわねえ。説明してあげるからありがたく思いなさいよ」

ルイズは大袈裟にハアつとため息をつくとゆっくり説明を始めた。

「『』の使い魔召喚『サモン・サーヴァント』によつて使う魔法の系統が決まるの『火』『水』『土』『風』…そして失われた系統『虚無』…。すべての魔法が生活に密接に関係しているのよ。そして…で…」

ルイズがペラペラと喋るが銀時によく分からないつといつか興味がないので右から入つて左に抜けるといつた感じだ。

「ちよつとあんた聞いてるの?」

銀時があまりの反応の無さに説明を一旦やめて尋ねてみる。

「ああ、聞いてる聞いてる」

「ほんとうに聞いてた?」

「ああ、聞いてる聞いてる」

「ほんとうのほんとうに聞いてた?」

「ああ、聞いてる聞いてる」

「……私は可愛い?」

「ああ、聞いてる聞いて……あれ?」

銀時は言葉の異変に気付くがもつ遅い。ルイズからは黒いオーラが立ち込め、右ストレートを銀時の顔目掛けて打ち込んだ。

「ちよ...ちよっとまわ...ひでぶううつ...」

「つたぐ、せつかくこのわたしが説明してあげてるんだからきちんと聞きなさい……殴るわよ」

「いやいやいや、殴るわよつてもう殴つてんじやん！－力の限り右ストレート打ち込んでんだろうがあああああああ－！」

「何？なんか文句あるの？」

銀時の言葉にこゝり微笑み黒いオーラを増すルイス

いえ、なんでもありませんお嬢様。

(や、やべえ…やべえよ。一瞬お妙並の黒笑顔だった。逆らつたら
ヤバいオーラただ漏れじやねえか。もうほんと、銀さん家に帰りて
えええ)

銀時の言葉に満足気に再度説明を始めようとするルイス。その様子を見て銀時は止めた。そう、力の限り…また殴られてるのは極力遠慮したい。

「あー、待て待て。説明はもう良い……それよりも俺を元の場所に戻してくれねえ？」

「そんなの無理よ。元に戻すなんてできないわーー。『サモン・サー
ヴァント』は呼び出すだけだもの」

「……やつぱり戻れないのか」

ルイズの言葉に意外にも銀時は冷静に呟いた。なんとなくだがそういう予感はしていたらしい。

「あら？ 意外と冷静なのね。」

「まあ、こいついうトラブルは慣れてるからよ。こいついう時はなんかのイベントをクリアすれば帰れるのがRPGの基本だしな。で？俺は何をすればいいんだ？」

「もちろんわたしの使い魔よ」

尋ねる銀時にルイズはきつぱりと言つた。

「使い魔…そういうやア最初から度々と言つてたな。でもよ、使い魔つてなにすんの？」

銀時は尋ねた。確かに、ハーポッターではフクロウや猫、ネズミなどが出でくるがフクロウ以外具体的には何もしなかったように思つ。

「まず、使い魔は主人の目となり、耳となる能力を『えられるわ』

「どうこいつことだ？」

「使い魔が見たものは、主人も見ることができるので…でも、あんたじや無理みたいね。わたし、何にも見えないもん…！」

少し不機嫌そうに言つるイズ。

「それから、使い魔は主人の望むものを見つけてくるのよ。例えば秘薬とかね」

「秘薬つてなんだよ」

「特定の魔法を使うときに使用する触媒よ。硫黄とか、コケとか……でも、あんたそんなの見つけてこれないでしょ……秘薬の存在すら知らないのに……！」

「無理だな。ってか俺、何もやることなくねえ？」

銀時は呟いた。ルイズは苛立しそうに言葉を続けた。

「そして、これが一番なんだけど……使い魔は、主人を守る存在であるのよ！ その能力で、主人を敵から守るのが一番の役目……でも、あんたじゃ無理そうね……」

「いや、そうでもないぜ。いつみえても腕には自信があるからよオ

ルイズの言葉をやせつと否定しきつぱりと言つた。

「え？ そつなの？ そんな死んだ魚のよつた瞳で？」

「いやいやいや、これは充電中だからね。煌めく時は煌めくよ、銀さん……！」

「ふうーん。まあ、いいわ。普段は洗濯。掃除。その他雑用をやつてもううから」

銀時の言葉を信じたのか信じてないのか分からぬ風にルイズは言う。

「わひと、しゃべつたら眠くなつたわ」

ルイズはあくびをした。

「やつにえば、俺はどうで寝ればいいんだ?」

ルイズは、床を指差した。

「何? ペット感覚?」

「しかたないでしょ。ベッドは一つしかないんだから」

ルイズは毛布を一枚投げてよこしながら言つた。

それから、ブラウスのボタンに手をかける。一個ずつ外していく下着があらわになった。

「オイイイ! 何やつてんの? お前何やつてんの? ...」

銀時が慌てた様子で言つた。しかしルイズはきよととしている。

「寝るから、着替えるのよ」

「俺のいないところで着替えるよ? ...」

「なんで?」

「いやいやいや、なんでじゃないだろ。俺はそんなみだらに男の前で着替える子に育てた覚えてありません? ...」

「いや、あなたに育てられた覚えないし… 大体男？誰が？使い魔に見られたって、なんとも思わないわ」

（マジでか… 使い魔はどうやら男だと思われていらないらしい。って
かまるで犬や猫扱いじゃねえ？）

銀時が自分の扱いの酷さを考えているとルイズの着替えが終わつた
ようだ。

「じゃあ、これ明日になつたら洗濯しどいて」

ぱわり、ぱわりと何かが飛んできた。

（なんだこつや… つ）

それを取り上げるとレースのついたキャミソールに、パンティであ
つた。

「オイ、お前これ…… つて寝てるううう…」

銀時がベッドの方へ顔を向けるとすこしにルイズは夢の中。神楽並み
に寝付きの良い子だ。

銀時はため息をつくと毛布を引つつかみ頭からかぶつて横になつた。
こつして、銀時の異世界一日目は終わつた。

第3訓 使い魔は主人を馬鹿にしない（前書き）

お待たせしました

家の水道管が壊れてアタフタしてた陸です。

もう廊下ビチョビチョで…大惨事でした。

皆さんも水道管には気をつけて下さいね

つと第3訓始まります！！

第3訓 使い魔は主人を馬鹿にしない

銀時が目覚めて、最初に目にしたものは怒った様子のルイズだった。

「あんたねえ、使い魔が主人より遅く起きるなんてどうこう」と。

どうやら銀時がルイズよりも遅く起きたことが気に入らないようだ。けれどそれは仕方がないだろう。銀魂ファンなら知つての通り銀時は朝に弱い。なので早起きなんて出来るわけがない。

「あー……銀さん朝は弱いから……」

「ハア。つたく……あんたは……まあ、いいわ。それよりも着替えるから服

ルイズに言わると銀時は眉を寄せ、椅子にかかった制服を放り投げた。

「下着

「オイオイ、自分で取れよ」

「そこの一、クローゼットの一、一番下の引き出しに入ってる

銀時の言葉を聞かず、ルイズは下着の場所を言つ。どうやら「どうも銀時を使い倒すつもりだ。

ため息混じりにクローゼットの引き出しをあけた。中に下着がたくさん入っていた。適当に引っつかんで、後ろを見ないで放り投げた。

「服」

「さつき渡したぞ」

「着せて」

ルイズの言葉に振り向いた。

「最近のガキは自分で服さえ着れないのか？これならまだ神楽のほうが大人だな」

銀時の言葉にルイズは唇を尖らせて言った。

「神楽が誰かはしらないけど、貴族は下僕がいる時は自分で服なんて着ないのよ」

「誰が下僕だつ……誰が……」

「あら？ あんたなんて下僕と似たようなものよ。生意気な使い魔にはお仕置き。朝ごはんヌキね」

ルイズは指を立て、勝ち誇ったように言った。銀時はしぶしぶブラウスを取りルイズに着せた。

ルイズと一緒に部屋を出ると、似たようなドアが三つ並んでいた。そのドアの一つが開いて、中から赤い髪の少女が現れた。ルイズよ

り背が高く、むせるような色氣を放ちメロンみたいにでかいバスト。上から一番田までブラウスのボタンを外し、褐色の肌が健康そうだ。身長、肌の色、雰囲気、胸の大きさ…全てガルイズと対象的だ。男にとつては魅力的な少女には違いないが、銀時は口リコンではないためあまり興味が無さそうだ。

「おはよう。ルイズ」

彼女はにやつと笑いながら挨拶をした。

「おはよう。キルケ」

ルイズは顔をしかめると、嫌そうに挨拶を返した。

「あなたの使い魔って、それ？」

銀時を指差して、バカにした口調で言った。

「そうよ」

「あつはつは、ほんと人に人間なのね。凄いじゃない」

いかにもバカにしてますつと笑う彼女に銀時は眉を寄せた。

（うるせえよ。人間で悪いのか！…そういうお前なんてただのおつぱい星人じゃねえか。そのデカメロンハ百屋で売り出してやろうか！…）

「あたしも昨日、使い魔を召喚したのよ。どうせ使い魔にするなら、こういうのがいいわよねえ。フレイムー」

キュルケは、勝ち誇った声で使い魔を呼んだ。すると部屋から真っ赤で巨大なトカゲが現れた。

「何あれ？トカゲ？…にしては『テカいな』

出てきたトカゲを見るとボソッと呟いた。

「おっほっほ…！もしかして、あなた火トカゲを見るのは初めて？」

何故かキュルケは高笑いをする。

「つてかお前熱くねえのかよ」

キュルケの隣に立つ火トカゲは尻尾が燃え盛る炎で出来ており、口からはチロチロと火炎を出していた。

「あたしにとつては涼しいぐらいね」

「ふうーん。あんたの使い魔サラマンダーなのね」

「そうよ。素敵でしょ。あたしの属性にぴったり」

「あんた『火』属性だもんね」

「ええ。微熱のキュルケですもの。ささやかに燃える情熱は微熱。でも男の子はそれでイチロロ。あなたと違つてね？」

キュルケは得意そうに胸を張つた。ルイズも負けじと胸を張るが、悲しいかな…メロンとレモンでは違つすぎる。しかし、ルイズはそ

れでもキュルケを睨み付けた。どうやらかなりの負けず嫌いらしい。

「あんたみたいにいちいち色氣振りまくほど、暇じゃないだけよ」

ルイズの言葉にキュルケはヒヒリと笑つた。余裕の態度だ。それから銀時を見つめる。

「あなた、お名前は？」

「坂田銀時」

「サカタギントキ？ ヘンな名前」

「うるせえよ」

「じゃあ、お先に失礼」

炎のような赤髪をかきあげ、キュルケは去つていった。その後をちよこちよこと、大柄な体型に似合わない可愛らしい動きでサラマンダーが追つ。

キュルケがいなくなると、ルイズは悔しそうに拳を握り締めた。

「くやし……なによ、あの女……自分が火竜山脈のサラマンダーを召喚したからって……」

「あー、いいじゃねえかよ」

「よくないわよ……メイジの実力をはかるには使い魔を見ろって言われてるぐら……よ……なのになんであのバカ女がサラマンダーで、

わたしがあんたなのよ！』

『落ち着けよ。大丈夫だつて…お前もいつかあれぐらいの胸になるつて……多分』

ポンポンと慰めるようにルイズの肩を叩く銀時。しかし、ルイズからは黒いオーラが立ち込め怒りでブルブルと震えている。

『だ、だ、だ、だれが胸の話をしたあああー！大体多分つてなによおおおー！』

ルイズは思い切り銀時を殴つた。

トリステイン魔法学院の食堂は、学園の敷地内で一番背が高い真ん中の塔の中にあつた。食堂にはやたらと長いテーブルが三つ並んでいる。

百人は優に座れるだろ？。朝食、昼食、夕食と学院にいるすべてのメイジたちはここで食事を取るらしい。

すべてのテーブルに豪華な飾り付けがされており、いくつものローソクが立てられ、花が飾られ、フルーツが盛られた籠がのつている。銀時は食堂のあまりの豪華さに驚き、口をぽつかりと開けた。

そんな銀時に気付くと得意げに指を立てルイズが言った。

『トリステイン魔法学院で教えるのは、魔法だけじゃないのよ。メイジはほぼ全員が貴族なの。『貴族は魔法をもつてしてその精神となす』をモットーに教育を受けるのよ。だから食堂も貴族にふさわしいものでなければならぬの』

「ふうーん」

「わかつた？ホントならあんたみたいな平民はこの『アルヴィーズの食堂には一生入れないのよ。感謝してよね』」

「そのアルヴィーズってなんだよ」

「小人の名前よ。周りに像がたくさん並んでいるでしょ」

ルイズに言われて見ると確かに壁際には精巧な小人の彫像が並んでいた。

「あの像はね。夜中に動くのよ。正確には踊るんだけど……」

「え？……いやいやいや、ナイナイ。聞き間違い聞き間違い聞き間違い」

ルイズの言葉に像を見ると顔を青くし、言い聞かせるよつにぶつぶつと囁く。

「ちよつと何してゐの？いいから、椅子をひいてちよつだい！…！」

椅子の前に立ち腕を組んでルイズが言った。銀時は椅子をひきながら夜中は食堂に近寄らないと心に刻んだ。

ルイズは礼を言わずに腰掛ける。銀時も自分の椅子を引き出して座った。

「おお、じゃそうだ」

銀時はキラキラと瞳を輝かせた。目の前には豪華な料理が並んでいた。さつそく食べようと目の前でかい鳥のローストに手を伸ばす。しかしそれを掴む前に手を叩かれた。

「…なんだよ？」

銀時は叩かれた手を擦りながらルイズを見る。すると無言でルイズは床を指差した。そこには皿が一枚置いてある。

「皿だな」

「ええ、皿ね」

「なんか食べ物入ってるな」

ルイズは頬杖をついて言った。

「あのね？ほんとは使い魔は、外。あんたはわたしの特別な計らいで、床」

銀時は床に座り込み、床の前に置かれた皿を見つめた。小さな肉のかけらが浮いたスープに硬そうなパンが一切れ、ぽつんと置いてあつた。

万事屋では食べ物が無いときもあつたので、それに比べれば肉がある。充分に豪華だ。しかし、先ほど眺めた豪華な料理の近くで食べると泣けてくるのは何故だろう。

「偉大なる始祖ブリミルと女王陛下よ。今朝もささやかな糧を我に与えたもうたことを感謝いたします」

祈りの声が唱和される。ルイズも目をつむつてそれに加わっている。

（どじがささやかな糧だよ。これがささやかななら俺がいままで食べてた物はどうなる）

銀時はため息をつき、硬いパンをかじりながらルイズがおいしそうに豪華な料理を食べるのをみていた。

魔法学院の教室は、石でできた大学の講義室のようだつた。講義を行つ先生が、一番下の段に位置し、階段のように席が続いている。銀時とルイズが中に入つていくと、教室にいた生徒たちが一斉に振り向いた。そしてクスクスと笑い始める。先ほどのキュルケもいた。周りには男子が取り囲んでいた。まるで女王のように祭り上げられている。まあ、あの胸ではしかたがないのだろう。

皆、様々な使い魔を連れていた。銀時の世界では架空の生物ばかりだった。きっと某バカ皇子が来ると喜ぶだろう。ルイズが席の一つに腰掛けた。銀時も隣に座る。するとルイズが睨んで言つた。

「ここはね、メイジの席。使い魔は床よ」

銀時は不満そうに床に座つた。まあ、朝ごはんもテーブルで食べさせてもらえなかつたのだから仕方がないのかもしれない。しかし、食堂とは違いここには机が目の前にあるので窮屈だ。流石に座つていられなかつたのか再び椅子に座つた。

ルイズはちらつと銀時を見たが、何も言わなかつた。扉が開いて、先生が入ってきた。紫色のロープに帽子を被つた中年の女人だつ

た。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。このシュバルーズ、こうやって春の新学期に様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

ルイズは俯いた。

「おやおや、変わった使い魔を召喚したのですね。ミス・ヴァリエル」

シュバルーズが銀時を見て囁つと、教室中がどつと笑いに包まれた。

「ゼロのルイズ！！召喚できなかつて、平民を連れてくるなよ

ルイズは立ち上がり言つた。

「違うわ！…きちんと召喚したもの…」

「嘘つくな…『サモン・サー・ヴァント』ができなかつたんだろう

ゲラゲラと教室中の生徒が笑う。

「ミセス・シュバルーズ！！かぜつぴきのマコ「ンヌに侮辱されました！」

握り締めた拳で、ルイズは机を叩いた。

「かぜつぴきだと？俺は風上のマリコンヌだ…！風邪なんか引いてないぞ」

「あんたのガラガラ声は、まるで風邪でも引いてるみたいなのよ！」

「

「マリコンヌと呼ばれた男子生徒がルイズを睨み付ける。

「ミス・ヴァリホール。ミスター・マリコンヌ。みつともない口論はおやめなさい」

ルイズは椅子に座るとしょんぼりと俯いた。

「お友達をゼロだのかぜつぴきだの呼んではいけません。わかりましたか？」

「ミセス・シュヴァーレズ。僕のかぜつぴきはただの中傷ですが、ルイズのゼロは事実で……」

マリコンヌの言葉が途中で止まった。銀時が凄い目つきで睨み付けていたからだ。周りの生徒も身動きもせず冷や汗をかいている。空気が重い。

その重い空気を打破したのはルイズだ。つと/or>うか、今まで俯いていたので周りの様子に気付いてなかつたようだ。

「あんたなんで後ろ向いてるのよ」

「別に……なんとなく」

ルイズが銀時に話しかけるといつものダルそうな様子に戻った。この時、教室の皆はルイズに感謝をしたであらう。

「そ、さて、授業を始めますよ」

シューヴルーズは、一ほんと重々しく咳をすると杖を振った。机の上に、石ころがいくつか現れた。

「私の一つ名は『赤土』。赤土のシューヴルーズです。『土』系統の魔法を、これから皆さんに講義します。魔法の四大系統はご存知ですかね？ミスター・マリコンヌ」

「は、はい。ミセス・シューヴルーズ。『火』『水』『土』『風』の四つです！！」

シューヴルーズは頷いた。

「今は失われた系統魔法である『虚無』を含わせて、全部で五つの系統があることは皆さんも知つてのとおりです。その五つの系統の中で『土』はもっと重要なポジションだと私は考えます。この魔法がなければ、重要な金属を作り出すこともできないし、加工することもできません。石を切り出して建物を建てる 것도できなければ、農作物の収穫も手間取るでしょう。このように『土』系統の魔法は皆さん的生活に密接関係しているのです」

（なるほど…この世界じゃ魔法が科学技術に相当するんだな）

銀時は頬杖をついた状態で授業を聞いていた。

「今から皆さんには『土』系統の魔法の基本である『鍊金』の魔法を覚えてもらいます。一年生のときにできるようになつた人もいるでしょうが、基本は大事です。もう一度おさらいすることにします」

シユヴルーズは杖を振り短くローンを呴いた。すると石こうが光りピカピカ光る金属に変わっていた。

「『ガガ』、『ゴーレドですか?』

キュルケが身を乗り出した。

「違います。ただの真鎧です。『ゴーレドを鍊金できるのは『スクウェア』クラスのメイジだけです。私はただの…』

「ほんと、もつたいたいぶつた咳をして、シユヴルーズは言つた。

「『トライアングル』ですから…」

「なあ、ルイズ」

銀時はルイズをつづいた。

「なによ。授業中よ」

「魔法を使えばかめは 波打てるか?」

銀時の言葉にルイズは顔に手を当てる

「あ、あんた…きちんと話を聞いてると思つたらそんなこと考えてたの」

「当たり前だろ…男の夢だからな…」

「あんたねえ…」

ルイズが何かを言おうとしたその時ショーヴルーズ先生に見咎められた。

「ミス・ヴァリエール……」

「は、はい……」

「授業中の私語は慎みなさい」

「すいません……」

「おしゃべりをする暇があるのなら、あなたにやつてもうござましょう」

「え?」

「……ある石のを、望む金属に変えてじょうとなさい」

ルイズは立ち上がらない。困ったよつともじもじするだけだ。そんなルイズに首を傾げる銀時。

「ミス・ヴァリエール……どうしたのですか?」

ショーヴルーズ先生が再び呼び掛けると、キュルケが言った。

「先生」

「なんですか?」

「やめといた方がいいとおもいますけど……」

「どうしてですか？」

「危険です」

キュルケが言うと教室のほとんど全員が頷いた。

「危険？どうしてですか？」

「ルイズを教えるのは初めてですか？」

「ええ。でも彼女が努力家といつ」とは聞いています。さあ、ミス・ヴァリエール。気にしないでやつて『うらんなさい。失敗を恐れていては何もできませんよ?』

「ルイズ、やめて」

キュルケが蒼白な顔で言った。

「やります」

ルイズは立ち上がり、緊張した顔でつかつかと教室の前へと歩いた。隣に立つたシュブルーズはにっこりとルイズに笑いかけた。

「ミス・ヴァリエール。鍊金したい金属を強く思い浮かべるのです」

こくりと頷いて、ルイズは杖を振り上げた。

その瞬間銀時は嫌な予感がした。虫の知らせだらうか？…それとも今までの戦いの中で培わせた危機感察知能力だらうか？…とりあえずとつたに椅子の下へと隠れた。

その瞬間、机ごと石ごろは爆発した。爆風をモロに受け、ルイズとシューヴルーズ先生は黒板に叩きつけられた。悲鳴があがる。驚いた使い魔たちが暴れだした。教室内は大混乱だ。キュルケが立ち上がり、ルイズを指差した。

「だから言つたのよ！…あいつにやらせるなつて！…」

「もう！…ヴァリエールは退学にしてくれよ！…」

銀時は椅子から出て周りを見ると呆然としている。シューヴルーズ先生は倒れたままうごかない。たまに痙攣しているから、死んではいないようだ。

煤で真っ黒になつたルイズが立ち上がつた。見るも無残な格好だつた。ブラウスが破れ、華奢な肩が覗いている。スカートは裂けパンツがまる見えだ。しかし、さすがである。大騒ぎの教室に動搖した風もなく、顔についた煤をハンカチで拭きながら言つた。

「ちょっと失敗みたいね」

当然、他の生徒から反撃を食らつ。

「ちょっとじゃないだろ！…ゼロのルイズ！…」

「いつだって成功の確率、ほとんどゼロじゃないかよ！…」

何故ルイズがゼロと呼ばれるのか分かつた瞬間だった。

ルイズがめちゃくちゃにした教室の片付けを始めた。早くしないと昼ごはんを食べ損ねてしまう。ただでさえ朝ごはんがアレだったのだ。食べ損ねるのは遠慮したい。銀時が黙々と片付けをしているとルイズが話しかけてきた。

「どうせ、あんたも心の中でわたしをバカにしているんでしょう」

「はあ？」

机を拭いていた、銀時は手を止めルイズを見つめた。その顔は何言ってんだコイツっといった顔だ。

「わ、笑いたければ笑えばいいわ」

明らかに虚勢を張つて言つるルイズ。

「バカだろ。お前、俺はメイジジやねえし魔法が使えようが使えまいがどうでも良い。それによオ…テメーは一生懸命頑張つてるじゃねえか。そんな奴を笑うほど俺ア腐つてねえよ」

きつぱり言つ銀時にルイズは田を丸くした。初めてだつた…親も教師も誰だつてそんなことを言ってくれたことがない。ルイズはとても嬉しく思つた。しかし、素直に礼を言つなんて出来ない。

「ま、まあ、使い魔がご主人様の馬鹿にするわけないわよね…！」

「はいはい。じゃあ、お嬢様。片付け再開するぞ」

銀時とルイズは片付けを再開した…つといつてもほとんどの銀時が片

付けた後なのだが。黙々と片付け、なんとか昼休み前に終わらした。

第4訓 伝説つて意外と近くあるもんだ（前書き）

最近タイトルに悩み中です…

つと今回の話は色々なところに場面が飛んでいます。一応空間を開けていますが分かり辛かつたら言って下さい。
次からは何か記しつけるので

それでは第4訓始まります

第4訓 伝説つて意外と近くにあるもんだ

ミスター・コルベールはトリステイン魔法学院に奉職して一十年、中堅の教師である。二つ名は『炎蛇のコルベール』。『火』系統の魔法を得意とするメイジだ。

彼は、先日の『春の使い魔召喚』の際に、ルイズが呼び出した平民の男が気になっていた。正確には、男の左手に現れたルーンのことで。それで、先日の夜から図書館にこもり書類を調べている。

トリステイン魔法学院の図書館は、食堂のある塔の中にある。本棚は驚くほどに大きい。およそ三十メイルほどの高さの本棚が、壁際に並んでいる様は壯觀だ。それもそのはず、ここには始祖ブリミルがハルケギニアに新天地を築いて以来の歴史が詰め込まれている。彼がいるのは図書館の中の一区画、教師のみが閲覧を許される『フェニアのライブラリー』の中であった。コルベールはその本棚の一つに気になる古書を見つけた。それは始祖ブリミルが使用した使い魔たちが記述された古書であった。その中に記された一節に彼は目を奪われた。じっくりとその部分を読みふけるついで、彼の目が見開いた。

古書の一節と、男の左手に現れたルーンのスケッチを見比べる。彼は、あつ、と声にならないうめきをあげ、本を抱えると慌てて走りだす。彼が向かった先は、学院長室であった。

学院長室は、塔の最上階にある。トリステイン魔法学院の学院長を

務めるオスマン氏は、白い口ひげと髪を揺らしテーブルに肘をついて、退屈をもてあましていた。ぼんやりとしていたが、おもむろに「つむ」と呟いて引き出しを引いた。中から水ギセルを取り出した。すると、秘書のミス・ロングビルが羽ペンを振った。水ギセルが宙を飛び、ミス・ロングビルの手元までやつてきた。つまりなそうにオスマン氏が呟く。

「年寄りの楽しみを取り上げて、楽しいかね？ミス…」

「オールド・オスマン。あなたの健康を管理するのも、わたくしの仕事なのですわ」

オスマン氏は椅子から立ち上がると、理知的な顔立ちが凜々しい、ミス・ロングビルに近付いた。ロングビルの後ろに立つと、重々しく手をつむる。

「この平和な日々が続くとな、時間の過ごし方といつもの何より重要な問題になつてくるのじゅよ」

「オールド・オスマン」

「なんじゅ？ミス…」

「暇だからといってセクハラするのはやめてください。王室に報告しますよ…」

お尻を撫でてくるオスマン氏に眉を寄せ言つた。

「まあ、やうカツカしなさんな。そんな風だから…婚期を逃すのじゅ

や

オスマン氏は反省した素振りもなくお尻を撫でたまま言った。ロングビルの額に青筋が浮かぶ。

「！」、こんのエロジージイがああああああ……」

ロングビルは振り向くと思いつきオスマニ氏を何度も踏みつけた。

「じめん。やめて。痛い。もつしない、ほんとにしない」

オールド・オスマンは、頭を抱えてうずくまる。ミス・ロングビルは、無言で蹴り続けた。

「あだつ、年寄りを。そんな風に……あいだつ……」

そんな平和な時間は、突然の乱入者によつて破られた。

ドアがバタン！…と勢いよくあけられ、コルベールが飛び込んできた。

「オールド・オスマン……」

「なんじやね？」

ミス・ロングビルは何事もなかつたように机に座つていた。オスマン氏は腕を後ろに組み、その場で立つてゐる。恐るべき早業だ。

「で、何の用かの」

「！」、これを見てください……」

「コルベールは、オスマン氏に先ほど読んでいた書物を手渡した。

「これは『始祖ブリミルの使い魔たち』ではないか。またこのような古臭い文献を漁りおつて…で、コルベール君。この書物がどうかしたのかね？」

「これも見てください！！」

コルベールは銀時の手に現れたルーンのスケッチを手渡した。それを見た瞬間、オスマン氏の表情が変わった。

「ミス・ロングビル。席を外しなさい」

ミス・ロングビルは立ち上がり部屋を出ていく。彼女の退屈を見届けオスマン氏は口を開いた。

「詳しく説明するんじゃ。ミスター・コルベール」

一方そのころ銀時は「…」と、ルイズと一緒に食堂に来ていた。昼ごはんを食べるためだ。

ルイズに椅子を引き座らせると銀時は床を見た。しかし床には何もない。

「アレ？ルイズ…俺の飯は？」

「あなたは」「」

ルイズは隣の席を指差していった。

「へ？」

銀時はきょとんとした。それもそのはず朝は怒られた椅子に座つてもいいと言われたのだ。マジマジとルイズを見つめる。その視線に気付いたのか、ルイズは頬を染めて言つた。

「か、か、勘違いしないでよね……」、今回は片付け頑張ってくれたからその「」褒美よ……」

「そっか……ありがとうな

ルイズの様子に笑いながら頭を撫でてやる。するとルイズは先ほどよりも顔を真っ赤にした。そんなルイズを見て、どうしたのかと首を傾げる銀時。（当作品の銀時は恋愛類には鈍感です）

そんなこんなで食事を終え、銀時は食堂を出た。ルイズの下着を洗わなければならぬことを思い出したからだ。

（それにしてもどこの洗えばいいんだ。つというか女のパンツ持つたままウロウロしてゐるなんてアイツらには絶対見せられねえな）

元の世界に置いてきた血の繋がつてない家族を思い浮かべため息を

ついた。

「どうなさいました？」

振り向くと、大きい銀のトレイを持ち、メイドの格好をした素朴な感じの少女が立っていた。
力チュー・シャで纏めた黒髪とそばかすが可愛らしい。

「な、なんでもねえよ……」

銀時は下着を隠し左手を振った。少女の下着を持ちウロウロしているなんてただの変態だからだ。

「あなた、もしかしてミス・ヴァリホールの使い魔になつたつてい
フ……」

彼女は銀時の左手にかかれたルーンに気付いたらしく。

「知つてんのか？」

「ええ。なんでも、召喚の魔法で平民を浮んでしまつたつて。噂に
なつてますわ」

女の子はにっこりと笑つた。この世界に来て初めて見た、屈託のな
い笑顔だった。

「お前も魔法使いか？」

「いえ、私は違います。あなたと同じ平民です。貴族の方々をお世
話するためにここに奉公させていただいてるんです」

女の子の言葉にだからメイド服かつと銀時は納得した。

「ふうーん。そつか…。俺は坂田銀時。銀ちゃんたとでも銀さんたとでも好きに呼んでくれや」

「変わったお名前ですね…。私はシエスタっていいます。よひじくお願いしますね、ギンさん。」

そのとき、銀時からぱさつと何かが落ちた。
ルイズの下着だ。銀時は焦ったこのままでは変態扱いをされてしまふ。

「あ…こ…こ…これほどな」

「もしかしてミス・ヴァリエールに洗濯を頼まれたのですか?」

銀時の焦りとは逆にシエスタは冷静だ。

(あれ?もしかして、この世界ではこれが普通なのか?)

「や、そつなんだよ。ほんとあのバカ娘、自分で洗濯すりやあいいのによオ」

「まあ、貴族にそんなこと言つたら大変ですわ…!」

「貴族ねえ。ただ魔法が使えるだけじゃねえか

銀時の言葉に畳然とするシエスタ。

「ギンさんは勇氣があつますね……つとよひしければ私が後で洗濯しておきましようか?」

「え? いいのか?」

思いがけない、シエスタの言葉に銀時はじつと見つめた。

「ええ、後で他にも洗濯するのでついでです」

シエスタはにっこりと笑つて言った。

「いやア、わりいな。じゃあかわりに俺に何かできることがあったら言つてくれ。手伝つわ」

銀時が言つとシエスタは考えた。

「なら、今からトザートを運ぶので手伝つてくださいな」

シエスタは微笑んで言った。

大きな銀のトレイに、デザートのケーキが並んでいる。銀時がそのトレイを持ち、シエスタがはさみでケーキをつまみ、配つていく。ちなみに残ったケーキはくれるとシエスタと約束していたので銀時はご機嫌だ。

金色の巻き髪に、フリルのついたシャツを着て、薔薇をポケットに挿している気障なメイジがいた。周りの友人が、口々に彼を冷やか

している。

「なあ、ギーシュー！お前、今は誰とつきあっているんだよーーー！」

「誰が恋人なんだ？ギーシュ」

「どうやら気障なメイジはギーシュといつりじこ。彼はすっと唇の前に指を立てた。

「つきあう？僕に特定の女性はいないのだ。薔薇は多くの人を楽しませるために咲くのだからね」

（なんだ？あのいかにもなナルシスト野郎は）

銀時は眉を寄せながら彼を見つめた。

そのとき、ギーシュのポケットから何かが落ちた。ガラスで出来た小瓶である。中には紫色の液体が入っていた。

「おい、ポケットから瓶が落ちたぜ」

しかし、ギーシュは振り向かない。銀時はシエスタにトレイを持ってもらつと、しゃがみこんで小瓶を拾つた。

「落とし物だ、ナルシスト野郎」

それをテーブルの上に置いた。ギーシュは銀時を見つめると、その小瓶を押しやつた。

「これは僕のじゃない。大体ナルシスト野郎とはなんて言い草だ！」

しかし、その小瓶の出所に気付いたギーシュの友人たちが、大声で騒ぎ始めた。

「おや？ その香水はモンモランシーの香水じゃないのか？」

「そうだ！ それはモンモランシーが自分のためだけに調合している香水だぞ！ ！」

「そいつが、お前のポケットから落ちてきたことは、今モンモランシーとつきあっている。そうだな？」

「違う。いいかい？ 彼女の名誉のために言つておくが……」

ギーシュが何か言いかけたとき、後ろのテーブルに座っていた茶色のマントの少女が立ち上がり、口々に走ってきた。

「ギーシュさま……やはり、ミス・モンモランシーと……」

ボロボロと泣き始める少女。

「彼らは誤解しているんだ。ケティ。いいかい、僕の心の中に住んでるのは君だけ……」

しかし、ケティと呼ばれた少女は思いつきりギーシュの頬をひっぱたいた。

「その香水があなたのポケットから出でたのが、何よりの証拠ですわ！ さよなら！ ！」

ギーシュは、頬をさすった。すると、遠くの席から巻き髪の女の子が立ち上がり、ギーシュの席までやってきた。

「モンモランシー。誤解だ。彼女とはただいっしょに、ア・ロシールの森へ遠乗りをしただけで…」

ギーシュは、首を振りながら言った。額には冷や汗が一滴伝ついた。

「やつぱりあの一年生に手をだしてたのね…！」

モンモランシーは、テーブルに置かれたワインの瓶を掻むと、中身をギーシュの頭の上からかけた。

「つつきーー！」

そして怒鳴つて去つていった。辺りは沈黙した。

ギーシュはハンカチを取り出し顔を拭きながら芝居がかつた仕草で言った。

「あのレディたちは、薔薇の存在の意味を理解していないようだ

あつ、こいつバカだつと銀時は思い、シエスタから銀のトレイを受け取り、再び歩きだした。

そんな銀時を、ギーシュが呼び止めた。

「待ちたまえ

「あ？」

ギーシュは、椅子の上で体を回転させると、足を組んだ。

「君が軽率に、香水の瓶を拾い上げたおかげで、一人のレディの名譽が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

銀時は呆れた声で言った。

「銀さんのせいにしないでくれない？お前が一股してたのが悪いんだろ」「う

ギーシュの友人たちが、どつと笑った。

「そのとおりだギーシュ！！お前が悪い！！

ギーシュの顔に、さつと赤みが差した。

「いいかい？給仕君。僕は君が香水の瓶をテーブルに置いたとき、知らないフリをしたじゃないか。話を合わせるぐらいの機転があるもよいだらう？」

「知るか！！大体二股なんかそのうちバレるつつの…それに俺ア給仕じゃねえよ」

「ふん……ああ、確かに君はあのゼロのルイズが呼び出した平民だったな。平民に貴族の機転を期待した僕が間違っていた。行きたまえ

ギーシュはバカにしたように言つ。銀時はかちんときた。

「つるせえナルシスト野郎。その鼻に薔薇をぶち込んでやろつか！」

ギーシュは立ち上がり目を光らせた。

「どうやら君は貴族に対する礼を知らないようだな」

「俺の世界には二股ナルシスト貴族なんて居ないからな」

ギーシュをバカにするような仕草で言った。

「よからう。君に礼儀を教えてやう。ケーキを配り終わったら、ヴェストリの広場に来たまえ」

ギーシュの友人たちがわくわくした顔で立ち上がり、ギーシュの後を追つた。シエスタがぶるぶる震えながら、銀時を見つめている。銀時は笑いながら言った。

「大丈夫。あんなのケーキを食べる前のちょっとした運動に過ぎねえよ」

「あ、あなた、殺されちゃう…」

「へ？」

「貴族を本気で怒らせたら…」

シエスタは、だーっと走つて逃げてしまった。
その時、ルイズが駆け寄ってきた。

「あんた！…何してるので…見てたわよ」

「よお、ルイズ」

「よおじゅないわよ……なに勝手に決闘なんか約束してんのよ……」

「あーっ、ムカついたからやあつとやつてくるわ」

銀時はせつぱりと歩きだした。

「ま、待ちなさいよ。聞いて?メイジに平民は絶対に勝てないの!」

「

ルイズがそう言つも銀時は食堂の外にいた人に場所を聞くと歩いていく

「ああもうーー使い魔のくせに勝手なことばっかりするんだから!」

「

ルイズは、銀時の後を追いかけた。

所変わつて、ここは学院長室。ミスター・コルベールとオールド・オスマンは鏡を見ている。そこには銀時と、ギーシュのやり取りが映つていた。

「つーむ…大変な事になつてしまつたの…」

鏡を見ながら呟くオスマン氏。

「よおじゅですか!…『眠りの鐘』で止めたほうが…」

「子供のケンカに大切な『秘宝』を使う必要はないじゃね？」

「し、しかし…平民がメイジ相手にただでは済ませんぞ？」

オスマンの言葉に少し驚いて言つ。どうやら銀時の身を案じてくれてるようだ。そんなコルベールを横田で見るオスマン。

「ミスター・コルベール。わからんのかね？だから止めるな。つと書いてあるのじゃよ」

コルベールは驚き田を見開いた。

「もし、ミス・ヴァリエールの呪喚した平民が伝説の『ガンダールヴ』だというのならその確認ができるよい機会ではないか」

そう言いながら再度鏡を覗き込み始めた。

ヴェストリの広場は、魔法学院の敷地内、『風』と『火』の塔の間にある中庭だ。西側にある広場なので、そこは日中でも日があまり差さない。決闘にはうつてつけの場所である。

しかし…噂を聞きつけた生徒たちで、広場は溢れかえっていた。

「諸君！…決闘だ！…」

ギーシュが薔薇の造花を揚げた。うおーーーーと歓声が巻き起こる。

「ギーシュが決闘するやーー！相手はルイズの平民だーー！」

ギーシュは腕を振つて、歓声にこなえていた。それから、やつと銀時の方を向いた。

「とりあえず、逃げずに来たことは、讐めてやるひうじやないか

ギーシュは、薔薇の花を弄りながら言った。

「誰が逃げるかよ」

「さてと、では始めるか」

ギーシュは、花びらを振つた。花びらが一枚、宙に舞つたかと思つと…甲冑を着た女戦士の形をした人形になつた。

「言ひ忘れてたな。僕の一つ名は『青銅』。青銅のギーシュだ。従つて青銅の『トーレム』『ワルキュー』がお相手するよ」

銀時とワルキューが動こうとするとき、人込みの中から、ルイズが飛び出した。

「ギーシューー！」

「おお、ルイズ！悪いな。君の使い魔をちょっとお借りしているよ

ルイズはよく通る声でギーシュを怒鳴りつけた。

「いい加減にしてーー！大体ねえ、決闘は禁止じゃない。」

「禁止されているのは、貴族同士の決闘のみだよ。平民と貴族の間での決闘なんか、誰も禁止していない」

ルイズは言葉に詰まつた。

「そ、それは……そんなこと今までなかつたから……」

「ルイズ、君はそここの平民が好きなのかい？」

ルイズの顔が、怒りで赤く染まつた。

「誰がよ……やめてよね……自分の使い魔がみすみす怪我するのを黙つて見ていられるわけないじゃない……ギントキも決闘なんてやめなさい！！」

「あー、ルイズ……やつと銀さんの名前呼んだな。けど、それは聞いてやれねえ。わりいな」

銀時は腰から洞爺湖を抜いて構えた。

それを見たギーシュは杖を振つた。ギーシュのワルキューレは銀時に突進していく。

「ギントキイイー！」

ルイズは叫んだ。しかし次の瞬間驚くべき光景が映つた。なんと予想とは違いワルキューレが壊されていたのだ。

「なつ……」

「え？……」

「う……そ……」

ざわざわと周りの生徒が騒がしくなる。ギーシュやルイズも驚きを隠せないようだ。そんな中銀時は口を開いた。

「いい加減、ムカつくんだよね……メイジだか貴族だかしんねえけど、人のことゼロだの平民だのバカにしやがってよオ。魔法がそんなに偉いのかよ！……」

銀時の言葉にルイズはハツとした。もしかしたらこの決闘は自分のためなのかも知れない。

「ま、まぐれで一体倒したから調子に乗らないでくれたまえ」

ギーシュは再度杖を振り今度は七体の「ゴーレムを出した。七体のゴーレムが銀時を襲う、そのとき左手のルーン文字が光った。

動きの遅く見えるゴーレムなんて銀時の敵ではない。

洞爺湖の一振りで一気に三体ものゴーレムが壊れた。

残り四体も目に見えない剣さばきでバラバラに切り裂かれる。速い。あんな風に木刀を振れる人間がいるなんて思えない。

銀時が自分でがけて跳躍するのが見えた。

（や、やられる！……）

ギーシュは頭を抱えた。しかし、いつまで待っても衝撃が来ない。恐る恐る目を開けて見ると木刀が目の前にあった。寸止めだ。

「はア！ 終了オ」

木刀を腰に差すとルイズの元へと歩く

「ま、待ちたまえ。君は情けでもかけたつもりなのか？」

ギーシュの言葉に立ち止まる銀時。

「情けだア？ そんなもん、お前にかける位なら、飯にかけるわ。喧嘩つてのはよオ。何かを守るためにやるもんだろうが」

「ま、守るつて…君は何を守ったんだ？」

ギーシュの言葉に振り向くと真剣な表情でルイズの頭にポンポンと手を置き言った。

「俺の武士道と…」いつの心だ

そのときギーシュは銀時の中に光り輝く何かを見た。

（勝てるわけがない。自分とあの平民とでは人間の器が違います）

「僕の…負けだ」

ギーシュが言った瞬間周りから歓声が湧き起つた。

銀時はルイズを連れてさつさと中庭から去りうとしている。

「待つてくれ。君は何者なんだ？」

ギーシュが問いかけると銀時さきっぱりと言つた。

「俺ア坂田銀時…ただの侍だ」

オスマンと「ルベルは、一部始終を見終えると顔を見合せた。

「オールド・オスマン」

「うむ

「あの平民、勝つてしましましたが…しかもあつさりと」

「うむ」

「ギーシュは一番レベルの低い『ドット』メイジですが、それでもただの平民に後れをとるとは思えません。それにあの動き…あんな平民見たことない…やはり彼は『ガンダールヴ』」

「うむむ…」

「ルベルは、オスマンを促した。

「オールド・オスマン。さっそく王宮に報告したほうが…」

「それには及ばん」

オスマンは、重々しく頷いた。

「どうしてですか?」これは世紀の大発見ですよ…現代に蘇つた『
ガンダールヴ』!…」

「冷静になるのじや、ミスター・コルベール。王室のボンクラビもこの『ガンドールヴ』とその主人を渡すわけにはいくまい。そんなオモチャを与えてしまつては、またぞろ戦でも引き起こすじやろうて。宫廷で暇をもてあましている連中は戦が好きじやからな」

「ははあ。学院長の深謀には恐れ入ります。」

「ここの件は私が預かる。他言は無用じや。ミスター・コルベール」

「は、はい。かしこまりました！！」

オスマンは杖を握ると窓際へと向かつた。遠い歴史の彼方へ想いを馳せる。

「伝説の使い魔『ガンドールヴ』か…」

第5訓 万事屋をつぐへりつ（前書き）

第5訓です。

今回はかなりのキャラ壊れしております。

ちなみに作者が一番書きたかった話です。ぱつあんが出るまで我慢我慢でしたが…

楽しんでいただけると幸いです。

それでは、第5訓始まります。

第5訓 万事屋をつぐみ

ルイズ、ギーシュ、モンモランシーは食堂の真ん中のテーブルに集まっている。

「どうやら3人は銀時に呼ばれたらしい。

「（レ）主人様を待たせるなんて、何してんのよー！バカ、ギントキ」

ルイズはみるからにイライラとしている。それもそのはず約束の時間から1時間は経過しているのだから、そんなルイズを見てギーシュは薔薇を弄り肩をすぼませた。

「まあ、落ち着きたまえルイズ。ギンさんも忙しいんだろう。」

ギーシュは決闘で負けてからはギンさんと呼び、銀時を慕っていた。あの決闘でギーシュは何か思つことがあったのだろう。基本的に銀時と一緒に居たがっていた。

「そうよ。落ち着きなさい、ルイズ。あなたやギーシュはまだ良いじゃない…わたしなんて口クに面識もないのに呼びだされたのよ！

！」

モンモランシーは眉を寄せきつぱりと言つた。確かに銀時とモンモランシーは初対面に近い、ルイズは不思議に思い尋ねた。

「ねえ？モンモランシー。あんたはなんて言わされて呼び出されたの？」

ルイズの言葉にモンモランシーは遠くを見て思い出しながら語った。

「そう……あれは昨日の夜の出来事よ。わたしはお風呂上がりのためご機嫌で部屋に向かって歩いていたの。そしたら田の前からルイズ、あなたの使い魔が来て言ったのよ。一言合格だと、そして時間を言うと去つて行つたわ」

「え？……それだけ……なの？」

ルイズはきょとんとした。モンモランシーがそんな理由で1時間も待つてているとは思えない。ルイズはじつと見つめた。確かにルイズの思った通り、それだけの理由ではない。モンモランシーは銀時とある取引をしていたのだ。

「まあ、良いではないか。モンモランシーは気付いたのだよ。ギンさんの偉大さに」

薔薇を手に気障な仕草を繰り返すギーシュ。そのとき、銀時はやつと食堂にやつてきた。

「いやア、待たせたな。お前ら……ちょっと用事が入つちまつて遅れたわ」

3人は銀時の声がした方を見るとある一点をじつと見つめた。

「あの……ギントキ？ 口元がキラキラ光つてんだけど

ルイズが3人を代表して言った。

ルイズの言つとおり、銀時の口元は何故かキラキラしていた。まるで先ほどまで寝ていたかのようだ。銀時はその言葉を聞くと「ゴシ

ゴシと口元を拭つた。

モンモランシーが力強く叫んだ。何故か普段より生き生きしている。

モンモランシーのテンションに少しビビるルイズ。そんな女子たちを見るとキーシコが口を開いた。

「君たち、いい加減にしたまえ！－ギンさんに失礼ではないか」

二十一

ルイズとモンモランシーはギーシュの言葉に黙る。

「まったく…君たちギンさんは寝てたんじゃない!!…普段から口の閉まりが悪いからダラダラよだれが流れるんだ…!!」

「…うめあは…」

ギーシュの言葉に、銀時、ルイズ、モンモランシーは右ストレートをぶち込んだ。

「で？わたしたちはなんで呼ばれたのよ」

ギーシュを始末したあと、ルイズは腕を組み銀時を見つめる。それを黙つて見守るモンモランシーと早くも復活したギーシュ。

「お前ら、万事屋を作るぞ」

3人を見ると銀時はきつぱりと言つた。

「「「万事屋？」」」

銀時の言葉に3人はお互いを見合せた。誰か知つてゐる人がいるか確認したのだ。

「えつと…ルイズの使い魔…ギントキでしたつけ？」

「そうだ。銀さんや銀ちゃんでも可だ」

「では、ギンさん。万事屋とは一体なんなの？」

モンモランシーは尋ねた。ルイズとギーシュも銀時を見つめ言葉を待つた。

「それはだな……」

銀時は万事屋が何なのかを適当に説明した。

「なるほど…つまりお金を貰つて何でもやる仕事。もちろんギンさ

んがやるなり僕は手をひく

ギーシュが薔薇を持ひ頷きながら言つた。

「へえ……ギントキのやつていた仕事……楽しそうじゃなー

ルイズも意外とやる氣があるようだ。
しかし、モンモランシーは齒をぐるぐる。

「どうした? まつあん

その様子に気付いた銀時は話しかけた。

「誰がまつあん! 誰が! ってかまつあんって向ふおおおー!
! それにわたしさ手伝わないわ! ー」

「ぱつあんぱつあんだ! それよつ……まんとこ良一のか? 」

モンモランシーの葉に銀時はニヤリと笑つた。 そんな表情に怪訝
そうな顔をする。 すると銀時はモンモランシーにだけ聞こえるよつ
に囁いた。

「昨日取引でお前、言つたよな。 キザが他の女に手を出せなー」と
してほしこと

「キザって… も、も、もつたわ。 け、ナビナレと万事屋をやる」
とに向の関係が? 」

銀時は分からぬのかやれやれと肩をすくめた。 もうひとつキザと
だ。

「いいか。考えてみる。万事屋は毎日ある…それに今あいつは何故か銀さんにべつたりだ。…どうだ？女を口説く時間あるか？」

銀時の言葉にモンモランシーは田を見開いた。確かにそれでは女に手を出すことが出来ない。つといつかそんな時間さえない。しかしまだモンモランシーは納得出来ないよつだ。

「け、けど…それで何故わたしが入らなければ…」

「バカだろ、お前。万事屋の一員にならなければいつキザに会つんだ？」

「つ…？」

（やうだ。他の女を口説く時間がないところじとせつまつ自分とも会えるはずがない）

銀時はモンモランシーをじつと見つめた。相手の言葉を待つてているのだ。モンモランシーは覚悟を決めた。

「ギンさん…やつましょつ…万事屋」

「よく言つたばつあん…！」

銀時はモンモランシーの言葉に満足そうに頷いた。

こうして、銀時はルイズ（神楽）、モンモランシー（ぱつつか）、ギーシュ（モンモランシーを釣るエサ）と万事屋を再開することにした。

「そついえば、ギントキ。どいで万事屋をやるの？わたしたちの部屋では流石に出来ないわよ」

万事屋メンバーが確定するとふとルイズが言った。万事屋という仕事をするのなら部屋が必要なのだ。しかし、空いている部屋がない。

「大丈夫だ。当てがある。俺ア、その場所に行つてくるからお前らはこの依頼をこなしてくれ」

銀時の言葉に3人はピクッと反応した。当ての場所も気になるが依頼も気になる。つと/or>うか何故さつき結成したばかりの万事屋なのにどうしてもう依頼があるのでどうか。

「い、依頼主は誰なの？」

記念すべき初めての依頼だ。ルイズが緊張氣味に言った。モンモランシーとギーシュもゴクリと唾を飲む。

「もちろん…俺だ」

「「あんたかああああ…！」」

銀時は良い顔で言つと、ルイズとモンモランシーが同時に突つ込んだ。

「まあ、待ちたまえ。ギンせんのことだ、重要な依頼なのだよ。君たちは依頼内容も聞いてないだろ？」

ギーシュが言つとルイズとモンモランシーは顔を見合せた。

「やつね。ギーシュの言つとおりだわ。ギンさん依頼内容を言つて
ちよつだい」

モンモランシーがギーシュの言葉に頷きながら言った。

銀時は話し始めた。どうやらギーシュと決闘をした日、このメイドとケーキが残つたらもらえるという約束をしていたらしい。決闘が終わると銀時は「機嫌で食堂に戻ってきたのだが、メイドは謝つてきた。最初はメイジから逃げたことを謝つてるだけなのだが思つていてが、何やら違う。よくよく聞いてみると誰かが残つたケーキを全て食べてしまつたらしい。銀時は必死に探したのだがほとんど生徒が決闘を見に行つていたので全く目撃者が居ない。それでもなんとか食べたのは少年メイジだとわかつたのだ

「ちよ、ちよつと待ちなさい……ま、まさか依頼内容つて……」

銀時の話を聞きながらモンモランシーは嫌な予感がした。

「やつ、その少年メイジを探しだして銀さんの元へ連れてきてほしい」

「ふ、ふざけないで……そ、そんな」

「許せないわ……」

「やつ……許せな……え?ル、ルイズ?」

モンモランシーが銀時の依頼内容に文句を言おうとルイズがモンモランシーの言葉を遮つた。それどころか様子が可笑しい。

「ギントキー！その依頼受けるわ！！許せないもの、もしかもしも
クックベリーパイを食べられたら……捜して始末するわ！！」

グッと握り拳を作るルイズ。そんなルイズに驚くモンモランシー。

「ま、待ちながこよ……ルイズ何を言つているの……」

「落ち着きたまえ。モンモランシー、僕に任せらるんだ

モンモランシーの慌てようギーシュが前に出た。女つたらしであるがこのうにつ時にほ頼りになるのだ。（ギーシュが頼りになるかはモンモランシーの偏見です）

「ギンちゃん……」

「あ？ なんだよ？」

モンモランシーは、銀時とギーシュを見つめる。

「その少年メイジの特徴は他にないのかい？」

「あ、そつちかあああああ……」

ギーシュの検討違いの質問にモンモランシーは叫んだ。そんなモンモランシーにピースしてどんなもんだいっていつた顔していくるギーシュが凄くムカつく。あとで殴つてもいいだろつか？

「それじゃあ、ぱつあん。あとは頼んだぜ」

モンモランシーが考えていると銀時がポンと肩を叩いた。どうやら

今から部屋確保のため動くらしい。

「え？ めじょ… ギンさん、 待つ…」

しかし、銀時はすでに行ってしまった。

「ああ、モンモランシー。聞き込みをしようではないか

「そうよ。ギントキが帰つてくるまでに逃げられないよう犯人を半殺しにしなくっちゃ…」

ガシッガシッと両腕を掴まれた。逃げられない。この可笑しい二人と行動をしなければいけないのだろうか。ルイズに至つては怖いことをサラッと言つてゐる。考へてみるとズリズリと引きあらわれる。

(なんで？なんでわたしこんなことになつてゐるの？も…も…)

「もういやああああああ…」

トリステイン魔法学院の食堂でモンモランシーの声が響いた。

モンモランシーが叫んでいたが、銀時は学院長室の前に居た。やはり学院で何かをするには学院長室が一番だ。そう思つてここまで来たのだ

「失礼します。万事屋でーす。」

オスマンは突然ノックもせずに入ってきた男に驚いた。しかもそれは先日決闘を見た『ガンダールヴ』になつた男だつたのだからおさら。

「ん？…君は、確かミス・ヴァリエールの使い魔くんじゃったかな？」

よく知ってるはずなのに知らない振りをするオスマン。

「へえ…俺のこと知ってるのか。じゃあ、話は早いや。とりあえづ…じいさんに頼みがあるんだがよオ」

銀時はスタスタと部屋に入り学院長のテーブルに腰かけた。行儀の悪い奴だ。

「な、なんじや…」

銀時の様子にオスマンは眉を寄せた。なにを頼みに来たのかはわからぬが、偉そうだ。

「とつあえずよオ。部屋明け渡せ」

についりと言う銀時にオスマンは目をパチパチとさせた。

(え? ここの駅は、今なんと言つた? … こやこやこや、聞き間違にじやる。こいつ見えても私はここの病院の中で一番偉こんじや。こいつなんでもかのよつなこと…)

「おーい、反応ねえな。ヒゲ引っ張るぞ！」

言いながら銀時は思つたりて長いヒゲを引つ張つた。

「いだつ…こだだつ…ちょ…止め

オスマンは涙田でヒゲを引つ張られながら黙つた。さつきのは、聞き間違ひではないとそしてこのまま反撃しないとヒゲを龜られてします。

オスマンはヒゲを引つ張られながら杖へと手を伸ばそうとした相手は『ガンドールヴ』。魔法で対抗してもいいだろつと黙つた。しかし、伸ばした手は空を掴んだ。

(つ、杖がない!—)

「探しものはこれか?」

オスマンが焦つていると銀時はオスマンの杖を出した。なんとヒゲを引つ張つた時に素早くすつていたのだ。

相変わらずの恐るべき早業である。

「それにしても杖に手を伸ばしたことは遠慮いらねえよなア」

銀時の言葉にビクッと体を震わすオスマン。

「ま、待つのじゃ…さ、君は年寄りを大事にする若者じゅう…いや、や、やうに決まつておる」

ジリジリヒゲを抜く素振りをしながら近付いてくる銀時にオスマンはそうであつてくれつというふうに言つた。

しかし、普通に考えれば年寄りを大事にする人間がヒゲを引つ張る

わけがない。銀時は歩みを止めなかつた。

「い、いざやああああつーー！」

学院長室にオスマンの悲鳴が響いた。

ミス・ロングビルは驚いた。そもそも宝物庫を見に行くためオスマンの様子を見に来たのだが、学院長室から悲鳴が聞こえたのだ。そつと、ドアから覗いて見ると銀髪の男が学院長を……あまりにも酷い有り様なので上手く言葉に出来ない。

（よく分からぬけど、これはちよづどいいわ）

ミス・ロングビルはにやりと笑うと宝物庫に向かつた。

宝物庫は学院長室の一階下にある。階段を下りて、鉄の巨大な扉を見上げる。扉には、ぶつとい門がかかっている。そしてその門は巨大な錠前で守られていた。

ここには、魔法学院成立以来の秘宝が収められているのだ。ミス・ロングビルは宝物庫に着くと辺りを見渡した。そして誰も居ないことを確認すると杖を振つた。

「ダメね。相当強力な『固定化』の呪文がかけられているわね。私が得意な『鍊金』の呪文でも開かないとは」

ミス・ロングビルは、かけたメガネを持ち上げ、扉を見つめていた。

そのとき、階段を上がってくる足音に気づく。慌ててポケットに杖をしました。現れたのは、コルベールだった。

「おや、ミス・ロングビル。ここでなにを？」

コルベールは、間の抜けた声で尋ねた。ミス・ロングビルは愛想のいい笑みを浮かべた。

「ミスター・コルベール。宝物庫の目録を作りつゝと思って来たのですが……オールド・オスマンから鍵をお借りするのを忘れてしまって……まあ、目録作成は急ぎの仕事ではないし……」

そう言つとミス・ロングビルは立ち去つたときびすを返した。

「ま、待つて下さい。ミス・ロングビル」

「なんでしょう？」

照れくさそうに、ミスター・コルベールは口を開いた。

「もし……その……ようしかつたら駄食を」「一緒にいかがですか？」

ミス・ロングビルは少し考へると、につけて微笑んだ。

「ええ、よろこんで」

そのまま一人は並んで歩き出した。

「ねえ、ミスター・コルベール『破壊の杖』を存知？」

「ああ、見たことがありますぞ。説明しようのない奇妙な形をしてましたな」

「そうですか。それにしてもここの宝物庫は立派ですわね」

「そうですね。あらゆる呪文に対抗できるよう設計されたそうですぞ……ですが……僕は一つだけ弱点があるとおもうのです……」

「まあ、無敵の宝物庫の弱点とは何ですか？」

ミス・ロングビルは、コルベールを頬もしげに見つめた。

「それはゴーレムなどを使った物理的な力です」

コルベールは、得意げに、ミス・ロングビルに実説を語った。聞き終わつたあと、ミス・ロングビルは満足げに微笑んだ。

「大変興味深いお話でしたわ。ミスター・コルベール」

一方こちちは、哀れなぱつつかん……もといモンモランシーが率いる
万事屋メンバー。

「見つからないわねえ。ケーキ泥棒」

ルイズがボソッと呟いた。どうやら先ほどよりは落ち着いたらしい。

「いやいやいや、別に泥棒ではないからね、ルイズ。」

相変わらずモンモランシーは突っ込んでいる。

「それにしてもやのやのやつのおやつの時間だ。ギンさんが帰つてくれるんじゃないかい？」

銀時はケーキを食べられてこのよだれの依頼をしたのだ。おやつの時間には絶対に帰つてくるだらう。

キー・シニの言葉にルイスとモンモランシーは眉を寄せた。ルイスは銀時に主人として良いとこを見せるため、モンモランシーは任された責任感のため、二人とも銀時が帰つてくるまでに犯人を捕まえたいのだ。

そのとき、後ろから風邪をひいたかのようなガラガラ声がした。

「おやっせここののはギーシュにキンモランサー。それば元のルイズじゃないか

現れたのはルイズ曰わくかぜつぴきのマリコルヌだ。何故かゼ口を強調して言った。

「何よ！－あんたなんてかぜつぴせのマリ「ルヌじゃない」

ルイズは眉間にしわを寄せて言い返した。そんなルイズにモンモランシーは止めた。どうやら気になることがあるらしい。

「ちょっと…ちょっと待つて、マリコルヌ。あなたルイズにゼロなんて言つていいいの？」

実はギー・シューと銀時の決闘のあと、決闘を見ていた生徒たちの中で

はルイズをゼロだとバカにしないといつ暗黙の了解が出来ていた。何故かというと銀時が決闘の最中に言った言葉だ。あれはルイズをバカにしたことを怒っていた。なので、決闘を見ていた生徒は安易にルイズをバカにしない。バカにしたら最後自分の身が危ないと心に刻んでいる。それなのにここにいるクラスメートはルイズをバカにしている。

「モンモランシー。何を言つているんだ?『ゼロをゼロと言つて何が悪い』

「マリコルヌは鼻で笑つた。ルイズは何かを耐えるように握り拳を作りフルフルと震えた。

「マリコルヌなんてことを言つんだい?ルイズはギンさんの主人だ

「ギンさん?ああ、あの平民か。ギーシュ、お前にやべりしたんだ?最近あの平民とよく一緒にいるじゃないか?」

ギーシュはマリコルヌをたしなめようとする。すると銀時まで平民と言つしまつ。モンモランシーは確信をした。マリコルヌは決闘のあつた広場には居なかつたと。

「マリコルヌ。あなた、先日のこの時間何をしていたの?」

モンモランシーはまさかと思い聞いた。マリコルヌは思はず出すように言った。

「もちろんおせつケーキを食べてたよ。あの日は何故かケーキがたくさん残つてて勿体無いから全部頂いたなあ

「

「マリコルヌの面白に怒っていたルイズもギーシュもモンモランシーも田をパチクリさせた。

そしてモンモランシーは大きな声で言つ。

「確保おおおお……」

「ぐほつ……」

ルイズは思いつきマリコルヌを殴つた。ギーシュは造花の薔薇の杖を振り魔法でロープ出して縛る。

マリコルヌは難無く捕まつた。ちょうどその時、銀時が帰つてきた。

「よお、お前ら調子はどうだ？」

ルイズとギーシュは銀時を見るとマリコルヌを差し出した。

「へえ……じつは……じつが俺のケーキを」

差し出された相手を見ると銀時は眉を寄せ口の端をひきつらせた。今にもケーキの恨みが爆発しそうだ。

「やういえば、ギンさん。万事屋の部屋はどうなつたの？」

モンモランシーはマリコルヌにゆっくり近付く銀時に聞いた。

「ああ、学院長と交渉してきたから大丈夫だ」

そつ言いながら何故か何かをむしるよつた仕草をする銀時。

「そ、そつ……」

何故かは分からぬが深く聞かないほうがいいと思った。
ふとその時、銀時を見ているサラマンダーに気づいた。

(あら? あれはキュルケの…)

銀時に云々よつとするもやめた。マリコルヌに制裁を下していたからだ。ゼロとバカにされたせいかルイズも一緒に殴つてあり、ギーシュはキラキラと尊敬した瞳で銀時を見つめていた。

(これから何か大変なことが起こりそうね)

モンモランシーは、マリコルヌの悲鳴を聞きながら、メイドの持つ
てきてくれた紅茶を飲み、心中で呟いた。

第6訓 女性は積極的でないのがいい（前書き）

やつと、出来ました。いやア難産でしたよ。

途中で氣分転嫁などもしてましたが、氣分転嫁：いいものですね

つとそれでは、始まります。

第6訓 女性は積極的でないのがいい

万事屋を設立したその夜、銀時はベロベロに酔っ払っていた。どうやらマリコルヌから罰として奪った金を使い食堂で酒を飲んでいたようだ。

もちろん像が動き出すギリギリの時間までだが、ちなみに余談だが、マリコルヌは金を奪われブタ小屋へと放り込まれたことを告げておいた。

「うーん…

銀時はフラフラと千鳥足でルイズの部屋に向かつ。

銀時が部屋に向かつていると何故かルイズの部屋の前にはキュルケの使い魔サラマンダーのフレイムがいた。銀時は眠そうな眼を押し上げじっと見つめた。

「お前……どつかで見たことあんなア」

銀時は眉を寄せて呟く。するとフレイムは銀時の着流しの先をくわえた。

「オイオイオイ、銀さん…と遊びてえのか? けど…ダメ。俺ア眠い

銀時はルイズの部屋に入ろうとするもグイッグイッと引っ張られた。

「ちよ……なんだよ…」

眉を寄せ、フレイムが引っ張つてる方向を見た。少し先のドアが開いている。

「？…あそこに行けつてか？」

銀時が言つとフレイムは頷くよつと動いた。仕方がなしについていく銀時。実際眠くて眠くて仕方がないのだが、意外と動物には優しいのだ。

フレイムについて行き、ドアをくぐつた…中は真つ暗で何も見えない。フレイムのいる場所だけ尻尾の火でぼんやりと明るく光つてゐる。暗い部屋から誰かの声がした。どこかで聞いたことがある。

「扉を閉めて、こちらにいらっしゃい」

銀時は眠たくあまり動かない脳を動かし考えた。なんか嫌な予感する。銀時がいつまでもドアを閉めないとしごれを切らしたのかフレイムが閉めた。器用な使い魔だ。周りは真つ暗闇…しばらくすると指を弾く音が聞こえた。

すると部屋の中に立てられたロウソクが、灯つていく。銀時の近くに置かれたロウソクから順に火は灯り、キュルケのそばのロウソクがゴールだつた。

道のりを導くかのように、ロウソクの灯りが浮かんでいる。ぼんやりとベッドに腰かけたキュルケの姿が見えた。ベビードールといつのだらうか、そういう誘惑するための下着をつけていふ。つとこつとそれしかつけていない。

「そんなところに突つ立つてないで、いらっしゃいな」

キュルケは、色っぽい声で言つた。並みの男なら落ちていただろう。しかし、銀時は並みの男ではない。それに今は眠くて眠くて仕方がない。

キュルケは首を傾げた。いつまでたっても銀時が近づいてくる様子がない。すると銀時が口を開いた。

「うつーか。お前…誰？」

キュルケは愕然とした。今まで、男を忘れたことはあっても忘れられたことなんて一度たりともないのだ。

なのに忘れられてしまった。キュルケの胸が熱く燃えたときのを感じる。どうやら恋の炎がいつそう燃えてしまったようだ。

「あたしは、キュルケ。微熱のキュルケよ」

キュルケは一回田の自己紹介をした。銀時はじつと…キュルケを見つめた。

「で？ そのキュルケが俺になんの用だよ」

銀時が欠伸をかみ殺しながら言つ。キュルケはその言葉に待つてました。つとまくし立てながら近付いた。

「あなたは、あたしをはしたない女だと思つでしょ？ けど思われても、しかたがないの。あたしの「うつ」は『微熱』」

（微熱つてか発情つぼくねえ？）

銀時は黙つたままそつ思つていた。

「あたしはね、松明みたいに燃え上がりやすいの。だから、いきなりこんな風にお呼びだしてしまつ。わかってる。いけな

「…でもね。あなたはきっとお許しくださると想つわ

キュルケは潤んだ瞳で銀時を見つめた。しかし、銀時は眉を寄せる。

「要領得ねえなア…つまりテーマは何が言いてえんだ」

眠くて、しかもだんだんと気持ち悪くなつてきた。銀時はとつても不機嫌だ。するとキュルケは銀時の手を握つてきた。

「恋してるのよ。あたし…あなたに、恋はまったく突然ね」

キュルケの言葉に銀時は驚き目を見開いた。しかし、次の瞬間キヨロキヨロと周りを見渡した。

「だ、騙されねえ…騙されねえぞ…!…隠しカメラはまだございだ」

「か、隠しカメラ?」

キュルケはきょとんとした。彼は何を言つているのだひつてか隠しカメラって何?といつた感じだ。

そんなキュルケに銀時はキッパリと言つた。

「そんな顔しても分かってんだよ…!…お前これ、あれだる。モテない男子を呼び出して告白し、男子が本気にしてそなわけないだろつと女共が出てくる。女共は楽しいかもしけないけど、やられた男はたまたもんじやねえ…!…トラウマもんだぞコラ」

キュルケは銀時を見つめて啞然とした。この男はどんな青春をおくつていたんだろう…しかし、このままにしておくわけにはいかない。

「う、違つわ！…信じて、あたしは本当にあなたに恋をしているの」

キュルケは真剣な顔で銀時を見つめる。そんなキュルケに流石の銀時も半信半疑で頷いた。

「あなたが、ギーシュを倒した時の姿かっこ良かつたわ。それを見て痺れたのよ！…信じられる？痺れたのよ！…情熱…ああ、情熱だわ！」

「……」

銀時は無言で聞いていた。

「一つ前の『微熱』はつまり情熱なのよ！…その日から、あたしはぼんやりとしてマドリガルを綴つたわ。マドリガル、恋歌よ。それにギントキ。あなたが毎晩あたしの夢に出てくるものだから、フレイムを使って様子を探らせたり…ほんと、あたしつてばみつともない女だわ。でも、全部あなたのせいなのよ」

銀時は眉を寄せた。

（なんてこった…「ライシはあのドムストーカーみてえな」と言つてやがる。俺のこと好きになつてくれる奴は口クな奴が居ないんだどうか）

銀時が考へていると沈黙を肯定と取つたのかキュルケが寄り添つてきた。ほのかに香水だらつか何かの匂いがする。銀時は口に手を当てる。酒が入つてゐせいかその匂いで気分がより悪くなつてしまつたのだ。

「ちよ……離れ」

銀時はキュルケを離れさせようとした時、窓の外が叩かれた。そこには、恨めしげに部屋の中を覗くハンサムな男の姿があった。

「キュルケ……待ち合わせの時間に君が来ないから来てみれば……」

「ペリッシュン……ええつと、一時間後に」

「話が違う……！」

「ここは確か三階である。ビリヤードペリッシュンと呼ばれたハンサムは魔法で浮いているらしい。」

キュルケはうるさそうに、胸の谷間に差した派手な魔法の杖を取り上げると、そちらのほうを見もしないで杖を振った。

ロウソクの火から、炎が大蛇のように伸び窓ごと男を落とした。

「まったく、無粋なフクロウね。彼はただのお友達よ。あたしが一番恋してるのはあなたよ。ギントキ」

銀時を見つめキュルケはきっぱりと言った。いつも銀時ならここで突っ込んでいるが、今はそんな余裕ない。すると……今度は窓枠が叩かれた。

見ると、悲しそうな顔で部屋の中を覗き込む、精悍な顔立ちの男がいた。

「キュルケ……その男は誰だ……今夜は僕と過ごすんじゃなかつたのか……！」

「ステイクス！…ええと、四時間後に」

「そいつは誰だ！…キュルケ！」

怒り狂いながら、ステイクスと呼ばれた男は部屋に入つてこようとした。キュルケはうるさそうに再び杖を振つた。再び口ウソクの火から炎が伸び、男は落ちていつた。

「今のは友達というよりただの知り合いよ。とにかく時間をあまり無駄にしたくないの。夜が長いなんて誰が言つたのかしら…瞬きする間に太陽はやってくるじゃないの…！」

そう言つとキュルケは銀時に抱き付いた。銀時の気持ち悪さは倍増だ。そのとき、窓から悲鳴が聞こえた。

窓枠で、三人の男が押しあいへしあいしている。三人は同時に同じセリフをはいた。

「…キュルケ！…そいつは誰なんだ…恋人はいな…って言つてたじやないか…！」

「マニカン！…エイジャックス！…ギムリ…ええと六時間後に」

キュルケは面倒そうに言つた。

「…朝だよ…！」

三人は仲良く唱和した。中々の突つ込みである。キュルケはサラマンダーに命令した。

「フレイム……」

きゅるきゅると部屋で寝ていたサラマンダーは起き上がり窓に向かつて炎を吐いた。

三人は仲良く落ちていった。

「今のは知り合いでなんでもないわ。とにかく……愛してる……」

キュルケは銀時に抱き付いたまま唇を近付けた。しかし、銀時は相手を離せるとフラフラ窓に向かつ。気持ち悪さが限界に達したのだ。

「おぼろろうろおろ……」

銀時は窓から外に向かつて吐いた。キラキラと光るものが銀時の口から出てくる。（お食事中の皆様申し訳ございません）

銀時が吐いていると何故か下から悲鳴らしき声が聞こえた。きっと空耳だの……あつ、そつといえばキュルケが男たちを落としていたよつな……いや、空耳だ。空耳です。

銀時がしばらく吐いていると、突然ドアがバタンッともの凄い勢いであけられた。ネグリジエ姿のルイズが立っている。艶やかに部屋を照らすロウソクを、ルイズは一本一本忌々しそうに蹴り飛ばしながらキュルケに近付いた。

「キュルケ！－！あんた何わたしの使い魔を連れ込んでるのよ－！」

ルイズは銀時をチラツと見た。しかし薄暗くて何をしているのかわからぬ。ちなみに銀時はいまだに吐いてます。

「しかたないじゃない。好きになつちやつたんだもん……恋と炎は

フォン・ショルプストーの宿命なのよ。身を焦がす宿命よ。恋の業火で焼かれるなら、あたしの家系は本望なのよ

キュルケは両手をすくめてみせた。ルイズはわなわなと震えてきつぱりと言つた。

「ギントキ来なさい！…帰るわよ」

そのとき銀時は吐き終わりキュルケの部屋のカーテンで口元を拭いてボオーとしていた。もう目を開けて寝ているのではないかというぐらいためが虚ろだ。

そんな状態でルイズの声を聞いたのだ

「……ぐら？…」

どうやら、誰かと間違えているようだ。フラフラしながらルイズへと近付く。

そんな銀時を見るとルイズは満足げに銀時を連れてキュルケの部屋から出て行つた。

キュルケの部屋から出てしばらぐすると銀時がルイズに抱き付いた。

「なつ！？」

ルイズは驚いて目を見開く。

「ん…もつ、無理。銀さん眠い…部屋まで連れてって

銀時の頭の中では、ここは万事屋の玄関で神楽に抱きつこうとも
りなのだろ。実際にはルイズなのが。

「な、な、何言つてんのよ…バカギントキ

ルイズは微かに頬を染めて銀時を離れさせようとする。

「なんだよ。いつもみたいに銀ちゃんつて呼べよオ」

しかし銀時は離さない。それどころかべつたりとくつ付いてくる。
今の銀時は酔っ払つていつも以上に娘に絡んでくる。親父のよ
うなものだ。

「あ、あ、あんたをギ、ギ、ギンちゃんなんて呼んだ覚えないわア
アア」

ルイズは先ほどより、顔を真っ赤にした。しかし、銀時の次の言葉
で固まった。

「ん…つれなこと言つなよ。今日も今日も可憐に。可憐い神楽
ちやーん」

いつもはこう言えは仕方がなさげに部屋まで運んでくれるのだ…し
かし、今回は違つた。ルイズは思いつきり銀時を蹴つて離したのだ。

「あだつ、神楽何しやが…」

流石の銀時も眠気が飛び蹴つた相手を見る。

「こ、こ、こ、このバ、バカ天パは…」「ご、ご、ご主人様と誰を…誰を間違えてだ、だ、抱きついたのかしら」

ルイズはプルプルと震え怒っていた。そして懐から鞭を取り出した。普通の鞭ではない馬用の鞭だ。通常の鞭より短く当たるとめちゃくちゃ痛い。そんなルイズを見て顔を青くする銀時。

「ル、ルイズ？ いえ…」「ご、ご主人さま…そ、その鞭は…」

「バ、バ、バカな天パを躰するためよ」

そう言いながら、ルイズは銀時に近付き鞭を振り上げた。

「ちょ…あ…ぎやあああああ…！」

この夜、一番大きな悲鳴がこのトリステイン魔法学院の寮にこだました。

第6訓 女性は積極的でないのがいい（後書き）

今回は、告白された後の銀時の反応がどうしても思いつかず、何人かの友達に相談して出来ました。

友達様々です。ありがとうございます、フレンド

第7訓 剣はしゃべれても剣（前書き）

神楽「お待たせしたアル。やつと完成したよつネ」

新八「ほんと遅かったよね。所で神楽ちゃん。今日は陸さんどうしちやつたの？」

神「良い質問ネ。陸は今大変アル！！」

新「大変？ 一体何が…」

神「さつき…さつき陸は銀魂のアニメ見てたヨ。その話で銀ちゃん笑つたネ。それ見て鼻血出して倒れたアル」

新「オイイイ！…何やつてんだあのアマアアアア…！」

神「ちなみに陸の最後の言葉は『銀ちゃん萌えええ…』だったネ」

新「いや、最後つて…鼻血で死ぬかアアアア…！」

（あまりの可憐さにマジ鼻血出そうでした。つてなわけで始まります）

第7訓 剣はしゃべれても剣

キュルケは、昼前に目覚めた。今日は虚無の曜日で学院は休みだ。
(ギントキは今何してるかしら)

自分が恋した相手のことを考えウキウキしながら化粧を始めた。化粧を終え、自分の部屋から出てルイズの部屋の扉をノックした。しかし、いくら待つてもノックの返事はない。開けようとしたが鍵がかかっていた。

キュルケはドアに『アンロック』の呪文をかけた。鍵が開く音がする。本来、学院内では『アンロック』の呪文を唱えることは重大な校則違反なのだが、キュルケは気にしない。恋の情熱はすべてのルールを無効とする、というのがツェルプスター家の家訓なのであった。

キュルケが部屋に入ると誰も居ない。眉を寄せ部屋を見回した。

「相変わらず、色気のない部屋ね…」

ルイズの鞄がない。どこかに出かけたのだろうか。窓から外を見回した。ちょうど門から馬に乗つて出て行く二人の姿が見えた。ルイズと銀時だ。

「なによー、出かけるの?」

キュルケはつまらなそうに呟くが何かを思い付きルイズの部屋を飛び出した。

タバサは寮の自分の部屋で、読書を楽しんでいた。青みがかつた髪とブルーの瞳を持つ彼女は、メガネの奥の目をキラキラと海のよう輝かせ本の世界に入っている。タバサは年より四つ、五つも若く見られることが多い。身長は小柄なルイズより五センチも低く、身体も細かつたからだ。しかし、まったくそんなことは気にしていない。他人からどう見られるかということより、とにかく放つておいて欲しいと考えるタイプの少女だった。

タバサは虚無の曜日が好きだ。何故なら自分の世界に好きなだけ浸つていられるからである。今日も本の世界に入っているとどんどんドアが叩かれた。タバサはとりあえず無視をした。すると激しく叩かれ始めた。タバサはめんどくさそうに小さな唇を動かしてルーンを呴き、自分の身長より大きい杖を振った。『サイレント』風属性の魔法である。その魔法により彼女の集中を妨げるノックの音は消え去った。

タバサは満足して本に向かつた。しかし、ドアは勢いよく開かれた。入ってきたのは、キュルケだつた。彼女は一言、三言何か喚いたが『サイレント』の魔法がかかつているため声がタバサに届かない。キュルケはタバサの本を取り上げ、自分に振り向かせる。タバサは無表情にキュルケの顔を見つめていた。その顔からはいかなる感情も窺えないが歓迎していないことは確かであった。

しかし入ってきたのはタバサの友人キュルケである。しかたなく、タバサは『サイレント』の魔法を解いた。

「タバサ。今から出かけるわよーー早く支度してちょうだいーー！」

タバサは短くぼそつとした声で自分の都合を友人に述べた。

それで十分であると言わんばかりに、キユルケの手から本を取り返そうとした。キユルケは高く本を上げる。そうするだけでタバサの手は本に届かない。

「わかつてゐる。あなたにとつて虚無の曜日がどんな日だか、でも今はね、そんなこと言つてられないの。恋なのよ！恋！！」

それでわかるでしょ？と言わんばかりのキユルケの態度であるが、タバサは首を振つた。キユルケは感情で動くが、タバサは理屈で動く。どうにも対照的な二人である。そんな二人は何故か仲がよい。

「そうね。あなたは説明しないと動かないのよね。あたしね、恋したの！！でね？その人が今日、につくいヴァリエールと出かけたの！！あたしはそれを追つて、一人がどこに行くのか突き止めなくちやいけないの！！わかつた？」

タバサは首を振つた。どうして自分に頼むのかわからない。

「出かけたのよ！！馬に乗つて！！あなたの使い魔じやないと追いつかないのよ！！助けて！！」

キユルケはタバサに泣きついた。タバサはやつと頷いた。

「ありがとう……じゃ、追いかけてくれるのね！！」

タバサは再び頷いた。そして窓を開け口笛を吹いた。それから窓枠によじ登り、外に向かつて飛び降りた。キユルケもそれに続いた。落下する二人をばつさばつさと力強く飛ぶウインドラゴンが受け止

めた。タバサの使い魔ワインドーラ「ゴンの幼生シルフィードだ。

「どうちっ？」

タバサが短くキュルケに尋ねた。キュルケが声にならない声をあげた。

「あ……わかんない……慌てたから」

タバサは別に文句をつけることなく、ワインドーラ「ゴンに命じた。

「馬一頭。食べちゃだめ」

ワインドーラ「ゴンは短く鳴いて力強く翼を振り始めた。

トリステインの城下町を、銀時とルイズは歩いていた。魔法学院からここまで乗つてきた馬は町の門のそばにある駅に預けてある。銀時は身体が痛くてたまらなかつた。何故なら昨日酷い目にあい、今日は久しぶりに馬にまで乗つたのだ。おまけに一日酔い。

「腰いてえ……頭もいてえ」

そうぼやきながらひょこひょこと歩く。ルイズは眉を寄せて銀時を見つめた。

「情けないわねえ。馬くらいで……それに頭は自業自得でしょ……」

「ううせえ。大体二日酔いの人間を三時間も馬に乗せるな」

「まさか歩くわけにはいかないでしょ」

ルイズの言葉に銀時はため息をついた。
何故、銀時とルイズが城下町に来たかと朝ルイズに叩き起こ
された銀時は、なんやかんやで剣を買うことになっていた。
まあ、取り敢えず剣を買うため城下町にやつてきたのだ。

銀時は腰を擦りながら辺りを見回した。

「狭えな」

「狭いって、これでも大通りなんだけど」

「……路地裏じゃなくてか？」

道幅は五メートルもない。そこを大勢の人に行き来するものだから、
歩くのも一苦労である。

「ブランドン街。トリステインで一番大きな通りよ。この先にトリ
ステインの富殿があるわ」

「富殿に行くのか？」

「女王陛下に拝謁してござるのよ」

ルイズの言葉に銀時は少し考え一タリと笑う。

「そりゃ、もちろん… 勇者として宝物庫の宝を全部戴く

「戴くなアアア… 勇者じゃなくて盗賊じゃない…」

ルイズは頭に手を当て呆れたようにため息をついた。

「あんたは絶対富殿に行かせないわ。… 盗賊といえば、スリが多いんだつた。あんた、上着の中の財布は大丈夫でしちゃうね？」

ルイズは、財布は下僕が持つものだつと言つて、財布を銀時に持たせていた。

「あ？ あるぜ。 大体スラレたらスリ返してやらア」

銀時は腕を振りながらきつぱり言つ。ルイズは顔をしからめた。

「何言つてるの… 魔法を使われたら、一発でしょ

「貴族がスリなんかすんのか？」

銀時が今まで見てきた貴族は無駄にプライドが高くスリなどしそうにないので聞いてみた。

「貴族は全員がメイジだけど、メイジのすべてが貴族つてわけじゃないわ。いろんな事情で勘当されたり家を捨てたりした者が傭兵や犯罪者になつたりするんだから」

「ふうーん。なるほどな… そういうやまだつかねえのか」

ルイズの話を聞きながら歩くも長いこと歩いているため確認として

聞く。

「 イハちよ。ペモンの秘薬屋の近くだつたから、この辺なんだけ
ど…」

銀時の言葉にルイズはさらに狭い路地裏に入り辺りをキョロキョロ
見回した。

「あ、あつた」

見ると、剣の形をした看板が下がつていた。銀時とルイズは石段を
上がり羽扉をあけ、店へと入つていった。

店の中は昼間だというのに薄暗く、ランプの灯りがともつていた。
壁や棚に所狭しと剣や槍が乱雑に並べられ、立派な甲冑が飾つてあ
つた。

店の奥で、パイプをくわえていた五十がらみのオヤジが入つてきた
ルイズを胡散臭げに見つめた。

「 旦那。貴族の旦那。うちはまつとうな商売してます。お上に日
をつけられるようなことなんか、これっぽちもありませんや」

「 密よ」

銀時は怪しそうにオヤジを見るもルイズは腕を組んで言った。

「「いつやおつたまげた。貴族が剣を……おつたまげた……」

「どうして？」

「いえ、若奥さま。坊主は聖具をふる、兵隊は剣をふる、貴族は杖をふる、そして陛下はバルコニーからお手をおふりになると相場は決まっておりますんで」

「使うのはわたしじゃないわ。使い魔よ」

「忘れておりました。昨今は貴族の使い魔も剣をふるようすで

主人は、商売つ氣たつぶりにお愛想を言つた。それから銀時をじろじろと眺めた。

「剣をお使いになるのは、この方で？」

銀時は何か言いたそうにルイズを見るがルイズは頷き、言つた。

「わたしは剣のことなんかわからないから。適当に選んでちょうだい」

主人はいそいそと奥の倉庫に消えた。

「おい、ルイズ」

「何よ。ギントキ」

「「…………」、すげえオヤジが怪しいんだけど……ってかガラクタばっかだし

銀時の言つとおり店に飾られた剣は鋒び付いており使えそうにない。あつぱり言ひ銀時にルイズは眉を寄せた。

「何言つてゐる。大丈夫だからわたしに任せなさい……。」

銀時が言つもルイズは聞く耳を一切もたない。そういうふうに主人が細身の剣を持つて現れた。

一メイルほどの長さの華奢な剣である。片手で扱うものらしく、短めの柄にハンドガードがついていた。

「そういうや、昨今は富廷の貴族の方々の間で下僕に剣を持たすのはやつておりましてね。その際にお選びになるのが、このようなレイピアですか？」

確かにきらびやかな模様がついていて、貴族に似合ひの綺麗な剣だつた。

「貴族の間で、下僕に剣を持たすのがはやつてゐる？」

ルイズは尋ねた。主人はもつともらしく頷いた。

「へえ、なんでも最近このトリステインの城下町を盗賊が荒らしておつまして……」

「盗賊？」

「そうだが。なんでも『士くれ』のフーケとかいう、メイジの盗賊が貴族のお宝を散々盗みまくつてゐるつて噂で。貴族の方々は恐れて、下僕にまで剣を持たせる始末で」

ルイズは盜賊には興味がなかつたので、じろじろと剣を眺めた。

「ギントキ、ギンヘー、

剣を眺めながら銀時に聞く。

「いらねえ。大体俺には洞爺湖があるしよオ」

銀時がきつぱり言つと店の主人が口を出した。

「お言葉ですけど旦那。そんな木の棒なんかこの剣の足元にも及びませんぜ」

「へえー、試してみるか。この木刀でその剣が斬れるかどうか」

銀時の言葉に主人はレイピアを置いた。やれるならやつてみるといった感じだ。

銀時はにんまりと笑うと木刀を腰から抜き置かれたレイピアを掛けて振り下ろした。

パキッと軽い音を立てレイピアは簡単に真つ二つになつた。

「「え?」

ルイズと主人は目をまん丸くさせた。木刀で剣を斬るなんて非常識なこと出来るはずないと思つていたのだ。

「ルイズ。やつぱ他んどこ行こひが」

銀時はルイズにきつぱつと並んで店を出ようとする

「ま、待つてくれ！－もつと貴族に相応しい良いものがある」

主人は我にかえると銀時を引き止めた。せっかく来た力モだ。何も買わせず帰すのは店の主人としてのプライドが許さない。

主人は奥から一・五メイルはあろうかという大剣を持つてきた。柄は両手で扱えるように長く、立派なこしらえである。ところどころに宝石が散りばめられ、鏡のように両刃の刀身が光っている。見るからに切れそうな頑丈な大剣であった。

「店一番の業物でさ。貴族のお供をさせるなら、このぐらいは腰から下げて欲しいのですな」

「おいくら？」

ルイズは店一番とオヤジが太鼓判を押したのを気に入つて値段を聞いた。

「おやすかあ、 ありませんぜ」

「わたしは貴族よ」

ルイズは胸をそらせて言った。主人は淡々と値段を告げた

「エキュー金貨で一千。新金貨なら二千」

「立派な家と、森つきの庭が買えるじゃないの」

ルイズは呆れて言った。

「仕方ないでさ。何せこいつを鍛えたのは、かの高名なゲルマニアの鍊金術師シユペー郷で。魔法がかかっているから鉄だつて一刀両断でさ。それに……」

「ふうーん。一刀両断ねえ……じゃあ、今度は木刀で斬れないんだな」

主人は得意気に話すも銀時の言葉に止まつた。そして先ほど折られたレイピアを思い出し顔を青ざめた。それもそのはず、鍊金術師シユペー郷が作ったのではなく主人が作った剣なのだ。主人が黙つていると銀時は木刀を抜いた。その光景を見て主人は冷や汗ダラダラだ。

そして主人の見ている目の前で大剣は真つ二つになつた。

「べ、弁償だアアア……旦那2つとも弁償でさあ」

主人は銀時を指差しきつぱりと言つた。ギャーギャー喚く主人を見ると銀時は鼻をほじりながら動じず言つた。

「なんで？」

「なんでつて旦那が壊したからに決まって……」

主人がまくし立てて言つと銀時は眉を寄せた。

「オイオイ、言いがかりは止してくんない？ 大体よオ。木刀で折れる剣売るなんてどういうこと？ 詐欺か？ 詐欺なのか？ 銀さん出るとこ出てもかまわねえぜ」

銀時の言葉に主人は悔しそうに口を閉じた。するとその時乱雑に積み上げられた剣の中から声がした。低い男の声だ。

「ぶつひやひやひや、おでれーた。おでれーた。まさかこんなに主人をへこます奴が居るとはよ」

銀時とルイズは声の方を見た。主人は頭を抱えている。

銀時は眉を寄せ一本の剣を見つめた。どうやら鎧の浮いたボロボロの剣から声は発せられていくようだ。

「…剣？」の世界の剣はしゃべるのか？』

銀時が不思議そうにすると店の主人が怒鳴り声をあげた。

「やーいーーー『テル公ーー余計なこと言つんじやねえ…』

銀時は剣をまじまじと見つめた。表面に鎧が浮いているが、この中では一番まともな剣だ。剣も主人を無視つて銀時を観察している。それからしばらくして剣は小さな声でしゃべり始めた。

「おい、兄ちゃん」

「なんだ？ガラクタ」

剣の呼びかけに銀時は答える。

「ガラクタじゃねえよーー俺は『テルフリンガー』まだーー兄ちゃん『使い手』か

「あ？『使い手』？」

「自分の実力知らないのか。まいい。兄ちゃん俺を買え」

銀時はじっと剣を見つめにっこり微笑みきつぱり言った。

「いやだ」

「相棒！…そりやねえよ。買ってくれる雰囲気だつたじゃねえか！」

「誰が相棒だ！…誰が！…」

銀時とデル公が言いあつてるとルイズは勝手にデル公を買つていた。理由は主人がデル公ならタダでやると言つたからだ。

「ギントキ。もう買つたからあなたの剣よ」

ルイズはデル公を持ち上げ銀時に渡した。

「は？ おい、ルイズ。俺はこんなガラクタいら…」

銀時が文句言おうとするもルイズの言葉に止まつた。

「さて、お金も浮いたことだし。ケーキでも食べて帰りましょう。…つとギントキ何か言つた？」

「いや、なんでもねえよ。早く行こうぜ」

銀時はルイズの言葉を聞くと瞬時にデル公を洞爺湖のように腰に差し瞳をキラキラさせ店の出入口に向かつた。

第8訓 女の嫉妬はなによりも怖い（前書き）

神「キヤツホーイー！神楽ファンの皆様お待たせしたネ。前書きで銀魂キャラを度々出すことになったヨ。第一回は万事屋アル

銀「おつ、第一回は俺たちか？じゃあ、自己紹介でもするか。どーも、銀魂&この小説の主人公坂田銀時でーす」

神「万事屋の可愛いヒロイン神楽ネ」

銀「そして万事屋のツツコリ（懐からメガネを取り出しそう）」

銀裏声「やあ、僕は駄眼鏡だよ」

新「何してんだああああああーー！しかも名前駄眼鏡って僕の名前は志村新ハだアアアー！！」

銀「何言つてんだ。メガネは新ハの99%だろ」

新「僕1%！？大体そんなわけないでしょーー！」

銀「え？違うの？」

新「え？ちょ…何ですか、その顔。殴りますよ」

神「殴るのは私ネ。駄眼鏡」新ハのくせに私より目立つてんじゃないアルウウウー！」

銀「そ、それじやあ始まるわ（惨劇見ては青ざめ）」

第8訓 女の嫉妬はなによりも怖い

銀時は学院に帰ると「デル公を磨いていた。

「おい、相棒」

「なんだ? ガラクタ」

「デル公の声に磨く手を止める。

「ガラクタじゃねえよ……磨いてくれるのはありがてえけど、ア
レいいのか?」

デル公の言ひアレとは今睨み合つてゐるルイズとキュルケのことである。銀時がケーキを食べて満足げに帰つてきた後、何故かキュルケは部屋にやつてきて銀時に剣をプレゼントしようとしたのだ。今日銀時が壊した大剣と全く一緒のキラキラと宝石のついた剣だ。一体オヤジはあの剣をいくつ作つたんだろうか。

しかし、ルイズはプレゼントを良しとしない。それで今こんな風に睨み合つてゐるのだ。

「馬鹿かア!! お前んな大きな声で言つたら奴らに巻き込まれるだ
らうがアアアアア!!」

「いや、巻き込まれるつて一応相棒が原因じやねえか

銀時の言葉に呆れたように言ひアレル公。

「うせえよ!! だから巻き込まれないよう磨いてんだろ!! 銀さ

んは今忙しいんです雰囲気作ってんじゃねえかアアアア……」

「あなたが一番うるさい」

銀時が叫ぶように言つとタバサにきつぱりと言われた。ちなみにタバサは銀時の隣に座つてゐる。

銀時に一言言つとまた黙々と本を読み始めた。銀時はチラッとタバサを見るため息をつきルイズとキュルケに目をやつた。

「どういふ意味？ ツェルブスター」

腰に両手を当てて、キュルケを睨んでいるルイズ。キュルケは恋の相手の主人の視線を受け流す。

「だから、ギントキが欲しがつてる剣を手に入れたから、そつち使いなさいって言つてるのよ」

正直銀時は欲しがつてすらない。どうやら店の主人に騙されたようだ。

「おあいにくさま。使い魔の使う道具なら聞に合つてるの。それにギントキも磨いちやつて気に入つてるのよ」

ルイズは銀時が磨いていたデル公を見てきつぱりと言つ。銀時が磨いてたのは巻き込まれないためだが、ルイズはそんなこと知らない。

「あら？ それはギントキが優しいからでしょ？ あなたのプライドを保つために気に入つたフリをしてるのよ」

「何よ。キュルケあんた嫉妬してるのね。現実が見えなくなつてる

んだわ「

ルイズは一瞬眉を寄せるも勝ち誇ったよつと言つた。

「まあ、何を言つているのかしら。嫉妬してるのはあなたじゃない。ヴァリエール」

今度はキュルケが勝ち誇った顔をして言つた。そんなキュルケにルイズは顔をしからめきつぱり言つ。

「嫉妬？ なんでわたしが！？」

「だつてそういうじゃない。ギントキが欲しがつてた剣をあたしがなんなく手に入れてプレゼントしたもんだから嫉妬してるんじゃなくつて？」

「誰がよ！ やめてよね！ ツェルプスターの者からは豆の一粒だつていらないわ！ そんだけよ！？」

ルイズの言葉を無視してキュルケは銀時を見つめた。銀時は我関せずといった感じでツェル公を再度磨いている。しかしそんな銀時の様子に動じずキュルケはきつぱりと言つた。

「知つてる？ この剣を鍛えたのはゲルマニアの鍊金術師シュペー郷だそうよ」

キュルケは熱っぽい流し目で銀時を見つめる。

「ねえ、あなた。よくつて？ 剣も女も生まれはゲルマニアに限るわ。トリステインの女ときたら、このルイズみたいに嫉妬深くつて、気

が短くつて、ヒステリーで、プライドばかり高くつてビリしそうもないんだから」

キュルケの言葉にルイズはキッと睨みつけた。

「な、何よ！－あんたなんかただの色ボケじゃない！－なあに？ゲルマニアで男を漁りすぎて相手にされなくなつたからトリステインまで留学して来たんだしょ！－」

ルイズは馬鹿にするよう鼻で笑いキュルケを挑発した。声が震えている。相当頭にきているようだ。

「い、言つてくれるじゃない、ヴァリエール…」

先ほどまで余裕のあつたキュルケの顔色が変わつた。それを見るとルイズは勝ち誇つたように言つた。

「なによ。ホントのことだしじつ？」

互いに睨み合い一人は同時に自分の杖に手をかけた。それまで、じつと本を読んでいたタバサが一人より早く自分の杖をふる。つむじ風が舞い上がり二人の杖を吹き飛ばした。

「室内…」

ボソッと呟くタバサ。どうやら「」でやつたら危険だと言つたいのだろ？。

「なにこの？。さつきからくるけど」

ルイズは杖を飛ばされたこともあり懇々しげに呟いた。キュルケが答える。

「あたしの友達よ」

「なんで、あなたの友達がわたしの部屋にいるのよ」

キュルケはルイズを睨みつけきつぱつ言つた。

「別にいいじゃない」

ルイズとキュルケは再度睨み合つた。しばらくしてキュルケが視線を逸らして言つた。

「じゃあ、ギントキに決めてもらいましょう」

「あ？」

銀時はキュルケの言葉に嫌そうに顔を歪ませる。銀時のいた世界では女同士の争いに巻き込まれると口クなことがなかつた。きっと異世界でも同じだらう。

「やうね。あなたの剣でモメてんだから」

ルイズも銀時を見つめる。

（オイオイオイ、何これ？銀さん忙しいです雰囲気出してたじさん！…アレか？反応したからいけなかつたのか…）

銀時は頭を抱えた。もつ声を出したことを後悔している。ルイズと

キュルケからは考へてゐようと思ふ見えるのだが…

（それにしてもどうするよ俺…大体どつちもこらねえし…いや、けどそんなこと言つたらヤバい氣がする…どつちだ？どつちが正解だ？いや、剣で考へるからダメなんじやねえ？仮にパフェを『テル公とケーキをキュルケの剣と考へどつちを選ぶかといつと…そ、そつが…）

銀時の考へはきまつたようだ。顔を上げこれしかないと声高々に言った。

「 もぢりん両方ともだアアア…！」

銀時の言葉にルイズとキュルケは顔を見合させ一人で銀時を蹴つた。銀時は床に転がりながら思つた。
パフェとケーキじやなく団子と宇治銀時丼で例えれば良かつたと…正直自分の好物に例えた時点で間違いなのだが

「ねえ、ヴァリエール」

キュルケはルイズに向き直つた。

「 なによ」

「 そりそり、決着をつけません」と…」

「 そつね

「 あたしね、あなたのことだいつきらこなのよ」

「わたしもよ

「気が合'つわね」

二人はそつ言うとウフフと笑い出す。はたから見るとかなり不気味だ。一通り笑い終わると二人は同時に怒鳴った。

「「決闘よーー！」」

巨大な二つの月が、宝物庫のある魔法学院の塔の外壁を照らしている。二つの月の光が、壁に垂直に立つた人影を浮かび上がらせていた。

土くれのフーケであつた。長い青髪を夜風になびかせ悠然と佇む様に、国中の貴族を恐怖に陥れた怪盗の風格が漂つている。フーケは足から伝わつてくる壁の感触に舌打ちをした。

「さすがは魔法学院の壁ね……物理衝撃が弱点？こんなに厚かつたらちょっとやせつとの魔法じゃどうしようもないじゃない！！」

フーケは腕を組んで悩んだ。強力な『固定化』の呪文がかかっているため、『鍊金』の呪文で壁に穴をあけるわけにもいかない。フーケがしばらく考えていると誰かが近づく気配を感じた。とんつと壁を蹴り、すぐに地面に飛び降りる。地面にぶつかる瞬間、小さく『レビテーション』を唱え華麗に着地する。それからすぐに中庭の植え込みに消えた。

中庭に現れたのは、ルイズとキュルケとタバサ、そして銀時である。

「じゃあ、始めましょうか」

キュルケが言つと銀時は呆れたように言つた。

「オイオイ、お前らほんとに決闘なんかする気かよ」

ルイズもキュルケもやる氣満々で頷いた。

「つたく…危ねえぞ」

ため息をつく銀時にキュルケは少し考えた。

「確かに…怪我するのもバカラしいわね」

「そうね」

キュルケの言葉にルイズも頷いた。タバサがキュルケに近づいて銀時を見ながら何かを呴く。

「あ、それいいわね！？」

キュルケが微笑みルイズにも呴いた。

「あ、それはいいわ

ルイズも何やら賛成したようだ。三人は一斉に銀時の方を向いた。銀時は眉間に皺を寄せる。とても嫌な予感がする。

「こやいやいや、え？ 何これ？ え？ ちよ……べ、弁護士呼ベエエエエ！」

銀時は叫んだ。しかし誰も返事をしてくれない。塔の上から銀時はロープで縛られ、吊され、空中にぶら下がっている。

はるか地面の下には、小さくキュルケとルイズの姿が見える。夜とはいえ、二つの月のおかげで思ったより視界は明るい。塔の屋上には、ウインドドリゴンに跨ったタバサの姿が見えた。風竜は一本の剣をくわえている。

キュルケとルイズは、地面に立つて銀時を見上げている。ロープに縛られ、上から吊された銀時が揺れているのが見える。

「いいこと？ ヴァリエール。あのロープを切つて、ギントキを地面に落としたほうが勝ち。勝った方の剣をギントキは使う。いいわね？」

「わかったわ

ルイズは硬い表情で頷いた。

「使う魔法は自由。ただし、あたしは後攻。そのぐらーはハンデよ

「いいわ

「じゃあ、どうぞ」

ルイズは杖を構えた。屋上のタバサがロープを揺らし始める。銀時は左右に揺れる。ちなみにこの間も銀時は文句を言っていた。

『ファイヤーボール』等の魔法の命中率は高い。動かさなければ、簡単にロープに命中してしまう。

しかし…命中するかしないかよりもルイズには問題があつた。魔法が成功するかしないかだ。

ルイズは短くルーンを呴く。失敗したら…銀時はキュルケが買つてきた剣を使うことになる。プライドの高いルイズにとってそれは許せるわけがない。呪文詠唱が完成すると気合を入れて、杖を振った。しかし、杖の先からは何も出ない。一瞬遅れて銀時の後ろの壁が爆発した。

「オイイイー！殺す気か！殺す気なのか！？」

爆風で身体が揺れながら銀時は叫んだ。しかしルイズは無視してロープを見た。塔の壁にはヒビが入っているのだがロープはなんともない。

キュルケは腹を抱えて笑った。

「ルイズ、ロープじゃなくて壁を爆発させてどうするの…！…器用ねえ。あなたってどんな魔法も爆発させるんだから…あつはっは」

ルイズは悔しそうに拳を握り締め、膝をついた。

「さて、あたしの番ね…」

キュルケは、狩人の目で銀時を吊るしたロープを見つめた。タバサがロープを揺らしているので狙いがつけづらい。

それでもキュルケは余裕の笑みを浮かべた。『ファイヤーボール』はキュルケの十八番である。

杖の先からメロンほどの火球が現れ、銀時のロープを燃やした。その瞬間タバサが杖を振り銀時に『レビテーシヨン』をかけた。そのおかげで銀時はゆっくりと地面に降りてきた。

キュルケは勝ち誇つてきっぱりと言った。

「あたしの勝ちね！－ヴァリエール」

キュルケは大声で笑つた。ルイズは勝負に負けたのが悔しいのかしょんぼりと座り込み、肩を落としている。

そんな二人を見て銀時はキレた。もうぶちんっと…

「あ、あいつらアアふざけんな！－」

低い声を上げ、声と同時にロープを引きちぎる。ドスドスと効果音が出そうな雰囲気で二人に近付く。

そんなことは知らず、キュルケは嬉しそうな表情。ルイズは悔しそうな表情で銀時をむかえ入れた。

「ギントキ！－あたし勝ったのよ！－」

銀時は嬉しそうに言うキュルケと悔しそうなルイズに拳骨を落とした。ガツンと鈍い音が響く。

「「いたあつ」」

二人は叩かれた頭を抱えてしゃがみ込む。

「二人ともそこに正座だアアアーー！」

ビシッと地面を指す銀時にキュルケとルイズは正座した。銀時からは逆らえないオーラが放っていたからだ。

「いいかーー喧嘩つてもんはよオ。テメエ自身で土俵に上がつて、テメエの拳でやるもんだーー人様（俺）に迷惑かけてんじゃねええーー！」

銀時の言葉にいつの間にか近くにいたタバサは少し驚き、デル公は楽しそうに笑つた。

「ぶつひやひやひや、流石相棒だーー主人に拳骨と説教くらわす使い魔なんて初めて見た」

そのときである。背後に巨大な何かの気配を感じて銀時は振り返つた。

「え？…な、なんだありや」

巨大な土ゴーレムがこちらに向かつて歩いてきている。

「きやああああーー！」

銀時の言葉に顔を上げたキュルケは悲鳴をあげて逃げ出した。

「え？何よアレ。」

銀時とキュルケの言葉にルイズも顔をあげてゴーレムを見た。

「とりあえず逃げるぞ！！」

銀時はルイズを抱き上げるとその場から急いで逃げた。後ろからはガラガラと塔が壊されるような音がする。

銀時は安全地帯。タバサの使い魔ウイングドドラゴンの背に移動すると魔法学院の城壁をひとまたぎで乗り越え、ズシンズシンと地響きを立て去っていくゴーレムを見つめた。

「あいつ、壁ぶち壊してたけど…あそこ何があるんだ？」

「宝物庫」

「あの黒ロープのメイジ、壁の穴から出てきたときに、何か握つていたわ」

タバサがボソッと呟いた。それに加えてルイズも言つた。

「つてことは泥棒か。ずいぶん派手な泥棒だな」

そのとき、歩いていたゴーレムは突然ぐしゃっと崩れ落ちた。巨大なゴーレムは大きな土の山になる。四人はウイングドドラゴンから地面に降りるも土の山以外何もない。そして、乗つっていた黒ロープのメイジの姿も消え失せていた。

第9訓 有名な泥棒ほひ犯行声明を置いておこう（前書き）

「がひませ、第一回は俺達真選組みたいだな。トシ」

土「やうだな。つたく…やうなきやならねえ仕事が沢山あるの」「なんでこんななくだらない小説に」

「まあ、やうに言つたアシ。それより総悟の姿が見えないようだが？」

土「あ？（キヨロキヨロ辺りを見渡し）」

沖「…………（珍じてため息をつき悶じてゐる）」

「総悟…どうした？元氣がないじゃないか」

沖「^{近藤}近藤さん…」

「あれ？なんかさつさむかしくなかつた？ねえ？おかしくなかつた？」

土「落ち着け近藤さん…多分氣のせいだ。それより、総悟。どうしたんだ？」

沖「土方さん…実は旦那のいる世界に会いたい子がいるんですア。今口余えるかと思つたんですね」

「や、総悟…めさか恋か…恋なのか…」

沖「恋…そんなもんじゃありやせん。ただあの高いプライドをへし
折りピーでピーしてピーしたいだけださア（調教用道具を大量に出
し）」

土「何ある奴イイイ…お前は絶対に行かせねえよ…。」

第9訓 有名な泥棒ほど犯行声明を置いていく

翌朝、トリステイン魔法学院では昨夜からの騒ぎが続いていた。何せ秘宝の『破壊の杖』が盗まれたのである。

しかも、巨大なゴーレムが壁を破壊するといった大胆な方法で。宝物庫には、大きな穴があいており壁には『土くれ』のフーケの犯行声明が刻まれている。

『破壊の杖、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』
学院の教師たちはその犯行声明を見ると口々に好き勝手なことを喚き始めた。

「土くれのフーケ！！貴族たちの財宝を荒らしまくっているという盗賊か！！随分とナメられたもんじゃないか！！」

「衛兵はいったい何をしていたんだね？」

「衛兵などあてにならん！！平民ではないか！！それより当直の貴族は誰だつたんだね！！」

その言葉にミセス・シュヴァルーズは震えあがつた。昨晩の当直は自分だった。しかし魔法学院を襲う盗賊がいるなどとは夢にも思わず、サボつてぐうぐう自室で寝ていたのだ。

「ミセス・シュヴァルーズ！！当直はあなたなのではありますか？」

教師の一人がさつそくミセス・シュヴァルーズを追及し始めた。オスマン氏が来る前に責任の所在を明らかにしておこうといふ気なのだ。

その追及にミセス・シュヴァルーズはボロボロと泣き出しちゃった。

「も、申し訳ありません…」

「泣いたって、『破壊の杖』は返つてこないのですぞ…！それとも弁償できるのですかな…！」

「そ、そんな…わたくし、家を建てたばかりで…」

ミセス・シュヴァルーズは、よみよとげ屈かかった風に崩れ落ちた。そこにオスマン氏が現れた。

「これこれ、女性を苛めるものではない」

「し、しかしですな…！」ミセス・シュヴァルーズは眞直なのに浴室で寝ていたのですぞ…！責任は彼女にあります」

オスマン氏は長い口ひげをこすりながら訴えてくる教師を見つめた。

「ミスター…ギルトくんだっけ？」

「ギターです。ギター…！」

「そうそう。ギター君。そんな名前じゃつたな。君は怒りっぽくていかん。それではの方に目を付けられてしまつぞ」

オスマン氏はそう言つとブルッと身体を震わした。なにやら思い出したらしい。教師たちはオスマン氏の言つあの方つという人物に首を傾げた。しかし誰なのかは分からぬ。そんな教師たちを構わずオスマンは言葉を続ける。

「さて、この中でもともに当直をしたことのある教師は何人おられるのかな？」

教師たちはお互に顔を見合せた。そして恥ずかしそうに顔を伏せる。どうやら名乗り出るものはないようだ。

「これが現実じゃ。責任があるとするなら我々全員。まさかこの魔法学院が賊に襲われるなど、夢にも思っていなかつた。ここにいるのは、ほとんどがメイジじゃからな。しかし、それは間違いじゃつた」

オスマンは壁にぽつかりあいた穴を見つめた。

「こどおり、賊は『破壊の杖』を奪つていきおつた。つまり我々は油断していたのじゃ。責任があるとするなら、我ら全員にあるといわねばなるまい」

ミセス・シュヴァルーズは感激してオスマン氏に抱きついた。

「おお、オールド・オスマン！－あなたの慈悲深いお心感謝いたします！－わたくしはあなたをこれから父と呼ぶことにいたします！」

オスマンはそんなシュヴァルーズの尻を撫でながら言った。

「ええのじゃ。ええのじゃ、ミセス…」

「わたくしのお尻でよかつたら－－ござりでも－－」

オスマンは誤魔化すよつこほんと咳をした。場を和ませるつもりで尻を撫でたのだが、皆真剣な目でオスマンの言葉を待っていた。

「で？ 犯行現場を見ていたのは？」

オスマンが尋ねた。

「この三人です」

コルベールがさつと進み出て、自分の後ろに控えていた三人を指差した。ルイズにキュルケにタバサの三人である。銀時もそばに居たのだが使い魔なので数には入らない。オスマンは三人を見て目を開いた。正確には三人のそばにいる銀時を見てだが

「ギツ…」

オスマンの発した言葉に周りの皆は首を傾げた。しかしオスマンはそれどころではない。

(ギ、ギ、ギントキ様アアアア！？ヤバい。ヤバいぞ私。まさかギントキ様が田撃者とは…何か失態を起こせば…ヒゲがアアアア…！
私のヒゲがアアアア…！…)

オスマンは「クリと唾を飲み込んだ。どうやら緊張しているようだ。ちなみにオスマンはすでに銀時の調教を受けている。

「それでは、詳しく説明したまえ」

ルイズが進み出て、見たままを言った。

「大きなゴーレムが現れて、こここの壁を壊したんです。そのあと黒いメイジが宝物庫の中から何かを……その『破壊の杖』だと思いますけど……盗み出した後ゴーレムの肩に乗り、ゴーレムは城壁を超えて歩き出しました。そして最後には崩れて土になりました。もちろん黒いローブを着たメイジは、影も形もありませんでした」

オスマンはルイズの言葉にチラチラと銀時を気にしながら呟いた。

「ふむ……後を追おうにも、手がかりナシといつわけか……」

それからオスマンは気づいたようにコルベールに尋ねた。

「ともに、ミス・ロングビルはどうしたね？」

「それがその……朝から姿が見えません」

「まつたく……」の非常時にビリに行つたのじゃ」

そんな風に噂をしていると、ミス・ロングビルが現れた。

「ミス・ロングビル……！」に行つていたんですか？大変です、事件ですぞ……」

興奮した様子でコルベールがまくし立てる。しかし、ミス・ロングビルは落ち着いた態度で言った。

「申し訳ありません……朝から、急いでフーケの調査をしておりました。」

「なるほど……それで結果は？」

「ゴルベールは領き先を促した。

「はい。フーケの居所がわかりました」

「な、なんですと……」

「ゴルベールが素つ頼狂な声をあげた。他の教師たちも顔を見合せている。

「誰に聞いたんじゃね？」

「はい。近在の農民に聞いたところ、近くの森の廃屋に黒ずくめのローブの男が入つていぐのを見たそうです」

ミス・ロングビルの言葉を聞いてルイズは叫んだ。

「黒ずくめのローブ? フーケだわ……間違いありません……」

オスマンは眉を寄せてミス・ロングビルに尋ねた。

「ヤ！」は近いのかね？」

「はい、徒歩で半日。馬で四時間といったところでしょうか」

「すぐ……すぐに王宮に報告して兵隊を差し向けてもらわなくては……」

ゴルベールが叫ぶもオスマンは首を振った。

「ばかもの……その間に逃げられたらどうする……それにこれは魔法学院の問題じゃ……当然我らで解決する……」

オスマンはそう言つと銀時の様子を窺つた。大丈夫……機嫌は損ねていないうつだ。

オスマンは咳払いをするとい、有志を募つた。

「では、捜索隊を編成する。我と思つ者は杖をあげよ……！」

困つたように教師たちは顔を見合はした。誰も杖をあげようとしない。

しばらくの間沈黙が続く。

そのとき、ピッと杖をあげた者が居た。

「ミス・ヴァリエール！」

ミセス・シュヴァルーズが驚きの声をあげた。

「何しているのです……あなたは生徒ではありませんか……ここは教師に任せせて……」

「誰もあげないじゃないですか……だから……わたしが行くんです！」

ルイズは眉を寄せてきつぱりと言つた。銀時は腕を組みじつとルイズを見つめている。

ルイズが杖をあげているのを見てキュルケはしぶしぶ杖をあげた。

「あたくしも志願します。ヴァリエールには負けられませんわ」

「ツェルプストー……君まで…」

コルベールは驚きの声をあげた。
それを見るとタバサも杖をあげた。

「タ、タバサ！？あなたはいいのよ？関係ないんだから…こんなバ
力な事に付き合わなくとも」

キュルケが言うとタバサはプルプルと首を振った。

「わたしも行く……心配だもの」

ボソッと呟くタバサにキュルケは感動して抱きついた。ルイズも嬉
しそうに礼を言う。

「ありがとう…タバサ」

そんな三人を見て銀時はため息をついた。

「はあ。つたくよオ、自分から面倒ごとを抱え込むなんて醉狂にも
程があんだろ」

「何よ。ギントキ」

銀時の言葉にルイズは眉を寄せた。

そんなルイズを見て銀時はニタリと笑った。

「けどよオ、俺アそういう醉狂な奴嫌いじゃないぜ」

銀時の言葉にルイズ達はキヨトンとするもにっこり微笑んだ。その

とき、オスマンが口を開いた。銀時がルイズ達が行く許可をしたのを見たからだ。

「では、君たちに頼むとしよう」

「オーレド・オスマン……わたしは反対です……生徒を危険にさらすわけには……」

「では、君が行くかね?ミセス・シュヴァルーズ」

「い、いえ……わ、わたしは体調がすぐれませんので……」

どうやら反対はするものの自分では行きたくないようだ。

「彼女たちは敵を見ておる。それにミス・タバサは『シュヴァリエ』の称号を持つ騎士だと聞いている」

銀時とオスマンを除くその場にいるものは驚きタバサを見つめた。
『シュヴァリエ』とは王宮から与えられる爵位としては最下級だが、タバサの年で与えられるのはめったにない。

宝物庫の中がざわめいた。オスマンはそれからキュルケを見つめた。
「ミス・シエルプストーは、ゲルマニアの優秀な軍人を多く出した家系の出で……炎魔法がかなり強力と聞いてある」

キュルケは得意げに、髪をかきあげた。それを見て次は自分の番だとルイズは胸を張った。オスマンは困った……讃めるところがなかなか見つからないのだ。

こほんっと咳払いをし、オスマンは目を逸らす。

「その……ミス・ヴァリエールは数々の優秀なメイジを出したヴァリエール公爵家の息女で……つむ……なんだ、将来有望なメイジと聞いておる。しかもその使い魔様はあのグラモン元帥の息子である。ギー・シユ・ド・グラモンと決闘してお勝ちになつたという噂だが」

オスマンの丁寧な言葉に周りは首を傾げるも今は追及してゐる場合じやないと流した。

オスマンは思った。ギントキ様なつやつとくれるだらう……つとオスマンは威厳のある声で言つた。

「この三人に勝てるところ者がいるなら、前に一步出たまえ」

教師たちは顔を見合わせる。どうやら誰も居ないようだ。

オスマンは銀時を含む四人に向き直つた。

「魔法学院は諸君らの努力と貴族の義務に期待する」

ルイズとタバサとキュルケは真顔になつて直立した。

「「「はい、杖にかけて……」」

同時に唱和し、スカートの裾をつまみ、恭しく礼をする。

「では、馬車を用意しよう。それで向かうのじや、魔法は田的地につくまで温存したまえ。ミス・ロングビル……」

「はい。オールド・オスマン」

「彼女たちを手伝つてやつてくれ」

ミス・ロングビルはにっこり微笑んで頭を下げる。

「もとよつそのつもりですわ」

第10訓 女はいくつもの顔を持つてゐる（前書き）

お待たせしました。

最初に謝つておきます。格好良い銀さんなんて幻です。

ムリムリ、格好良い？なにそれ？

つとこりうりとで私の文才ではムリでした。

ほんとダメダメに出来上がりましたが、それでもよろしい方どうぞ

第10訓 女はいくつもの顔を持つてゐる

四人はミス・ロングビルを案内役に早速出発した。馬車といつても、屋根ナシの馬車である。襲われたときに、すぐに外に飛び出せるほうがいいというオスマンの助言により、このような馬車になつたのだ。ミス・ロングビルが御者を買って出た。

タバサは本を読みながらキュルケの隣にいる。銀時は馬車に乗つてからすぐ寝始めた。ルイズは銀時の隣で緊張感がないと言つている。

キュルケは、黙々と手綱を握る彼女に話しかけた。

「ミス・ロングビル……手綱なんて付き人にやらせればいいじゃないですか」

ミス・ロングビルは、にっこりと笑う。

「いえ、いいのです。わたくしは貴族の名をなくした者ですから」

キュルケはきょとんとした。

「だつてあなたはオールド・オスマンの秘書なのでしょ？」

「ええ。でも、オスマン氏は貴族や平民などとあまり拘らないお方です」

「差し支えなかつたら、事情をお聞かせ願いたいわ」

ミス・ロングビルは優しい微笑みを浮かべた。それは言いたくないのである。

「いいじゃないの。教えてくださいな」

キュルケが興味津々といった感じで言った。ルイズは止めようと手を伸ばすもそれより先に寝ていた銀時が口を開いた。

「つむせえな、眠れねえじゃねえか

ふわあっと大きな欠伸をしながら言う銀時にルイズも続けた。

「そうよ。聞かれたくないことを無理やり聞き出そうとするものじゃないわ……」

ルイズの言葉に眉を寄せるも銀時には逆らひはしないじへ、仕方なさげにキュルケは黙つた。

しばらく行くと馬車は深い森へと入つていぐ。鬱蒼とした森が恐怖をあおる。毎晩だとうのに薄暗く、氣味が悪い。

「ここから先は、徒歩で行きましょう

ミス・ロングビルがそう言つて馬車から全員を降ろした。森を通り道から小道が続いている。

「なんだか、暗くて怖いわ……」

キュルケが銀時の腕に手をまわしてきた。

「ちゅう、あんまりくつづくんじゃねえよーー。」

「だつてー、すじーー、こわいんだものーー。」

キュルケはすじーーそ臭い調子で言つた。銀時は腕をはがそうとした。しかし意外にもつよい力で絡められており、無理やりはがすと怪我をしてしまいそうなので好きにさせた。

一行は開けた場所に出た。森の中の空き地といった感じである。およそ、魔法学院の中庭ぐらいの広さだ。真ん中に、廃屋がある。元は木こり小屋だったのだろう、朽ち果てた炭焼き用らしきかまと物置が隣に並んでいる。

五人は小屋の中から見えないよう、森の茂みに身を隠した。

「わたくしの聞いた情報だと、あの中にいるという話です」

ミス・ロングビルは廃屋を指差して言つた。人が住んでいる気配はまったくない。本当にフーケはあの中にいるんだろうか。銀時たちは相談を始めた。どうやら奇襲をすることにしたようだ。

タバサは、ちょこんと地面に正座すると皆に自分の立てた作戦を説明するため杖を使い地面に絵を描き始めた。

タバサの作戦とは…まず、偵察兼おとりが小屋のそばに行き中の様子を確認する。中にフーケがいれば挑発して外に出す。小屋の中にはゴーレムを作り出すほどの土はないので、外に出ない限りゴーレ

ムは使えないのだ。

そして、フーケが外に出てきた所を、ゴーレムを作る時間を「えず魔法で一気に攻撃する。

そんな感じの作戦だった。

「で？ 偵察兼おとりは誰がやるんだよ？」

銀時が訪ねると、タバサは短く言つた。

「すばしっこいの」

タバサの言葉に顔を見合わせる四人。しだいに全ての視線が銀時に集まってきた。タバサなど最初から銀時しか見ていない。

「え？ いやいや、待て待て！！ 銀さんあれだから意外とすばしっこくないから！！」

銀時が慌てた様子で言つもどりやら決定したらしい。ルイズに至つては早く行つてこいという風に銀時を見つめている。

銀時は、はあつとため息をはいた。そして廃屋の方を見つめ、コンコソと小屋に近づく。その姿はまるで泥棒のようだ。窓に近づき、おそるおそる中を覗いてみた。小屋の中は、一部屋しかない。部屋の真ん中に埃のかぶつたテーブルと、転がった椅子が見えた。テーブルの上には酒瓶が転がっている。部屋の隅には薪が積み上げられており、近くに崩れた暖炉が見える。やはり、炭焼き小屋だつたらしい。そして、薪の隣にはチェストがあつた。木で出来た大きな箱である。

中は隠れる場所がなく人の気配がない。

銀時はしばらく考えたあと、皆を呼ぶことにした。銀時は頭の上で、腕を交差させた。皆で決めた誰もいなかつた時のサインである。そ

のサインを見ると隠れていた全員がおそるおそる近寄ってきた。

「誰もいねえぞ」

銀時が窓を指差すとタバサがドアに向かって杖を振った。

「ワナはないみたい」

タバサはそう呟き、ドアを開けて中に入していく。銀時とキュルケが後に続く。ルイズは外で見張りをすると聞いて、残った。ミス・ロングビルは辺りを偵察してきますと言い、森の中に消えた。

小屋に入った三人は、フーケの残した手がかりがないか調べ始めた。そして、タバサがチェストの中から…なんと『破壊の杖』を見つけ出した。

「破壊の杖」

タバサは無造作にそれを持ち上げ周りに見せた。

「あっけないわね！！」

キュルケは叫ぶ。銀時は『破壊の杖』を見ながら少し驚いている。

「え？ それが？ ほんとに『破壊の杖』かよ？」

「そ、う、よ。あ、た、し、見、た、こ、と、あ、る、も、ん。宝、物、庫、見、学、し、た、と、き」

キュルケが頷いた。銀時は近寄つて『破壊の杖』をじつと見つめた。

（間違いねえ。これは……）

そのとき、外で見張りをしていたルイズの悲鳴が聞こえた。

「きやあああああつ……！」

「どうした……！」

三人が一斉にドアを振り向いたとき……。

バコオーンンと音を立てて、小屋の屋根が吹っ飛んだ。

屋根がなくなつたおかげで空がよく見える。そして青空をバックに、巨大なフーケの土ゴーレムの姿があつた。

「ゴーレム……！」

キュルケが叫んだ。タバサが真つ先に反応する。

自分の身長より大きな杖を振り、呪文を唱えた。巨大な竜巻が舞い上がり、ゴーレムにぶつかつっていく。しかしゴーレムはびくともしない。

次にキュルケが胸にさした杖を引き抜き、呪文を唱えた。杖から炎が伸び、ゴーレムを火炎で包んだ。しかし炎に包まれてもゴーレムにまったくダメージがない。

「嘘……無理よ。こんなの……！」

キュルケが叫んだ。

「退却」

タバサが咳く。キュルケとタバサは一目散に逃げ出した。銀時はルイズの姿を探した。

（いた！）

ゴーレムの背後に立っている。ルイズは呪文を唱え、ゴーレムに杖を振りかざした。巨大なゴーレムの表面で、何かが弾けた。ルイズの魔法だ！！ルイズに気付いて「ゴーレムは振り向く。銀時は軽く舌打ちをした。

「ルイズ！！逃げろ」

ルイズは唇を噛み締め、言い放った。

「いやよ！…わたしは貴族だもの！…」

きつぱりと言つるイズに銀時は眉を寄せる。「ゴーレムは近くに立つたルイズをやつつけようか、逃げ出したキュルケたちを追おうか迷つていてる。

銀時は今すぐにでもルイズのもとへ行きたいのだが、できない。銀時が動くことで、ゴーレムがルイズを攻撃することにするかもしれないからだ。

「あのなア…貴族だとか平民だと今は関係ねえだろ！…」

「わたしにだつてプライドがあるの…ここで逃げたら…またゼロのルイズだから逃げたつて言われる。それに…」

ルイズは真剣な眼差しで銀時を見つめるときつぱり言った。

「魔法が使える者を、貴族と呼ぶんじゃないわ！！敵に後ろを見せない者を、貴族と呼ぶのよー！」

ルイズは杖を握りしめた。すると…どうやら、ゴーレムはやはりルイズを先に叩きのめすことに決めたらしく。「ゴーレムの足が、ルイズを踏み潰そうとした。ルイズは呪文を唱え、杖を振った。しかし…魔法は失敗。ゴーレムの胸が小さく爆発するのが見えた。だが、ゴーレムはびくともしない。銀時は洞爺湖を抜くと飛び出した。ルイズの視界に、ゴーレムの足が広がった。ルイズは目をつぶる。そのとき…烈風のごとく走りこんできた銀時がゴーレムが軸にしていた足を斬る。バランスを崩したゴーレムを見るヒルイズを抱き上げて逃げる。

「バカヤローーー死ぬ気かーー！」

ルイズは銀時の言葉を聞くとぽろぽろと涙をこぼした。

「だ、だつて…悔しくて…わたし…いつもバカにされて…」

ぽろぽろと涙を零すルイズの頭に手を置く銀時。

「悪かった。お前は今まで苦しんできたんだな。けど、今は違う。仲間がいるだろ。ギーシュやモンモランシーの万事屋メンバー、心配で付いて来てくれたキュルケやタバサ。それに俺も…もう、一人で苦しまなくていいんだ。」

きつぱり言つ銀時をルイズはじつと見つめた。銀時は続けて口を開いた。

「それでも…それでも不安だと言つなら俺が守つてやる。例え世界中の誰もがお前の敵になろうと俺はお前の味方だ。…まあ、あいつらも同じ気持ちだと思つぜ」

銀時はにやりと笑い上を見上げる。見ると風竜に乗ったタバサとキルケが一人を救うために飛んできていた。それを見た、ルイズは端正な顔をぐしゃぐしゃにゆがめて泣いた。

風竜が銀時たちの目の前に着陸する。

「乗つて！！」

風竜に跨つたタバサが叫んだ。銀時はルイズを風竜の上に押し上げた。

「あなたも早く」

タバサが珍しく、焦つた調子で銀時に言つた。しかし銀時は、風竜に乗らずにゴーレムに向き直つた。

「ギントキー！」

ドリゴンに跨つたルイズが怒鳴つた。

「早く行け！！」

タバサは無表情に銀時を見つめたが、迫つてくるゴーレムが拳を振り上げるのを見て、やむなく風竜を飛び上がらせた。

ぶんツ！…と音を立ててゴーレムは拳を振り上げる。銀時はとつさに飛び拳をよけた。銀時のいた地面はゴーレムの拳のせいで直径1メートルほどの大穴ができていた。

「つたくよオ、あんな風に泣かれたらやるしかねえだろ」

銀時は洞爺湖をぐつと握り締め、巨大なゴーレムを睨みつけた。洞爺湖を構えると、ゴーレムに向かつて走つた。『ガンダールヴ』の力が加わつてゐるせいかスピードはかなり速い。ゴーレムの懷に入り込むとまずは腹に一撃を食らわす。一撃を受けた場所が崩れる。しかし、すぐに元通りに戻つてしまつ。その後も足や腕を斬りつけるが、やはり戻るようだ。銀時は眉を寄せた。このままではイタズラに体力を減らす一方である。

そんな銀時を驚いて見ていたルイズたちは慌てた。

「このままじゃ、ギントキが危ないわ」

ルイズは何か方法がないかと辺りを見渡した。そのとき、タバサが抱えた『破壊の杖』に気付いた。

「タバサ…それを…！」

タバサは頷いて、ルイズに『破壊の杖』を手渡す。奇妙な形をしている。こんなマジックアイテム見たことない。しかし、今はこれに頼るしかないのだ。

「タバサ！！わたしに『レビューション』をお願い」

そう怒鳴ると、ルイズはドラゴンの上から地面に向かって降りた。タバサは慌ててルイズに呪文をかける。

ルイズは地面に降りると銀時と戦っている巨大な土ゴーレムめがけて、『破壊の杖』を振った。しかし、何も起こらない。

「ほんとに魔法の杖なの！…これ…！」

ルイズは苛ついて怒鳴った。

銀時はルイズが地面に降り立ったのを見て、眉を寄せた。

(オイオイ、なんで降りて……あれば)

ルイズが持つた『破壊の杖』を見ると駆け出した。

「ギントキー！」

駆け寄った銀時にルイズが叫ぶ。銀時はルイズの手から、『破壊の杖』を奪い取った。

「使い方が、わかんない！！」

「これはなア……」うつ使うんだ

銀時はそう言つと『破壊の杖』を肩に背負い『ゴーレム』にめがけて狙いを付けた。そしてトリガーを押す。ロケット状のものが『破壊の杖』から出てきて『ゴーレム』に命中した。

ドカーンッ！！つとけたたましい音とともに『ゴーレム』の上半身はバラバラに飛び散った。

白い煙の中、『ゴーレム』の下半身だけが立つていた。下半身だけになつた『ゴーレム』は一步前に踏み出そうとしたが…。がくつと膝が折れ、動かなくなつた。そして崩れ落ち…ただの土の塊へと還つていく。この前と同じように、土の小山が残された。ルイズはその様子を呆然と見つめていたが、腰が抜けたのかへなへなと地面に崩れ落ちた。タバサとキュルケが風竜を降り、駆け寄つてくるのが見えた。

「ギントキ！…す」いわ…！」

キュルケが抱きついてきた。タバサは隣で『ゴーレム』を見つめながら呟く。

「フーケはどう？」

全員は、キヨロキヨロと辺りを見渡す。そのとき…辺りを偵察に行つていたミス・ロングビルが茂みから現れた。

「ミス・ロングビル！…フーケはどこからあの『ゴーレム』を操つていたのかしら」

キュルケがそう尋ねると、ミス・ロングビルはわからないと首を振る。四人は盛り上がりつた土の小山の中を探し始めた。銀時は『破壊の杖』を見つめてボーッと考え事をしている。すつとミス・ロングビルの手が伸びて、考え方をしていた銀時から『破壊の杖』を取り

上げた。

「あ?」

銀時は眉を寄せた。ミス・ロングビルはすっと遠のくと、四人に『破壊の杖』を突きつけた。

「『』苦労様」

「ミス・ロングビル」

キュルケが叫んだ。

「どうじつことですか?」

ルイズも畠然として、ミス・ロングビルを見つめていた。

「さつさの『』レムを操っていたのは、わたし」

「え、じゃあ…あなたが…」

ルイズの言葉に田を前の女性はメガネを外し不敵な笑みを浮かべる。

「テ、テメエが…『しゃくれ』のフーケか…!」

しかし銀時の言葉に笑みが崩れた。

「だ、誰がしゃくれ…!…私は『土くれ』…!…『土くれ』のフーケよ…!」

優しそうだった目がつり上がる。フーケは銀時がしたよに『破壊の杖』を肩にかけ、四人に狙いをつけた。タバサが杖を振ろうとした。

「おつと。動かないで?『破壊の杖』はぴったりあなたたちを狙っているわ。全員、杖や武器を遠くに投げなさい」

しかたなく、ルイズたちは杖を放り投げた。銀時も洞爺湖をなげる。

「どうして……」

ルイズが怒鳴るとフーケは妖艶な笑みを浮かべた。

「そうね、ちゃんと説明しなくちゃ死にきれないでしょ? から…説明してあげる。私ね、『破壊の杖』を奪つたのはいいけど使い方が分からなかつたのよ」

「使い方?」

「ええ、振つても魔法をかけても、この杖はうんともすんともいわないんだもの。困つたわ、使い方がわからんじや宝の持ち腐れ。そうでしょ?」

ルイズが飛び出をつとした。しかし銀時が止める。

「ギントキー!」

「言わせてやれ」

「あら、物分かりのいい使い魔ね。じゃあ、続けさせてもらつわ。

使い方がわからなかつた私は、あなたたちにこれを使わせて使い方を知らうと考えたのよ」

「わたしたちの誰も、知らなかつたらどうするつもりだつたの？」

「そのときは、全員ゴーレムで踏み潰して、次の連中を連れてくるわよ。でも、その手間は省けたわ。使い方教えてくれたもの」

フーケは笑つた。

「じゃあ、お礼を言つわ。短い間だけど楽しかつた。さよなら」

キュルケは観念して目をつむつた。

ルイズも目をつむつた。

鉛時は目を一瞑らなし

「勇気があるのね」

「いや、それまちよつと壁つ

銀時は洞爺湖を拾い上げる。フーケはとっさに銀時がしたように『破壊の杖』のスイッチを押した。しかし、先ほどのよつな魔法は飛び出さない。

「な、なんとか…」

フーケはもう一度、スイッチを押した。

「それは単発式。魔法なんか出やしねえ！」

「た、単発式?..どういう意味よーーー!」

フーケは怒鳴つた。

「言つてもわからんだろうが、そいつはこいつちの世界の魔法の杖なんかじゃねえよ」

「な、なんですつて!..!」

フーケは『破壊の杖』を放り投げると、杖を握りうとした。
銀時は電光石火で駆け寄り、フーケめがけて洞爺湖をフルスイングした。フーケはそこから5、6メートル飛ばされる。

「そいつは、俺の世界の武器だ。今頃どいじそのどい王子がマヨラーに向かつてぶつ放してるだろ!」

銀時は『破壊の杖』を拾い上げた。

「ギントキ?」

ルイズたちは目を丸くして銀時を見つめていた。

「『破壊の杖』も取り戻したし、けえるぞ」

銀時はガシガシッと頭を搔く。ルイズ、キュルケ、タバサは顔を見合わせると銀時に駆け寄つた。

第1-1訓 終わり良ければすべて良し? (前書き)

更新遅れてしまつて申し訳ござりません…。ちょっともつ一つの小説の更新をしていまして…。あつ、もう一つと書ひのはワンペーと銀魂のコラボです。

もし時間がありましたら見てくださいと嬉しいへ思こます

新ハ「オイイイ!!」のバカ、謝罪から宣伝しちゃつてゐよオオオ
「…」

(それで、ひつぎ)

第1-1訓 終わり良ければすべて良し?

学院長室で、オスマン氏は戻った四人の報告を聞いていた。

「ふむ……。ミス・ロングビルが土くれのフーケじゅつたとはな……。美人だつたもので、なんの疑いもせず秘書に採用してしまつた」

「いつたい、どひで採用されたんですか?」

隣に居たコルベールが尋ねた。

「街の居酒屋じゅ。私は客で、彼女は給仕をしておつたのだが、ついこの手がお尻を撫でてしまつてな」

「で?」

コルベールが促した。オスマンは照れたように告白した。

「おほん。それでも怒らないので、秘書にならなかつた」と言つてしまつた

「なんで?」

「カアーッ!」

まったく理解できないといった口調でコルベールが尋ねた。

オスマンは目を見開いて怒鳴つた。それからオスマンは「ほんと咳

をして真顔になつた。

「おまけに魔法も使えるといつもんでな」

「死ねばいいのに……」

「ゴルベールがぼそつと咳く。オスマンは軽く咳払いをし、ゴルベールに何かを言おうとするも止まつた。銀時がじつと見つめていたからだ。これはヤバいと何とか一人でも味方につけようと冷や汗を流しながら重々しい口調で言い出した。

「い、今思えばあれは魔法学院に潜り込むためのフーケの手じゃつたに違ひない。居酒屋で愛想よく酒を勧める。男前で痺れます、などと何度も媚びを売られて……しまいには尻を撫でても怒らない。惚れてる? とか思つじゃろ? なあ? ねえ?」

ゴルベールは、ついうつかりフーケのその手にやられ、宝物庫の壁の弱点について語つてしまつたことを思い出した。あの一件は墓場まで持つて行こうと思いつつ、オスマンに命わせた。

「そ、そ�ですな!! 美人はただそれだけでいけない魔法使いですな!!」

「そ、そのとおりじゃ!! 君はつまいこと言つな!!」ゴルベール君「!!」

ゴルベールが呟わせてくれたことに安心したのだろう。オスマンは四人の方向を見た。

ルイズとキュルケ、そしてタバサは冷たい目で一人を見ていた。しかし、銀時はにっこりと笑つてゐる。オスマンはホッとした。生徒

に冷たい目で見られるのは悲しいが、銀時の機嫌を損ねるほつが怖い。

オスマンがホツと息をついていると銀時が口を開いた。声は出さず口をパクパクさせただが…それを見た瞬間オスマンは顔を真つ青にさせ固まつた。

「あれ?…どうしたんですか?」

コルベールがオスマンの様子に気付くが反応がない。それどころかブルブルと震え出す始末。

「オーレド・オスマン!…」

コルベールが耳元で声を上げて呼んだ。オスマンはビクッと動きルベルを見る。

「…どうしたんですか?」

コルベールは尋ねるもオスマンは何でもないと首を振る。ルイズ、キユルケ、タバサも何事かとオスマンを心配そうに見つめた。

そんな生徒たちの視線に気付くとオスマンは咳払いをして話始めた。
「さて、君たちはよぐぞフーケを捕まえ『破壊の杖』を取り返して
きた」

銀時を除く三人は、いまだに心配そうにしながら礼をする。

「フーケは城の衛士に引き渡した。そして『破壊の杖』は無事に宝物庫に収まつた。一件落着じや」

オスマンは一人ずつ顔を見ながら言った。

「君たちの『シュヴァリエ』の爵位申請を宮廷に出しておいた。追つて沙汰があるじゃねえ。とにかく、ミス・タバサはすでに『シユヴァリエ』の爵位を持つておるから精靈勲章の授与を申請しておいた」

オスマンの言葉に三人の顔がぱあっと輝いた。

「ほんとうですか?」

キュルケが驚いた声で言った。

「ほんとうじゃ。君たちほどのぐらこのことをしたんじゃから

ルイズは、先ほどから怠けずに立っている銀時を見つめた。

「…オールド・オスマン。ギントキには、何もないんですか?」

オスマンはルイズの言葉に言ひ辛そうに言った。

「ざ、残念ながら…その貴族ではないので…」

「あー、俺は爵位なんていらねえよ」

オスマンは銀時の言葉を聞くとホッとして、ぽんぽんと手を打った。

「さてと、今日の夜は『フリッギの舞踏会』じゃ。このとおり『破壊の杖』も戻ってきたし、予定どおり執り行つ

キュルケは顔をぱっと輝かせた。

「やつでしたわ！－フーケの騒ぎで忘れておつました－－！」

「今日の舞踏会の主役は君たちじゃ。用意をしてきたまえ」

三人は、礼をするといドアに向かった。ルイズは銀時をひりつと見つめ立ち止まる。

「ちょっと話あるから、先に行つてていこぜ」

銀時がいつと、ルイズは心配そうに見つめるも領き部屋から出て行つた。

オスマンはすぐさま銀時に向き直つた。それからすくにコルベールを退室させた。わくわくしながら銀時の話を待つていたコルベールはしぶしぶ部屋を出て行つた。

「そ、それでギントキ様、お話とは…あのフーケのことじややうつか

オスマンはビクビクと銀時の言葉を待つた。

「いや、実はよオ。あの『破壊の杖』は俺の元いた世界の武器みてえだわ」

オスマンは銀時の言葉を聞くとじつと見つめた。

「元いた世界？」

「俺アこっちの世界の人間じやねえ」

「な、なんと……」

銀時の言葉に目をパチクリさせるオスマン。

「なんか、ルイズの『召喚』ってやつでこの世界に呼ばれちまつた」

「なるほど……そうじやつたか」

オスマンはうんうんと頷いた。

「で？あの『破壊の杖』を持つてきたのは誰だ？」

オスマンは思い出すように遠くを見つめた。

「あれを私にくれたのは、私の命の恩人でした」

「そいつは？どこでいるんだ？」

「死んでしまった。三十年前、森を散策していた私は、ワイバーンに襲われた。そこを救ってくれたのが、あの『破壊の杖』の持ち主じやつた。彼はもう一本の『破壊の杖』でワイバーンを吹き飛ばすと、ばつたり倒れてしまった。怪我をしていたのじや。私は彼を看護したが……」

「死んじまつたってのか」

オスマンは「クンつと頷いた。

「私は、彼が使った一本を墓に埋め。もう一本を『破壊の杖』と名

付け恩人の形見として宝物庫にしまいこんだ

オスマンはため息をついて言葉を続ける。

「彼は死ぬまでうわ」とのように繰り返しておつた『いいはど』だ。元の世界に帰りたい』と。きっと彼はギントキ様と同じ世界からきたんじやろつ

「いつたい、誰がそいつを呼んだんだ?」

「それが……どんな方法で彼が来たのか、最後まで分からぬままじやつた」

「オイオイ、せっかく手がかり見つけたと思ったのによ。とりあえず三十年……あれ?」

銀時は他に気が付いたことがないか聞こいつと口を開くも止まつた。

（なんか可笑しけえ?三十年前つて……天人が来たの三十年前だよな?）

銀時はオスマンをちらりと見ると確認するように聞いた。

「三十年前……間違いねえか?」

銀時の言葉にオスマンは間違いないと「ククク頷く。

（つてことは十年……いや、人間がバズーカなんてもん持てたのは天人が来てかなり後……かなり時の流れが違うつてわけか……）

銀時が眉を寄せて考えていると、オスマンが銀時の左手を掴んだ。

「ギントキ様、このルーン

「ん？ やつはなんか秘密があんのか？」

銀時は左手のルーンを見ながら納得したように呟つた。何やら違和感を感じとつていていたのだろう。

オスマンは話そうかどうしようか悩んだ。しかし、後で知ったときが怖いので早々と口を開く。

「これは、伝説の使い魔… ガンダールヴの印

「伝説の使い魔？」

「やつ、その使い魔はありとあらゆる『武器』を使っこなしたそうですじや」

銀時はルーンを眺めながら眉を寄せた。

「オイオイ、なんで俺が… そんなもんなんかに」

銀時が面倒くさがりに咳くとオスマンは分からないと首を振った。

「力になれなくてほんとすいません。ただギントキ様、私はあなた様の下ぼ… じやなく味方ですじや」

オスマンはそうこうと銀時をじっと見つめた。恐怖だけじゃなく敬愛する眼差しが混じつている。じつぜん調教は成功のようだ。

「ギントキ様が何故こいつらの世界にやつてきたのか、私なりに調べてみるつもりじゃ……しかし何も分からぬかもしない。その時は……ギントキ様に相応しい嫁さんを探します」

オスマンの決意を聞くと銀時は眉を寄せ、きつぱりと言つた。

「いや、嫁なんて探さなくていいから」

アルヴィーズの食堂の上の階が、大きなホールになつてゐる。舞踏会はそこで行われていた。銀時はバルコニーの枠にもたれ、ワインを飲みながら華やかな会場を眺めた。

中では着飾つた生徒や教師たちが豪華な料理が盛られたテーブルの周りで歓談したり、優雅に踊つていたりしていた。

銀時のそばの枠には、ギーシュが持つてきた沢山の肉料理。そしてシエスターが持つてきたワインの瓶がのかつていていた。先ほどまでそばに居た、万事屋メンバーのギーシュとモンモランシー。そして綺麗に着飾つたキュルケはパーティーが始まると中に入つてしまつた。もちろんギーシュはすつと銀時のそばに居ると言つていたのだが。銀時の踊つてこいつと言つ言葉に、見ていて下さいなどと言いながらモンモランシーと一緒に中に入つていつた。当然銀時は見る気一切ない。

「相棒、飲みすぎじゃねえか？」

バルコニーの枠に立てかけた抜き身のテルフリンガーが心配そうに言つた。

先ほどまでフーケ戦に置いていかれたことをぶつぶつと語っていたのだが、もう気がすんだどうか。

「あ？ ちょっといろいろあんだよ。謎が増えるばかりで…俺アコン君じゃねえんだぞ…！ 頭脳も身体も大人だバカヤロー！」

「いや、何言つてるかわからんねえよ」

銀時は面倒くさそうにガシガシと頭を搔いた。しかしデル公には何が何やらさっぱりだ。

そのときホールの壮麗な扉が開き、ルイズが姿を現した。樂士たちが一旦音楽を止める。門に控えた呼び出しの衛士がルイズの到着を告げた。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおなづり…！」

ルイズは長い桃色がかつた髪をバレッタにまとめ、ホワイトのパティードレスに身を包んでいた。肘までの白い手袋が、ルイズの高貴さをいやになるほど演出し、胸元の開いたドレスが小さな顔を宝石のように輝かせている。

樂士たちが再度小さく、流れるように音楽を奏で始めた。ルイズの周りには、その姿と美貌に驚いた男たちが群がりさかんにダンスを申し込んでいた。しかし、ルイズは誰の誘いをも断ると、バルコニーに居る銀時へと近寄る。

ルイズは、少し酔い始めた銀時の前に立つと、腰に手をやつて首をかしげた。

「楽しんでるみたいね」

「あ？ まあな… お前」^{ハシ}馬子にも衣装じやねえか

「その通り！ ！ 流石相棒だ」

銀時はワインを一口飲み頷きながら言った。銀時の言葉にテル公は楽しそうに笑う。そんな銀時とテル公を見てルイズは眉を寄せる。

「悪かつたわね！」

「そういや、お前踊らねえのか？」

ホールで踊る人々を見ながら銀時は首を傾げた。

「相手がいないのよ

ルイズは手を広げた。

「いや、誘われてただろ…」

銀時が言つもルイズは答えずすと手を差し伸べた。

「なんだよ？」

「踊つてあげても、よくつてよ

目を逸らし、ルイズはちょっと照れたように言った。銀時は眉を寄せじつと見つめる。

「あー、踊りとか面倒くさいよオ

しばらぐの沈黙が流れた。ルイズはドレスの裾を恭しく両手で持ち上げると膝を曲げて銀時に一礼した。

「わたくしと一曲踊つてくださいません」と。ジョントルマン「そう言って顔を赤らめるルイズはかなり可愛くて、綺麗で、清楚であつた。

「つたく、俺はダンスなんぞしたことねえからな」

銀時はため息混じりにルイズの手を取る。一人は並んでホールへと向かった。

ホールに着くと銀時はルイズに合わせて軽やかなく踊り出した。

「ねえ、ギントキ。信じてあげるわ

「何を?」

「その……あんたが別の世界から来たって」と

ルイズは軽やかに、ステップを踏みながらそつ呴いた。

「……信じてなかつたのか?」

「今まで半信半疑だつたけど……でも、あの『破壊の杖』……あんたの世界の武器なんでしょう? あんなの見たら、信じるしかないじゃ

ない

それからルイズは少し俯いた。

「ねえ、神楽ちゃんつて子の元に帰りたい？」

「ああ、帰りてえな。心配してんだろ？ しょオ。でも帰り方わからねえし……しばらぐは無理だな」

そうよね……つと眩きルイズはしばらく無言で踊った。それからルイズはちょっと頬を赤らめ、思い切ったよつと口を開く。

「ありがとう」

銀時は突然のことによきよとんとしてルイズを見つめた。

「その……フーケのゴーレムに潰されそうになつたとき……助けてくれたじゃない」

ルイズは何かを誤魔化すように、そう眩いた。銀時はじつとルイズを見つめ少し照れたようにルイズの頭を撫でた。

「気にすんな。俺はお前の使い魔であり、仲間だる」

銀時はそう言い、ルイズに笑いかけた。

第1-2訓 異性と出かけたからハトトートとは限りない（記書モ）

大変長らくお待たせいたしました。

やっと完成です

今回は…いえ、今回もかなりキャラ壊れしております。
覚悟の上お読み下せじませ

第1-2訓 異性と出かけたからハトリーとは限りない

「」はトリステインの城下町…ブルドンネ街の一番大きな通りだ。その通りを一人の男女が歩いていた。銀時とシエスタである。

「あー、やっぱ遠いわ。長じこと乗つてたら身体鈍つりまつしよオ」

銀時は肩を回し身体を解しながら言つた。シエスタは銀時を見て申し訳なれやうに咳く。

「すいません、ギンさん。せつかくのお休みの日…」

そんなシエスタを見ると銀時はボソッと咳いた。

「別に氣にすんな。お前にはよく話にならぬじよオ」

「ギンさん…ありがとハジヤニサ…」

銀時の言葉にシエスタはにっこりと笑つて礼を言つ。そんなシエスタを見ると銀時は照れくさうに頬をポリポリと搔いた。

「あー、ほり、早く行くぞ」

「はー…」

銀時が急がせて歩き出すとシエスタも返事をして、銀時の隣に並んで歩き出した。

そんな仲の良さげな一人を黒いオーラを漂わせながら見守る集団がいた。

「なによーアレ……ダーリンってば酷いわ……あたしの誘いは断つておいて……あんな女なんかと……」

キュルケである。その傍らには本を読んでいるタバサ、それに万事屋メンバーのルイズ、ギーシュ、モンモランシーがいた。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ。あなた……昨日事件があるなんて言うからついて来たのに、これはどういうこと?」

モンモランシーが怒ったように言った。

そう、実は万事屋メンバーは昨日キュルケに呼び出されたのだ。なにやら重大な事件が起きたと。

「あら? 感謝されることはあつても怒られることはないわよ

キュルケは一旦銀時から田線を外してきつぱつと肩にかかる髪を手で退ける。

「だつて……あなた達もダーリン、いえギントキのこと気になるでしょ?」

「なつ! あんなバカ天パ氣になるわけないじゃない! …!」

キュルケの言葉に憎々しげに一人を見ていたルイズが顔を真っ赤にしてきつぱりと言った。

するとギーシュが薔薇を持ち今日もキザ度マックスで言い出した。

「確かに……僕は気になるね。ギンさんの隣は右腕の僕だけでいいだ
ろ？」「

目を閉じ薔薇を持ち香りを嗅ぐよつ鼻をちかづけると遠くにいるシ
エスターを指差しきつぱり言つた。

ギーシュの言葉に周りは眉を寄せ静まり返つた。モンモランシーは
チラッとギーシュ以外を見渡すと口を開いた。

「ギーシュ……あなたいつから右腕に？」

「やだなア、モンモランシー。産まれた時からに決まつているじや
ないか」

「やだ……」

あまりにも当たり前のこのように言つ、ギーシュにモンモランシー
は呆れて突つ込むことも出来なかつた。ギーシュ以外の人たちから
は不思議な空気が流れる。

「と、とにかく……あなた達には一人を邪魔してもらいたいのよー。
！」

キュルケが空気を変えるようにきつぱりと言つた。

「そんな人の恋路を邪魔するなんて出来るわけないじゃない。ねえ、
ルイズ」

モンモランシーは呆れたように言い、ルイズを見た。

「誰がルイズ？わたしは別れ屋ルイズ13よー！」

ルイズはどこから出したサングラスを掛け杖を銀時とシェスターに向かつて構えた。

「何してんのオオオー！…つてかー3つて何…別れ屋つて何…！」

モンモランシーがルイズの言動を見て叫ぶよつに突つ込む。しかし、ルイズはまるつきり無視をした。

「わたしはね。ギントキなんてどうでもいいわ。けど…ふ、二股は許せないもの」

「「ふ、二股？」」

ルイズの言葉にモンモランシーとキュルケが反応をした。

「まあ、ダーリンって恋人いるの…！けど…どんな恋人だろうとあたしの足元には及ばないでしょう。それに奪略なんて燃えるわ」

キュルケはルイズの言葉に恋の炎がいつそう燃え上がったようだ。キュルケが燃えている隣ではモンモランシーがにっこり微笑んでいた。

「せう…ギンさんも二股してるの…！…くえ…」

だんだんと声色が怖くなつていいく。モンモランシーはギーシュのことで二股には敏感なようだ。モンモランシーは服を探りサングラスを出してかけた。

「モ、モンモランシー？」

ギーシュが目をパチパチとして声をかけた。

「モンモランシーじゃないわ。わたしは別れ屋・いえ、殺し屋モンモンーーー！」

ギーシュに向かつてきつぱり言つモンモランシー。別れさせるどころか暗殺するようである。

ルイズとモンモランシーはじつとキュルケを見つめる。そしてサングラスを差し出した。キュルケは頷くとサングラスを受け取りかける。

3人の中で不思議な友情が産まれたようだ。

「ギントキ達見えなくなる」

そんな三人にボソッと呴く人物が居たタバサだ。タバサはいつの間にかサングラスをかけており遠くにいる銀時達を指差した。三人は頷くと銀時達を追つていく。タバサはそれについていった。

「ちょ…待ちたまえ、君たち。つと言つか今回の突つ込み僕なのか？」

ギーシュは疑問に思いながらも女の子4人についていった。

それからモンモランシーは何度も銀時を暗殺しようとしているが、ユに止められた。そのおかげか銀時とシエスタは無事に買い物が終え、喫茶店に入つて行つた。

わいせつ今口のお札にシエスタかハフエを銀時においなむいた

「ギンさん。今日はほんとにありがとうございました」

シエスタは銀時の向かい側に座りにつくりと微笑んだ。

「あー、だから別にいいって。ほら、お前は何にするんだ?」

銀時は頬をポリポリと搔くとメニューを開き相手が見えるようにテーブルの上へと置いた。シエスタは置かれたメニューを覗き込む。

「そうですねえ。あつ、これなんて美味しいぞ！」

「ん? どれどれ

シエスタはメニューに載つてある甘味を指差した。銀時はメニューを覗き込む。一人の顔は自然と近づく。

「おっ、ほんとだ。美味そうじゃねえか」

「そりですよね！－ほんと美味し…ツ」

シエスタはメニューから顔をあげると驚き顔を真っ赤に染めた。銀

時の顔が近くにあつたからだ。実はシエスタは銀時のことが気になつていて。今まで、平民が貴族に逆らうことなんてなかつた。…それなのに目の前の銀時は貴族に逆らうどころか決闘をして勝つてしまつたのだ。それに分かり辛いがとても優しくさり気なくシエスタを手伝ってくれる。

今回の買い物だつてついて来てくれた。

容姿は確かに死んだ魚の目をしているがそれはそれで味わい深いものがある。それに意外と整つた顔立ちをしている。

そんな銀時の顔が近くにあつたのだ。シエスタは頬を染めたままじつと銀時を見つめた。そんなシエスタに気付き銀時は眉を寄せた。

「ん? なんだ?」

「い、いえ……あ、あのギンさん…」

シエスタはゴクリと唾を飲み込み銀時に何かを言おつと口を開いた。その時近くでパリーンと何かの割れる音がした。

二人はキヨロキヨロと辺りを見渡す。しかし何もないようだつた。

その頃ルイズ達はというと、銀時達からは仕切りがあり見えない所の席に座り一人を見ていた。

「お姫さま、だいじょ…ひつ

店員のひとりが先程の何かが割れた音を聞き駆け寄つてきたがテー

ブルの様子を見て止まった。

「認めない。認めない。あんな小娘わたしは絶対認めない！…」

ルイズがブツブツと呟きガラスのコップを握り締め割っていたのだ。その隣には、クスクス笑いながら手近にあつた店のナイフを一人に向かつて投げようとするモンモランシー。それを慌てて止めるギーシュ。その向かい側には、

「あつ、ダーリンつてばパフェ頼んでる。可愛い」

悦んだ表情で銀時を見つめるキュルケ。メニューを開きボソッと店員に注文しているタバサがいた。

「あんな近付いて…も、もう我慢できない！…」

ルイズが一人のもとへ行こうと立ち上がつた。しかし、キュルケがそれを止める。

「まあ、待ちなさいよルイズ。こりこりのは空氣の読めない奴を投入させるのが一番よ」

ルイズを見るときつぱりと言つた。その言葉にルイズは一回じまつた。モンモランシーも聞いていたようでキュルケを見た。

「空氣が…」

「読めない奴…」

ルイズとモンモランシーは呟きギーシュをじつと見つめた。そんな

「一人にキュルケは頷くとギーシュを見てきつぱり言った。

「あなた行つてきなれー」

「え？ 僕？」

ギーシュは自分を指差した。するとタバサまで含めた4人はコクンつと頷いた。

一方、銀時とシエスタは注文した品を食べていた。

「はあ…ひ、うめえ」

子供のようににこにことパフェを頬張る銀時。そんな銀時を見て可愛らしいと思い微笑むシエスタ。

そんなほのぼのとした二人のもとに空氣読めない奴。そう、ギーシュが現れた。

「や、やあ…ギンさんじやないか？ 偶然だね」

バレないかどうか緊張しているのか少しぎこちなく…薔薇を持ったまま銀時に近付くギーシュ。そんなギーシュを銀時とシエスタはじつと見つめた。

「あー、キザじやねえか。ビラしたんだ？ こんな所で」

銀時がパフェ用の長いスプーンをペロリと舐め口に加えると尋ねた。

「いや、ちょっと薔薇が切れちゃって… 買い出しだったんだ？」

「薔薇？… ふうーん… 買い出しなら俺達と一緒にだな」

「え？」

銀時の言葉にギースコはキョトンとした。じつと銀時とシエスタを交互に見つめる。

「あの… ギンさんたちがトーントなんじゃ… ないのかい？」

ギースコの言葉にシエスタは顔を真っ赤にして立ち上がった。

「ち、違います… そんなわけないじゃないですか… ギンさんは買い出しについて来てくれただけで…」

「シエスタ… 確かにそうだけどそんな力いつぱい否定しなくても」

シエスタの言動にそんなに嫌なのかと銀時は悲しくなった。そんな銀時を見てシエスタは慌てて謝る。

「ち、違うんですよ… ギンさん… そんなつもりじゃ」

ギースコはそんな一人を見ながら結局キルケの誤解だったのかと思いつの4人に伝えようと向いた。しかし、あまりの黒オーラを放つてゐる3人に怖くなり銀時の方に顔を向けた。

「あの… ギンさん。出来れば相席いいかい？」

ギーシュの言葉に反応したのはシエスタ。

「あ、だったらギンさんその荷物こちらこ…あやあ

シエスタは銀時の隣にある荷物を受け取る「と」田通路に出ようとしました。しかし通路と席の間に段差があることをつかり忘れてしまつていたシエスタは身体のバランスを崩し転げそうになってしまつ。それを見たギーシュはシエスタをとつさに受け止めた。

「あ、ありがとう」わざわざ

「いや、美しきレーティが無事でよかつた」

ギーシュはシエスタを抱き止めたまま薔薇を差し出した。その時また近くでパキッと何かが折れる音が聞こえた。そして突き刺さるような鋭い視線。

モンモランシーが手に持っていたナイフを折ったのだ。この時からモンモランシーのターゲットはギーシュに代わった。

ギーシュは顔を微かに青ざめゆつくりとシエスタを離し銀時が荷物を退けた隣に座つた。

シエスタは銀時にドジな所を見られたせいか恥ずかしそうに席に戻つた。

それからしばらくはシエスタと銀時だけほのぼのとした会話が続いた。もちろん銀時は会話よりもパフェに夢中だつたが…

「ん? シエスタ…付いてるぞ」

銀時はパフェを食べ終えたのか顔をあげた。その時シエスタの頬に生クリームがついているのに気付いた。銀時は手を伸ばしシエスタの頬から生クリームを指で取り舐めた。

「ん…甘えつ」

そんな銀時にシエスタは真っ赤。ギーシュは嫌な予感がしてブルブル震えた。銀時は「…」と甘味しか見えてないのか、メニューを開き次は何を頼もうかとご機嫌だ。

そのとき…近くでガタガタガタッと一斉に立ち上がる音がした。

銀時はメニューから顔を上げてそして青ざめた。目の前には鬼がいた。…いや、よくよく見たら鬼では無く禍々しいオーラを纏つたにっこり笑顔のルイズとモンモランシーだった。笑顔なのに何故か二人の背後にははつきりと鬼が見える。その後ろに苦笑いを浮かべたキュルケと手を合わせたタバサが見えた。

「ギントキ」

「ギーシュ」

「「は、はい…」」

銀時とギーシュは呼ばれるとビクビクしながらも返事をした。正直何がどうなつてこうなつてゐるのか理解不能である。

そんな混乱している銀時を置いて一人は拳を振り上げた。

「ちょ…ま、待て…銀さん意味不明なんだけど…」

「そう、待ちたまえ。君たちは誤解している…!」

銀時とギーシュが手を前に出しあわわと停止をかけると、ルイズとモンモランシーは顔を見合せた。それを見てホッと息をつく銀

時とギーシュ…しかし

「「問答無用よオオオ！…くたばれ女の敵イイイイ…」」

「「ギヤアアアアツ…」」

ルイズは銀時。モンモランシーはギーシュをボコボコにし始めた。周りでは喫茶店の店員や客がブルブル震えていた。

その事件のあつた夜。

「いてててつ…つたく…なんで俺がこんな目に」

「何よ。悪かつたつて言ひてるじゃない」

あの後なんとか誤解の解けた銀時は学院に戻り部屋でルイズに治療を受けている。ルイズは罰悪そうな顔で銀時の頬に絆創膏を張りながら言った。

「だ、大体元はと言えばギントキが悪いのよ…」、恋人いるのに…他の女の子と出かけたりするから

ルイズは唇を尖らせて不満そつときつぱりと呟く。そんなルイズの言葉に銀時の目を見開いた。

「は、はあ……」、恋人才オオオ！？？「

銀時は田をぱちくりと叫んだ。その様子にルイズがじつと銀時を見つめる。

「誤魔化そだなんてそつはいかないんだから……神楽ちゃんって恋人がいるじゃないの……」

「……か、神楽アアアアー！」

銀時はルイズの言葉にびっくりして即座に否定し始めた。

「オイオイオイ、違うから……絶対ないから、有り得ないから……ってかんなことになつたらハゲに殺されるわ……」

銀時は大きな声できつぱりと全否定した。

「え？違ひの？」

「当たり前だろ……なんで神楽と……あいつは妹みてえなもんだぞ」

銀時はハアッとため息をつく。そんな銀時を見てルイズはにっこりと嬉しそうに微笑んだ。

「そ、そり……つともうそろそろ晩ご飯の時間だから、行くわよギントキ」

ルイズはここにことじ機嫌そつにドアへと向かつて行つた。いきなりご機嫌になつたルイズを見て銀時は心底不思議そうに首を傾げるもついて行つた。

そんな一人が去っていくのを見たテル公はボソッと呟く。

「おでれーた。俺の相棒は鈍感すぎだ」

第1-3訓 下着泥棒とか…まるでアレじゅねえ？（前書き）

出来ました。もひ、なんか…ほんとダメですが…なんとか…形だけは作りました。中身はほんとダメダメです

そして一言。銀時 ルイズ色がめちゃくちゃでいいです…！

あつ、後書きにお知らせがあります。

第1-3訓 下着泥棒とか…まるでアレじじゃねえ？

「な、ないないなーいーー！」

ある休日の朝。トリステイン魔法学院のルイズの部屋でそんな叫び声が響いた。

声の主は部屋の主ルイズだ。

「ギントキー！ギントキー！大変なの、起きて！」

ルイズは今だ夢の中にいる銀時を揺さぶり始めた。

「ん……良い子だからもう少し寝てよくな」

銀時は起きたくなかったのだろう。寝ぼけ眼でいつも自分の寝ている布団にルイズを引っ張り込み抱き枕にした。

「なつーー？」

ルイズは一瞬で頬を真っ赤に染める。そしてドキドキしながら恐る恐る銀時の背中に手を回そうとした。

その時、バターンー！と勢い良く部屋のドアが開けられた。

「ギンさんー！大変よ。みんなの下着が…………お邪魔しました」

入ってきたのはモンモランシー。部屋の中の一人を見ると顔を赤らめた。そして入ってきた時と同じように勢い良くドアが閉められた。

「ちよ…待つ…」、「誤解なのよオオオオ…！」

ルイズは顔を真っ赤に染め上げ叫んだ。

「それで…何が大変なんだ」

「こ」は魔法学院の食堂あの後起きた銀時は、朝ご飯のついでに事情を聞こうとモンモランシーを呼び出したのだ。ちなみにギーシュも忠犬の「」とくついて来た。

「いや、ギンさん…その前に…あなたの顔が大変じゃない？」

モンモランシーに指摘された。あの後、ルイズは恥ずかしさのあまり銀時を殴りまくった。顔の形が変わるまで…

「気にすんな。ギャグ補正で次のシーンでは戻ってるからよオ

「や、そり…」

モンモランシーは苦笑いを浮かべた。そして万事屋メンバーを見る口を開いた。どうやら最近この学院内で頻繁に下着泥棒が現れるそうだ。

「下着泥棒ねえ…」

銀時は朝ご飯についてきたデザートのプリンを頬張り考え込んだ。

ちなみに顔は元通りに戻っている。

「さうなの……もうたくさん取られて……なんとかならない？」

「わたしも取られたわ……！」

モンモランシーの言葉にルイズも付け加えて言った。そんな二人を見ると銀時はため息をつく。

「オイオイ、昔はよオ。服の下はノーパンで過ごすのが流行つてたらしいぜ。お姫様も……お姫様なのに下はノーパンだよ。お前……そのギャップがいいんだよ。おしとやかな顔してノーパンかよ……みたいな……ッ」

ドカッという音と共に銀時は後ろから凄まじい衝撃が走つたのを感じた。何かで頭を殴られたようだつた。銀時は慌てて後ろを向く。

「あなたのノーパン談義は……どうでもいい」

居たのは、タバサとキュルケだつた。
ちなみに殴つたのはタバサだ。

「いっつ……いきなり殴るか？普通

銀時は眉を寄せて頭を撫でた。

「殴る？……違う。シッ！」

タバサはきつぱりと言つた。銀時は苦笑いを浮かべる。するとルイズが口を開いた。

「キュルケ！－ま、まさかあんたも…」

「ええ。あたしは勝負パンツを。タバサもお気に入りのパンツを盗られたわ」

キュルケは眉を寄せて言った。

「そう…あんたも…つたく、下着泥棒許せないわ！…ギントキ、なんとかしなさいよ…！」

ルイズはバンバンと机を叩きながら言った。

「…あー、なんとかって言われてもなア。お前らはどうしたいんだ？盗られたパンツが戻ってくれば気が済むのか？」

「「「もちろん。パンツを取り戻したうえでパンツを盗んだ奴を血祭りにしたい」」

モンモランシー、ルイズ、キュルケそしてタバサまでもが同時にきつぱりと言った。

「……もう、パンツはく文明人の発言じやねえよ。裸でやりもって駆け回る人の発言じやねえか」

銀時は微かに引いた顔で呟く。

「下着泥棒は女の敵よ！…生かしておけないわ！……もひ、ギントキが手伝ってくれないならわたしたちでやるしかないわね！…行くわよみんな」

ルイズが立ち上がりつと女子3人は立ち上がつた。そして去つていいく。

「ええ、君たち……ちよ……ギ、ギンさん……いいんですか？」

去つていいく女子たちを慌てたように見つめるギーシュ。そんなギーシュを見て銀時は頭を搔く。

「良いも何も……犯人は日星ついてるだろ？」

「え？ さ、流石ギンさん……それで一体誰が……」

ギーシュの言葉に銀時は立ち上がるある部屋へと向かつた。

銀時とギーシュ。一人が歩いてきたのは、学院の先生方が集まる職員室のようなもの。

銀時はギーシュを廊下で待たせ中に入った。そして二人の教師を連れてきた。その人物はハゲ……じゃねえや。コルベールとギターである。

「え？ まさか……その二人が犯人なのかい？」

ギーシュは銀時の連れてきた二人を見ると目をパチクリさせた。

「そうだ、いいか？ キザ。ハゲはエロ……エロはハゲだと決まつてん

「なる程、流石ギンさん！！」

「ま、待つて下さい。よく分かりませんがそれ偏見じやないですか
アアアー！」

銀時の言葉を聞き、尊敬の眼差しで見つめるギーシュ。そして状況を理解してないコルベールがきっぱり言った。

「 そ う だ。そ れ に 何 故 私 ま で 連 れ て こ ら れ た ん だ ！ ！ 」

相変わらず短気なギトーが怒ったように怒鳴った。しかし銀時は我関せずつといった態度で悪気なく呟つ。

「ギャー、ギャー、ギャー、ギャー、うるせえよ。銀ちゃんもう疲れたんだよ。だからとつあえず犯人つて部屋でまだ『ロロ』『ロロ』こときてえんだよ。だからとつあえず犯人つて」とになつとけつて……ちなみにハゲじゃないほうはなんとなくだ」

「 そ う だ ！ ！ 大 体 な ん の 犯 人 だ ！ ！ 」

「コルベールとギターは口を揃えて言つた。するとギーシュがボソッ」と呟いた。

「あの…下着泥棒です」

「下着泥棒？…ミスター・コルベール。まさか君が……………いつかやる
と思つてたが」

ギーシュの言葉をギターは一瞬首を傾げるも納得して頷いた。

「ちょ……何納得しているんですか……大体僕はやつてませんよ……」

コルベールを除く三人は疑いの目でコルベールを見つめた。

「なんですかその目……失礼なツ……大体下着泥棒つといえ、最近巷を騒がしてる怪盗ブリーフ仮面のことじやないですか？」

「……怪盗ブリーフ仮面？」

三人は首を傾げた。コルベールによると……真っ赤なブリーフを頭にかぶり貴族のマントを身につけ魔法で家々に忍び込んで、綺麗な娘の下着ばかりを盗んでモテない男にバラまくという怪盗が居るらしい。

銀時とギターは眉を寄せた。そして同時に懐を探る。取り出したのは女性物の下着。

「まあかこのパンツにそういう意味が

「つむ、私も始祖ブリミルのご加護かと……」

「二人はモテない男にされたのですね」

二人を見ると勝ち誇ったように言つコルベール。そんなコルベールの懷からも女性物の下着が見え隠れしていた。

ギーシュは苦笑いを浮かべながら薔薇を弄つていた。

「それじゃあ、この学院の下着をかつぱらつたのもコイツの仕業だ

と…」

「コルベールは下着を隠しながらコクンッと頷いた。

「ケツ、ただの変態怪盗が義賊気どりか！！」

「ええ、気にくわないですよ。ほんと気にくわない」

銀時とギターはパンツの両端を持ち引っ張り始めた。

「「なんで俺（私）がモテないの知つてんだアアアアアアア…！」」

ビリリリリッと勢い良くパンツが破けた。

「「ええええ…！」」

「コルベールとギーシュは驚きのあまり叫んだ。すると銀時はギターを見る。

「よし、ギター。俺らで捕まえるぞ…！」

「もちろんだ。ギントキ」

銀時とギターは田を再度合わすとドスドスと歩き出した。そんな二人を驚き呆然と見ていたギーシュは我に返った。

「ま、待つて下さい。ギンさん…！…てかなんでそんな仲良し風味 イイイイ…！」

ギーシュは叫びながら一人を追いかける。

残されたコルベールはしばらぐの間呆然としていた。

それから三人は女子5人と合流した。え？ 一人多いって？… シエスタも盗られたようです。

そして学院の裏側。洗濯物干場に8人は集まつた。干場には一枚のパンツが干されている。

「おい、お前らいいか。相手はパンツの量より娘の質を求めてる変態だ！…」

「やつ、必ずここに舞い戻るでしょうな」

「「そこ」を殺る！…」

銀時は木刀を抜き、ギターは杖を取り出してきっぱりと言つた。

「そうよ…ブリーフ仮面だか、トランクス仮面だか知らないけど…絶対ゆるせないわ！…」

「ええ、ルイズ。今回はあなたの言つとおりよ」

ルイズの言葉にキュルケは「クンツ」と頷いた。

「あ、あの…陛下さん、ちょっと殺氣立ち過ぎのような…」

「何を言つてゐるの……シエスタ……」今はもう戦場よ。遊び半分なら危険だから帰りなさい……」

「いや、帰るも何も……私の持ち場なんで……」

ルイズの言葉にシエスタは苦笑いを浮かべた。

「まあ、戦場が持ち場なんて流石メイドね……メイドらしく戦士に送つてあげなさいよ……」

「ルイズ、それめちゃくちゃつまんないわ」

ルイズの言葉に呆然としていたシエスタを見て、モンモランシーが我に返り突っ込んだ。ぱつたんとしての使命を取り戻したようだ。

一行はそのまま近くの茂みに隠れて夜になるのを待つた。……待つた。ひたすら待つた。

「ギンさん……来ませんねえ。今日は現れないのかしら……」

モンモランシーは銀時に話し掛ける。銀時は眉を寄せた。

「いや、大丈夫だ。必ずくる……」

銀時がきつぱり言ったその時、突然風が吹き始めた。そして人影が塔の上より顔を出した。

「ふははははつ、神聖なるパンツに導かれし勇者。怪盗ブリーフ仮面、ここに見参……」

「タイミング良く来た……」

モンモランシーが言いつとシエスターと銀時以外は杖を取り出した。銀時は洞爺湖を構える。

先手必勝とばかりにキュルケが人影に向かってファイヤーボールを放つた。ものすごい勢いで炎の塊が飛んでいき、そして当たるまえに消えた。

「なつ……？」

キュルケは目を見開いた。そんなキュルケをよそにタバサがボソッと呟く。

「風の魔法……」

どうやらキュルケの炎は相手の放つた風にかき消されたらしい。

「ふははははつ。待ち伏せしているから何かと思えば、貴様らそんなものか……」

怪盗ブリーフ仮面が笑いながら降りてきた。そして干されたパンツへと向かっていく。

銀時達は眉を寄せてそのまま攻撃を仕掛ける。しかし、相手のもとにたどり着く前に風に遮られてしまつ。

「さて、諸君……」のパンツが変態の手に渡る……その瞬間を黙つて見ているがいい

怪盗ブリーフ仮面はさつまつとパンツに手を伸ばす。

「へつ……」

パンツの持ち主は嫌そうに眉を寄せた。そのとや、ギターとタバサの合体風魔法が放たれた。

怪盗ブリーフ仮面は即座にその風に自分の風魔法をぶつけた。風はぶつかりあい相殺される。怪盗ブリーフ仮面の周りを盾のよつて守つていた風が消えた。

「こまだ、ギントキ……」

「な、なにッ！？」

ギターが叫ぶ。怪盗ブリーフ仮面は慌てて風で盾を作りつとするが遅い。

「遅ヒッ！」

銀時は木刀を怪盗ブリーフ仮面に振り下ろした。そして怪盗ブリーフ仮面は白田を向いて倒れた。

怪盗ブリーフ仮面を倒した日の夜、事件を終えた銀時とルイズは部屋でまたたりとしていた。

「それにしても…ギントキ、どうしてあんなに協力してくれたの？」

ルイズは不思議に思つていたことを聞く。確かに銀時は最初ノーパンがどうとか言つて協力しようとしてくれなかつたのだ。

その言葉に銀時は眉を寄せた。流石にモテない証のパンツをもつたからなどと言い辛い。

「そ、そりや…お前…あれだ。…あー…自分の主人のパンツ盗られただんだ。普通は怒るだろ」

銀時は困つたように適当に言い訳をした。ルイズはその言葉に顔を真つ赤に染めた。まさか自分のためだとは思つてなかつたのだ。ルイズの胸は温かな気持ちとドキドキ感で一杯になつた。

「ギントキ…あ、ありがと…」

ルイズはボソッと囁くように礼を言い、チュッと頬にキスした。

「へ…？」

銀時はいきなりのことにポカーンとしルイズをじつと見つめた。そんな銀時にルイズはきつぱりと言つ。

「か、勘違いしないでよ…！…これは頑張つた使い魔に対してのお礼なんだから…！」

ルイズは顔を真っ赤にしてきつぱり寝る！！つと言い布団を被つた。銀時も最初は驚いていたが…よくよく考えたら、契約方法が、キスだつたのでこれが普通なのか？つと思い寝始めた。

第1-3訓 下着泥棒とか…まるでアレじゅねえ？（後書き）

はい。皆様…今日は素敵なお知らせがあります！！

な、な、なんと…PVが10万突破しました！！

これも皆様のお蔭です。つとめに記念雑談をしたいと思います。

雑談は、新生万事屋と江戸万事屋でやろうと思います。

それで…雑談内容ですが…幾つか候補があるので…どれが一番読んでみたいか投票して下さい。

1、銀時のモテモテ度について（新八の暴走危険度高め）

2、これから先の物語の展開について（他に銀魂キャラ現れるのかななどのネタバレ有り）

3、銀時の居ない江戸の様子

4、短くていいのでこの3つのテーマ以外が見たい

もし、4の場合はテーマ詳しく教えて下さい。そして出来そうなテーマをやつます

それでは、投票お願いします！！

番外編だから…やつたい放題やつ迺んだら…（番外編）（前書き）

はい、なんで番外編とお思いの方いると思こます。

あえて書ね…なんとなくです。思い付いたし書いつ…みたいな（笑）

今日はシンドレラパロになつております。
ギャグですのでいつも以上に色々ヤバいですが、承ります。
ちなみに友情出演で新ハと神楽がいます。

あつ、投票まだまだ受け付けております

それでは、どうぞ

番外編だからいい……やつたい放題やつ迺ひだり……（番外編）

むかーし、むかし、あるといひにひとりの男がおりました。その男は銀髪の天然パーマに死んだ田をしており……やる気が一切ありませんでした。

男の名前は銀時。銀時は今日も意地悪な義父ギター、義妹モンモランシー、義弟ギーシュに苛められていました。

「ギントキー……向をやつてこる……早く飲みに行こうではないか！」

「ギンちゃん……香水調合してみたの。万事屋メンバーで持たない？」

「流石ギンさん……主役ですね」

…………苛められて……

「こや、これ苛められてないだろ」

銀時がボソッと小さく呟いた。

皆さま……これはシンデレラパロなんで頑張つて下さいませ。ナレーションの言葉を聞き義父、そして妹、弟の態度が変わった。

「つむ、仕方ない。それじゃあ、ギントキをつと掃除をしたまえ」

「わうよ……ギンちゃん……早く」飯を作りなさい……

「ギンセニ…といあえず一緒に薔薇について語り合わないかい？」

「このまゝ毎日毎日苛められていく銀時。ちなみにギーシュのは得意なのだが、長い間薔薇について語り合つなど銀時にとつて苦痛以外何者でもない。

つといふか精神的攻撃な分ギーシュの苛めが一番辛いであろう。

何時ものように苛めて合ひ銀時。しかし今日は違つた。今日はお城の美しいお姫様が舞踏会を開き曰那様を捜す曰なのだ。この街の男共は皆が皆、身だしなみを整え城へと向かつ。もちろん銀時の住んでる家も例外ではない。

「とりあえず舞踏会に行かねばなるまい」

「…まあ、仕方ないわね。そういう設定みたいだし、行くわよギー

シュ」

「モンモランシー…僕はギンさんとの語り合つてこれがしきから…つて聞いてる…?」

ギター、モンモランシーはマントをなびかせドアへと歩く。もちろんギーシュは首根っこを掴まれモンモランシーに引きずりられて去つていった。

家に残された銀時は悲しんだ。

「いやア、やつと一人だわ。さて……眠りするかな」

自分の寝床に入ると一皿を気にせず泣き出す銀時。

「……グウグウ……ん……銀さんも……食べれにや……ツー！？」

そんな銀時をかわいそうに思つたのか……ドカツと何かで頭を叩いたような効果音とともに魔法使いのタバサが現れた。

「寝ないで……」

自分の身長くらいある杖を持ちタバサがきつぱりと言つた。

「いっつ……おま……暴力反対だぞ！……」

銀時は殴られた頭を押さえながらタバサを見つめきつぱりと言つた。しかしタバサは首を振る。

「暴力？違つ……突つ込み。それより……あなたお城に行きたい？」

「殴つといでそれよりかよ……あー、お城行くよりか銀さんは寝てえよ」

タバサの言葉に銀時はきつぱりと言つた。タバサは眉を寄せた。

「お城、行きたい？」

「いや、だから行くより眠りてえんだよ」

「お城行きたい？」

「いやいや、だから聞いてる?別に行きたくないからね。銀さん…」

「行きたい?」

「いや…あの…タバサさん?」

「行きたい?」

「……」

「行きたい?行きたい?行きたい?行きたい?」

「だああああ!!分かつた!!分かつたよ、行けばいいんだろ!!
行けば!!」

タバサの『行きたい?』攻撃に銀時はとつとつ根を上げて叫んだ。

「そつ…あなたお城に行きたいの…」

銀時の言葉にタバサは少し寂しそうに呟いた。もしかしたら銀時とのやり取りが楽しかったのかもしれない。

しかし銀時はそんなタバサの様子に気付かずめんどくさいとしている。

タバサはチラッと銀時を見ると杖を振った。タバサが杖を振ると銀時の着ていた服がキラキラと光り貴族が着るような服に変わった。タバサはもう一度杖を振るとブーツが普通の靴に変わった。タバサは再度杖を振る…すると洞爺湖がデル公に変わった。

「これで…大丈夫。お城行つて」

「いや、お城行つて言われてもよオ。馬車とかなくねえ？」

銀時は眉を寄せた。確かにカボチャを馬車に変えるなどといつ作業が終わつてない。

タバサはその言葉に少し考えた。そして当然のように呟つ。

「走つて行つて」

「いやいやいや、何言つてんの…」そこからお城までめちゃくちゃ遠いんだけどオオオ…！」

銀時の言つとおり馬車でも城まで一時間近くはかかる。銀時は絶対に嫌だとばかりに近くの椅子に座りこんだ。するとタバサは無言で杖を振つた…そして悪気もなくボソッと呟く。

「あと…一時間以内に城に着かないと…あなたの天パが酷くなる魔法かけた…」

「ふ、ふざけんなアアア…！」

銀時はそれを聞いた瞬間。即座に椅子から立ち上がり外に出ると走つて城に向かつた。もちろんタバサへと文句を言いながら…

残されたタバサは銀時の飛び出して行つたドアを見つめるとボソッと呟いた。

「ギントキ…頑張つて」

こちらはお城の舞踏会です。舞踏会に集まつた男達はお姫様に気に入られようと話しかけます。

しかし、お姫様はあまり興味がないようです。

「もう、何よ……」の男達はツーーー。

「落ち着いて下さい。ルイズ姫」

「そうですよ。今日こそはきちんと姫様方には旦那様を見つけていただかないと」

お姫様のルイズは頬を膨らまして怒ります。
そんなルイズを落ち着かせるようにたしなめるのはメイドのシエスタ、そして友情出演の銀魂キャラ、志村新八だ。

「ルイズ姉は、結婚したくないアルか？」

同じく友情出演の神楽が聞いた。そんな神楽の言葉にルイズは困つたように俯いた。

「だ、だつて上のお姫様一人は結婚してないもの……神楽もしてないじゃない」

「私に、釣り合う男がいるわけないね」

神楽は舞踏会に出された食事をもぐもぐと食べきつぱりと言つた。そう、この国は4人の姉妹により納められているのだ。ルイズは三女、神楽は四女、次女のキュルケは広場の真ん中で男達に囲まれている。長女は恥ずかしがり屋なため舞踏会に居なかつた。

「とりあえず、今日こそ那様を見つけて下さい……」

新ハはきつぱりとルイズに向かつて言つた。

その時、バターン！！とけたたましい音をたてて一人の男が入ってきた。

汗だくで息切れを起こした銀髪の男である。ルイズは驚きと珍しさでじつとその男を見つめ続けた。

「ルイズ姉。あの男気に入つたアルか？」

神楽がルイズの視線に気付き聞いた。神楽の言葉にルイズの視線を辿つてシエスタと新ハもその男を見た。

「なつ！？気、気に入るわけないじゃない！…ちょっと珍しいから視線に入るだけよ！…」

「あら、ルイズ姉。それは気になつてると同じことですか？」

「そうですね。踊りでも踊つてきただうですか？」

シエスタの言葉に新ハはきつぱりと言つた。その言葉にルイズは眉を寄せた。すると先ほどまで男に囲まれていたキュルケが口を挟んだ。

「ルイズ…アナタが行かないなら、あたしが行こうかしら」

「なつ！？キュルケ…ね、姉様…あのような男が好みなの…？」

ルイズは目を見開いて驚いた。キュルケの好みとあの男があまりにも違つたからだ。

「だつて…なかなか良い男だと思つわ」

「キュルケ姉、待つネ。私が行くアル…ちょつビト僕が欲しかつたネ」

キュルケの言葉に神楽はきっぱりと言つた。そんな一人を見ながらルイズは考えた。

（あの男…そんなに良いのかしら？確かに…顔は死んだ目を除けばわるくないけど…）

「ま、待つて…！一人とも…わ、わたしが行くわ！！」

ルイズがきっぱりとキュルケと神楽は顔を見合わせ仕方なさげに引き下がつた。

「あー…つたくよ…タバサめ。まだ気持ちわりい」

だんだんと息は整つてきたが家から馬車並みのスピードでずっと走ってきたのだ。ほとんどの体力を使いきり銀時は舞踏会の会場の壁

にすがっていた。

「それにしても流石相棒だ。まさか走つて一時間以内に着くなんて」

「デル公は凄い凄いとケタケタ笑つた。

「当たり前だろ？…天パが酷くなるなんて魔法かけられたら死ぬ氣で走るわ！！」

「ぶひゃっひゃっひゃっ、そりや確かにそうだ」

デル公は本当に楽しそうだ。そんな風にデル公と話していると前から綺麗なドレスを着た少女が来た。ルイズ姫である。

「ちょっと、あんた！…！」

「あ？何だよ？」

「わたしと踊りなさい！…！」

銀時は眉を寄せた。あまりにもルイズが偉そうだったからだ。まあ、姫なのだから仕方ないのかもしれないが…

「いやだ！…！」

「なつ…あんた…平民のくせに…姫に逆らひと云ひの……」

「いのせえなア。姫だらうがなんだらうが、銀さんは今疲れてんだよ。ほつといてくれねえ？」

銀時はきつぱりと壁にすがつたまま言った。ルイズはその言葉に目をパチクリさせて驚いた。ルイズはこれでも姫なのだ…なのでこんな邪険にされることのはめつたにない。

ルイズは怒りで顔を真っ赤にそして銀時にギャンギャンと文句を言い出す。

銀時は知らん顔だ。しかし、ルイズの声とは違つ声が聞こえた。タバサが頭の中にテレパシーを送つたようだ。

(ギントキ…静かに聞いて)

タバサの声に銀時は眉を寄せた。もちろんルイズは無視である。

(…注意するの忘れてた。わたしの魔法…12時に消える…もし、12時過ぎても城に居たら副作用でアナタの天パ酷くなる)

「なんでだアアアアア…！」

銀時はタバサの言葉を聞くと叫んだ。ルイズはいきなり叫んだ相手に驚いた。

すると銀時は真剣な表情でルイズに近寄りガシッと両肩を掴んだ。

「な、何よ…」

ルイズは真剣な表情で見つめられドキッと鼓動が高鳴った。顔もだんだんと赤くなつていく。

「今何時だ？」

「はあ？」

相手の言葉にルイズはポカーンとした声を上げた。その時ちょうど12時を告げる鐘がなり始めた。

「やべえつ……」

銀時はルイズを離すとドアから急いで城の外へと走り出した。

「ちょ、あんた待ちなさいよ」

ルイズは銀時を止めようとするももうすでに銀時の姿は見えなかつた。ルイズは顔を俯かせた。そんなルイズを見た新ハとシエスタは顔を見合させて近づいた。

「ルイズ姫？」

「し、し、新ハ…あ、あの男をさ、さ搜しなさい…！」

ルイズはブルブルと怒りに震えながら言つた。散々無視されたのだ、仕方ないだろう。

「はい、分かりました」

しかし、ルイズは顔を俯かせて言つたので家臣たちには好きな男と離れて泣いて悲しむ少女に見えたのだった。

舞踏会が終わり、次の日、銀時の家にお城の使いがやってきました。

「あの…すいません。こちら、ギントキさんとおっしゃる方がいらっしゃると聞いたのですが…」

「あの…すいません。こちら、ギントキさんとおっしゃる方がいらっしゃると聞いたのですが…」

お城の使いハゲた頭をカツラで隠したコルベールが言った。そんなコルベールのカツラを見ながらギターは眉を寄せた。

「確かに居るが…家のギントキに向のよつだ」

ギターは怪しげにコルベールを眺めた。するとコルベールはお城の使いだと叫ぶ。

「お城の使いが何のようだ」

お城の使いでもギターは少し偉そつときつぱりと言った。カツラを被つたこのコルベールと言う男が偉い人には見えないからだ。一方コルベールはそんなギターの態度を気にしてはないようだ。

「ええ、お宅のギントキさんが姫様に見初められてしまひまして」

コルベールの言葉に驚くギター。最初は何かの間違いではないだろうか…と思つも…話はどんどんと進み。銀時を馬車に乗せて去つてしまつてしまつた。

その頃、お城ではルイズ姫にあの銀髪の男…銀時が見つかったと言

う報告が届いていた。

「そう。見つかったのね……あ、あんの失礼男！！死ぬまで使い魔として」「キつかってやるわー！」

ルイズは楽しそうにクスクスと笑った。その時、後ろからガタンと物音がした。

「誰ツ！？」

ルイズは物音のした方へ振り向くと目を見開いた。

あ、あんたは……

一方、馬車に乗つて城についた銀時は強制的にタキシードを着せられて結婚式が行われる城の中にある教会へとつれていかれた。

「え？ 何：これ？」

銀時はあまりのことにキョトンとした。
銀時が困っているとメイドのシエスタが近づいてきた。

「あなた様は、我が姫君と結婚なさりこの国の王様になるのです」

シェスターの言葉に目をパチクリさせる銀時。

「オイオイ、姫つてアレか？あの嬢ちゃんか？銀さん口つ」ハジヤ

ないんだけど……」

銀時は眉を寄せてきつぱり言った。すると後ろから怒ったような声がした。ルイズ姫である。

「ふざけないで……誰があんたなんかと結婚するものですか……あんたはお姉様と結婚するの……！」

そう、あの時……ルイズの後ろに居たのは4姉妹の長女であった。長女は恥ずかしがり屋で舞踏会には出でないのだが、あの夜窓から全力疾走をする銀時に惚れてしまったようだ。

「結婚するのって……強制かよ……だいたいその姫さん俺ア一度も見たこともねえぞ」

銀時が眉を寄せてきつぱりと言った。すると家臣たちは言ひ出す。

「ギントキさん、姫君は恥ずかしがり屋なのです」

「やつです、けどとっても綺麗ですよ」

家臣たちはお美しい姫君だと仕切りに言い始めた。

銀時も男である。そんなに綺麗だと言われる姫君。興味がわいてきて仕方ないであろう。

その時……姫君の準備が終わったのか結婚式の音楽が会場に流れ始めた。

銀時は少しワクワクとした。どんな美貌の姫君が現れるのかと暫くするとドアが開き、現れたのは綺麗な真っ白なドレスで着飾り、白い髪……そして長くて白い髪をなびかせたこの国の4姉妹の長女……オスマン姫が現れた。

「ギ、ギントキさま…」

オスマン姫は銀時の元へと歩いて行くと恥ずかしそうに頬を染めてじっと見つめてくる。

ちなみに銀時はオスマン姫が出てきた瞬間から固まっている。銀時が固まっている間に式は着々と進んで行つた。

「それでは、お一人とも誓いのキスを」

司会をつとめてこる新ハガキっぽりと言つた。オスマン姫は固まっている銀時に近付く。オスマン姫が一定以上近づくと銀時はやつと我に返つた。そして目の前にあるオスマン姫の顔を見ると声にならない悲鳴を上げた。

こつじて、意地悪な義家族に苛められていた銀時は…お城で姫君といつまでもこつまでも仲良くへりしましたとさ

めでたしー。めでたしー。

第14訓 物語は突然始まるもの（前書き）

まず最初に、……大変長らくお待たせしてしまい申し訳ございました。

そして、突然ですが……とある理由で第2章に入らせていただきます。

第14訓 物語は突然始まるもの

ルイズは夢を見ていた。夢の中のルイズは幼く…自分の家の屋敷の中庭を逃げ回っていた。植え込みの影に隠れて追つてをやり過ごす。

「ルイズ、ルイズ、どこに行つたの？まだお説教は終わつていませんよ！！」

そう騒ぐのは、母であつた。

夢の中でルイズは、デキのいい姉たちと魔法の成績を比べられ物覚えが悪いと叱られていたのだ。

隠れた植え込みの下から、誰かの靴が見えた。

「ルイズお嬢様は難儀だねえ」

「まったくだ。上の二人のお嬢様はあんなに魔法がおできになるつていうのに…」

そんな召使たちの言葉にルイズは悲しくて、悔しくて、歯噛みをした。そして…彼女自身が『秘密の場所』と呼んでいる、中庭の池に向かう。その場所はルイズが唯一安心できる場所だった。

あまり人が寄りつかず、池の真ん中には小さな島がある。

島のほとりに小舟が一艘浮いていた。船遊びを楽しむための小船であつた。しかし、今ではこの池で船遊びを楽しむものはいない。姉たちはそれぞれ成長し、魔法の勉強で忙しかつたし…軍務を退いた地方のお殿様である父は近隣の貴族との付き合いと狩猟以外に興味はなかつた。母は、娘たちの教育とその嫁ぎ先以外目に入らない。そんなわけで忘れ去られた中庭の池と、そこに浮かぶ小船を気に留

めるものはこの屋敷にルイズ以外ない。
夢の中の幼いルイズは小船の中に忍び込み、用意してあつた毛布に
潜り込む。

一方そのころ現実世界の銀時はフラフラとした足取りでルイズの部屋へと向かっていた。先ほどまでギター、コルベールと飲んでおりフラフラである。フラフラと危ない足取りでなんとかルイズの部屋につきドアを開けた。

「銀さん…帰つたぞオ」

「おっ、相棒。おかえり」

機嫌が良さそうに銀時はフラフラとルイズの寝ているベッドへと向かつた。

「おい、相棒…そつちは」

デル公が止めようとするも銀時はルイズの隣に寝つ転がり寝てしまつた。

ルイズが隠れてしまふすると…中庭の島にかかる霧の中から、一人のマントを羽織った立派な貴族が現れた。年は十六くらいだろう

か？夢の中のルイズは、六歳くらいの背格好だ。

「泣いているのかい？ルイズ」

つばの広い羽根つき帽子に隠れて、顔が見えない。でも、ルイズは彼が誰だかすぐにわかつた。憧れの子爵だ！―最近、近所の領地を相続した年上の貴族。

「子爵さま、いらしてたの？」

幼いルイズは慌てて顔を隠した。みつともないとこらを憧れの人を見られてしまい恥ずかしかったのだ。

「今日はきみのお父上に呼ばれたのさ。あのお話の」とでね

「まあ……」

ルイズはさうに頬を染めて俯いた。

「いけない人ですわ。子爵さまは……」

「ルイズ。ぼくの小さなルイズ。きみはぼくのことが嫌いかい？」

おどけた調子で、子爵が言つた。夢の中のルイズは、首を振つた。

「いえ、そんなことありませんわ。でも……わたし、まだまだ小さいしょく分かりませんわ」

ルイズははにかんで言つた。帽子の下の顔がニタリと意地悪く笑つた。

「え？」

ルイズは田をぱちくつさせる。夢の中のルイズは六歳から十六歳になっていた。

「オイオイ、何が小さくてわからねえんだ？」

子爵？はニヤニヤ笑いながら言ひ。そのとき、風が吹いて貴族の帽子が飛んだ。

「あ」

現れた顔を見て、ルイズは当惑の声をあげた。

「な、なんであんたが…」

帽子の下から現れた顔は、憧れの子爵などではなく、使い魔の銀時だった。

「なんでだア？夢で俺を出すくらい惚れこむへせ！」

「なつ！？誰があんたなんかに！…」

「へえ…じゃあ、なんでキスなんてしたんだ？」

銀時の言葉にルイズは顔を真っ赤に染めた。銀時はニヤニヤ笑いながら近寄ってくる。ルイズは真っ赤な顔で銀時を睨みつけた。

「か、勘違いしないでよ！…あれはタダのお礼よ！…す、好きなん

かじやないんだから……。」

ルイズがきつぱつと夢の中の銀時の様子が変わった。

「ふうーん、そつか…良かつたわ。銀さん口っこ「ンンじやねえからよ
オ。好かれても困るんだよな」

「え？」

ルイズは銀時の言葉に田をぱちくつさせた。銀時は言葉を続ける。
「まあ、誤解だつて分かつたし…俺はそろそろ神楽の所に帰るわ」

銀時はそう言つと立ち上がり歩いて行く。何故か周りは池だったはずなのに道が出来ていた。その道をスタスターと歩く銀時。

「ちよ…待ちなさッ！？」

ルイズは追いかけようとするも何故かまったく身体が動かなかつた。

「な、なにこれ？…ちよつと、待ちなさいよー！…待ちな…」

ルイズは何度も叫ぶが銀時は手を上げて軽くバイバイと振りながら歩いていく。銀時はゆっくりとルイズの視界から小さくなつていく。

「……かないで…い、行かないでギントキイイ！…」

ルイズはガバッと飛び起きた。はあはあっと息を吐きながら先ほど
の事が夢であると確認して、ホッと息を吐く。

「つ、使い魔が主人の許可無しに帰るなんて……ないわよ……絶対に
ありえないわ……！」

ルイズはブツブツと呟く。そして落ち着くと隣に気配があるのに気が
がついた。そつと隣を見ると銀時が気持ち良さげに寝ていた。

「……このバカ天パアアア……」、『主人様を置いて帰ろうとする
わ。隣で寝るわ……お仕置きよオオオ……』

ルイズは立ち上がり銀時をベッドから蹴り落とすとムチを取り出した。

「いてつ……え？……なにこれ？」

「問答無用ウウウ！」

「へ？ ちゅ……ギャアアアア……！」

銀時はわけも分からずルイズにお仕置きを受けた。

さて、銀時がルイズに痛めつけられている頃……。

遠く離れたトリステインの城下町の一角にあるチエルノボーグの監

獄で、土くれのフーケはぼんやりとベッドに寝転んで壁を見つめていた。

彼女は『破壊の杖』の一件で銀時たちに捕らわれた『士』系統の呪文を得意とするメイジだ。

今は来週行われる予定の裁判待ちである。しかし、あれだけ国中の貴族のプライドを傷つけまくったのだ…軽い刑でおさまるとは思えない。多分…縛り首。よくて島流し…どうせ仕事、このハルケギニアの大陸に一度と立つことはないだろう。

フーケはため息をつき寝ようと目を閉じた。しかしすぐにはちりと開かせる。フーケが投獄された監獄が並んだ階の上から誰かが下りてくる音がする。

フーケはベッドから身を起し、音のする方を見つめた。しばらくすると鉄格子の向こうに、長身の黒マントをまとった人物が現れた。白い仮面で顔を覆っている、マントの中から長い魔法の杖が突き出している。どうやらメイジのようだ。

黒マントの男はフーケをじっと見つめると口を開いた。年若く、力強い声だった。

「『士くれ』だな？」

「ええ、そうよ」

「話をしこきた」

男は両手を広げて、敵意のないことを示した。

「話?…あら?弁護でもしてくれるつてこの?物好きね

「なんなら弁護してやつてもかまわんが。マチルダ・オブ・サウス

『哥タ』

フーケの顔が蒼白になつた。それはかつて捨てた…いや、捨てることを強いられたら貴族の名であった。その名を知るものはないはずだ。

「あんた、何者？」

震える声で、フーケは尋ねた。しかし男はその問いかに答へず笑つた。

「再びアルビオンに仕える気はないかね？マチルダ」

「まさか…！ありえないわ」

フーケはキッと睨みつけて怒鳴つた。

「何もアルビオンの王家に仕えろつと言つてるわけではない。アルビオンの王家は近いうちにたおれる」

「どういひ」と…？

「革命を。無能な王家をつぶし我々の手でハルケギニアを一つにする。そして始祖ブリミルの光臨せし『聖地』を取り戻すのだ」

「バカらしい。その夢の絵を手伝えつと言いたいのかしら」

フーケは鼻で笑つた。ハルケギニアには4つの王国がある。その国々では未だに小競り合いが絶えない。それが一つにまとまるなんて夢物語だ。

おまけに『聖地』を取り戻すなんて…聖地にはエルフが居るのだ。長命と独特の尖つた耳と文化を持つエルフたちは、そのすべてが強

力な魔法使いであり、優秀な戦士なのだ。今まで幾百年もの間…何度もあまたの国が聖地を奪還しようとしたが無残な敗北で終わっている。

「わたしは貴族は嫌いだし、ハルケギニアの統一なんかにや興味ないわ。おまけに『聖地』を取り戻す？ エルフどもがあそこにいたいって言うなら、好きにさせればいいじゃない」

黒マントの男は腰に下げた長柄の杖に手をかけた。

「『土くれ』よ。お前は選択することができる」

「言つて『じらん』

「我々の同志となるか……」

フーケはため息をついた。こんな時の台詞なんて決まっている。

「……で死ぬか、でしょ？」

「そのとおりだ。我々のことを知ったからには生かしておけん」

「ほんとに、あんたら貴族は嫌な連中だわ。他人の都合なんか考えないんだからね」

フーケは笑った。

「つまり選択じゃない。強制でしょ？」

男も笑つた。

「そうだ」

「だつたちはつきり味方になれつて言いなさいな」

「我々と一緒に来い」

フーケは腕を組むと、尋ねた。

「あんたらの組織名は、なんていうのかしら」

「味方になるのか？ならないのか？どちらなんだ」

「これから旗を振る組織の名前は、先に聞いておきたいのよ」

男はその言葉を聞くとポケットから鍵を取り出し、鉄格子を開けながら言った。

「レモン・キスター」

第14訓 物語は突然始まるもの（後書き）

はい、あとがきです。突然の2章入り申し訳ないです。
ちょっとスランプ中＆文才不足で予定変更になりました、早々と入
らせて頂きました。

ほんとに突然で申し訳ないです

あつ、投票まだまだ募集しています

第15訓 王族は突然来るものだ（前書き）

…完成です…！

なんかキャラ口調が変ですが……まあ、見てくれたら嬉しいです。

それでは、どうぞ

第15訓 王族は突然来るものだ

翌朝。教室に現れたルイズと銀時を見て、クラスメートたちは田を丸くした。ルイズの後ろをズタボロの銀時が気持ち悪そうに口を歩いているのだ。ルイズはチラツと銀時を見ると席についた。

「ねえ、ルイズ。ギンさんビーフしゃつたの？」

モンモランシーは机にうつ伏せ死にかけの銀時を見てルイズに尋ねた。ちなみにギーシュは銀時の周りで名前を呼びながら何やら叫んでいる。

「ただの一日酔いよー！」

「いや……そうじゃなくて……まあ、いいわ

モンモランシーは眉を寄せた。どうやら何故銀時がズタボロなのが聞きたかったようだ。しかし、何故か聞いてはいけないような気がして口を開じた。

その時颯爽と赤い髪をかきあげて教室に入ってきたキュルケが目をパチクリさせ銀時を見つめた。

「まあ、ダーリン……どうしたの？」

キュルケは口に手を当てるときゅるきゅる音が銀時によけてくる。

「こんなボロボロになっちゃって……可哀想……あたしが治してあげるわ

そつとくとキュルケは銀時の頭を抱きしめた。結果巨大な胸が顔に押し付けられるが、銀時はいまそれどころではない。気持ち悪そうに眉間にシワを寄せた。

「大丈夫? どこが痛いの? あたしが『治癒』で治してあげるわ」

「適當なこと言わないで!! あんたに『水』系統の『治癒』が使えるわけないじゃないの。あんたの二つ名『お熱』でしょ。病気、熱病、少しば水で冷やしなさいよ」

キュルケの行動に眉を寄せると銀時を引つ張つてキュルケから離し、ルイズは忌々しそうに言つた。

「微熱よ。び・ね・つ。あなたつて、胸だけじゃなく記憶力までゼロなのね」

キュルケはルイズの胸をつづいてきつぱり言つた。

ルイズの顔が赤く染まる。しかしルイズは唇をゆがめ頑張つて嘲笑いを浮かべた。

「な、なんであんたみたいに胸だけ大きい女つて、女性の価値を胸の大きさだけで決めようとするのかしら? それってすつごく頭の悪い考え方だと思うわ。まあ、きっとカラッポなのよね。むむむ、胸に栄養取られて、頭が力力力、カラッポなのよね」

冷静を装つていたが、次第に声が震え始めた。かなり頭にきているようだ。

「声が震えてるわよ。ヴァリエール」

キュルケはクスッと笑つと再度銀時を優しく抱きしめ頬に胸を押し付けた。

「ねえ、ギントキ。あなたは、こんな胸の大きいわたしをバカだと思つ?」

「バカに決まつてるじゃない!— そうよねえ、ギントキ」

ルイズは再度銀時を引っ張つて離した。そして銀時を見つめる。もちろんキュルケも銀時を見つめた。

「……ガキの胸が大きかろうが小さかろうがどうでも良い……」

銀時は頭を押さえきつぱりと囁く。キュルケとルイズは顔を見合わせ銀時に一言言おつとするも、教室のドアが勢いよく開いた。どうやら教師が来たようだ。

生徒たちは、一斉に席についた。どうやらこの時間の教師はミスター・ギターのようだ。

長い黒髪に漆黒のマントをまとつてフラフラしながら教室へと入ってきた。

「では、授業を始める……ギントキ。起きて!」

ギターは頭を押さえながら授業を始めようとすると、ふと、うつ伏の銀時に声をかけた。

「無理……ってか俺には授業なんて関係ないしよォ」

銀時は少し顔をあげ、チラッとギターを見るときつぱつと言った。
そんな銀時に微かに眉を寄せせるギター。

「君は……私一人にこの苦しみ（一〇酔い）を押し付ける気か

頭を押さえて、ギターをまといながら。生徒たちはワケが分からずザワザワと騒ぎ出す。

「……いやいやいや、苦しみつてお前おかしいだろ。何銀さんまで道連れにしようとしたんだ」

銀時はギターの言葉に自分は無関係だと言つた。ギターは、そんな銀時に悲しそうに眉を寄せる。

「やうか……君は私を見捨てるのだな」

あまりにもミスマッチ・ギターが悲しそうにするので生徒全員が銀時をじっと見つめた。シーンと重たい空気が教室を包んだ。

「…………だアアア……分かつたよ。良いアイデアやるから

銀時は勢いよく立ち上がるヒルイズが止めるのも聞かずにギターへと近付きボソッと呟いた。

ギターは銀時の言葉を聞くと手をパチクリとさせた。

「流石ギントキだ。真面目な私にはそのようなこと思い付かなかつた」

ギターは壊めたのかよく分からぬ言葉を発して、黒板へと向いた。
そして大きく『白黙ーー』と書く。

「では、私はアレをしなければならぬので今日は白黙にする」

「あー…ルイズ、俺もアレ手伝つから行くわ」

ダメー田醉にコンビはきつぱつ言つとアレといつぬの睡眠を取るために教室を出ようとしたアヘと向かった。

生徒たちはポカーンとしている。

するとその時……教室の扉がガラツと開き、緊張した顔のミスター・コルベールが現れた。

彼は珍妙ななりをしていた。頭に馬鹿でかい、ロールした金髪のカツラをのつけている。見ると、ローブの胸にはレースの飾りやら、刺繡やらが踊っている。何をそんなにめかしこんでいるのだろうか

「……ミ、ミスター？」

ギターが眉をひそめた。ちなみに銀時は笑いを堪えている。

「あややや、ミスター・ギター！…どこかへ行くのですか？」

「行く？…ま、まさか…あなたは私が授業を放置するつもり？」

コルベールの言葉にギターは田線をそらしながら言つた。
するとコホンとコルベールは咳払いをする。

「いえいえ、そのようなことは…それに今日はすべての授業が中止になりました」

「コルベールは重々しい調子で告げた。教室中から歓声があがる。その歓声を抑えるように両手を振りながら、ミスター・コルベールは言葉を続けた。

「えー、皆さんにお知らせですぞ」

もつたいたいぶつた調子でコルベールはのけぞつた。のけぞつた拍子に頭にのつけた馬鹿でかいカツラが取れて床に落っこちた。教室中の皆は笑いを耐える。しかし、一番前に座ったタバサがコルベールのつるつるに禿げあがつた頭を指差して、ボソッと呟いた。

「滑りやすい」

教室が爆笑に包まれた。

コルベールは顔を真っ赤にさせると、大きな声で怒鳴つた。

「黙りなさい！…ええい！…黙りなさい！」わっぱどもが！…つてミスター・ギターにギントキ。あなたたちも笑うのやめなさい！…」

コルベールは剣幕して言つも暫くは笑いは收まらなかつた。

暫くして教室中が静かになつた。コルベールは再度話しだす。

「えーおほん。皆さん、本日はトリステイン魔法学院にひとつよき日であります。始祖ブリミルの降臨祭に並ぶめでたい日であります」

「ルベルは横を向くと、後ろ手に手を組んだ。

「恐れ多くも、先の陛下の忘れ形見。我がトリステインがハルケギニアに誇る可憐な一輪の花、アンリエッタ姫殿下が本日ゲルマニアご訪問からお帰りに…この魔法学院に行幸なされます」

教室がざわめき始めた。

「したがつて、粗相があつてはいけません。急なことです、今から全力を挙げて歓迎式典の準備を行います。のために本日の授業は中止。生徒諸君は正装し、門に整列すること」

生徒たちは、緊張した面持ちになると一斉に頷いた。ミスター・コルベールはうんうんと重々しげに頷くと、目を見張つて怒鳴つた。

「諸君が立派な貴族に成長したことを、姫殿下にお見せする絶好の機会ですぞ！ 御覚えがよろしくなるように、しっかりと杖を磨いておきなさい！ よろしいですかな！ ！」

魔法学院の正門をくぐつて、王女の一行が現れると整列した生徒たちは一斉に杖を掲げた。

しゃん！ ！ と小気味よく杖の音が重なつた。

正門をくぐつた先に、本塔の玄関があつた。そこに立ち、王女の一行を迎えるのは学院長のオスマン氏であつた。

馬車が止まると召使たちが駆け寄り、馬車の扉まで真っ赤なじゅうたんを敷き詰めた。呼び出しの衛士が、緊張した声で王女の登場を

告げる。

「トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおな~~~~り~~~~
~~~~シ~~~~」

しかし、扉が開いて現れたのは枢機卿のマザリーーであつた。生徒たちは一斉に鼻を鳴らした。しかし、マザリーーは意に介した風もなく、馬車の横に立つと続いて降りてくる王女の手を取つた。生徒の間から歓声があがる。

王女はこつこつと薔薇のような微笑を浮かべると、優雅に手を振つた。

「あれがトリステインの王女? ふん、あたしの方が美人じゃないの」  
キュルケがつまらなそうに呟く。そして銀時をチラッと見ると媚び  
るように聞いた。

「ねえ、ダーリンはどうちが綺麗だと思つへ」。

銀時は眉を寄せる。様子からして興味がなさそうである。何故なら江戸でも銀時の周りには性格はどうであれ…美女に美少女はたくさん居たのだ。今更美人が近くに居たつて反応することがない。

「ねえ、どうしたの？」

キュルケの質問に答えないで、銀時はふとルイズの方を見た。ルイズは真面目な顔をして王女を見つめている。

銀時は再度王女を眺めて、もう一度ルイズを見た。

何故かルイズは顔を赤らめていた。銀時は首を傾げてルイズの視線の先を辿った。

その先には綺麗なストレートに見事な羽帽子をかぶつた、凜々しい貴族の姿があつた。鷲の頭と獅子の胴体を持つた幻獣に跨りストレートな髪をなびかせている。

ルイズとキュルケはほんやりとその貴族を見つめている。

銀時は心底イラついた。

（オイオイオイ、何あのストレート…銀さんには喧嘩売つてんの？つてか…俺だつて俺だつて天パジやなきやモテモテなんだぞコノヤロー）

（ひやらストレートを自慢するようなびかせてる（銀時にはそう見える）貴族が気に入らないようだ。

隣ではタバサが、王女とその一行が現れた騒ぎなどにまったく気にも留めずに座つて本を広げていた。

「…お前は相変わらずだな。あのストレート野郎見ねえのか」

銀時はタバサにそう言った。タバサは顔をあげて、銀時の言葉を思い出し見つめた。

「あなたの髪嫌いじゃない」

タバサがそう言つと銀時は田を見開き感激のあまりタバサを抱きしめた。

そしてその日の夜……。

銀時は椅子に座つてルイズを見つめていた。なんだか、ルイズは激しく落ち着きがなかつた。立ち上がつたと思つたら、再びベッドに腰かけ枕を抱いてぼんやりとしている。昼間、あの羽帽子の貴族を見てからこうである。あれからルイズは何もしゃべらずにふらふらと幽靈のように歩き出しき、部屋にこもるなりベッドにこりやつて腰掛けている。

「おい、相棒、娘っ子なんかへンじゃねえか？」

デル公が聞いてきたので、銀時は眉を寄せ貴族のこと話をした。

「なるほど……なるほど……恋つてやつか」

デル公は納得したように笑いながら言った。

銀時はその言葉に目をパチクリとさせた。まさか恋だなんて思つても無かつたのだ。

「い、い、い、恋だとオオオ……お、お、お父さんはあんな野郎許さねえぞオオオ」

銀時は立ち上がるルイズに近寄り両肩を持ち揺さぶつた。

「相棒……こつから父親になつたんだよ」

流石のデル公も呆れ混じりボソッと呟く。しかし、銀時はそれどころではない慌てた風にルイズを揺さぶる。ルイズはボーッとしてお

り反応がない。

（オイオイオイ、どうするよ…恋とかまだ早いだろ！…もしかして早くないのか……ちよ、…嘘だろ？え？…もしかして江戸に帰ったら神楽に彼氏とか紹介されたり……いやいやいや、ナイナイナーハイ

銀時はルイズを揺さぶりながらオロオロとしだした。銀時の頭の中ではルイズではなく神楽が彼氏を紹介していく様子が想像された。

銀時が揺さぶるのをやめショックを受けていると、ドアがノックされた。

ノックは規則正しく叩かれた。初めに長く一回、それから短く三回

ルイズの顔がはつとした顔になり、ショックを受けている銀時をほつといて立ち上がった。そしてドアを開ける。

そこに立っていたのは、真っ黒な頭巾をすっぽりとかぶった少女だった。辺りをうかがうように首を回すと、そそくさと部屋に入ってきて後ろ手に扉を閉めた。

「…………あなたは？」

ルイズは驚いたような声をあげた。頭巾をかぶった少女は、口元に指を立てた。それから魔法の杖を取り出すと軽く振った。光の粉が、部屋に舞う。

「…………ディテイクトマジック？」

ルイズが尋ねると、頭巾の少女は頷いた。どうやら魔法で部屋のどこにも聞き耳を立てる魔法の耳や、覗き穴がないことを確かめたよ

うだ。

大丈夫なのが分かると少女は頭巾を取った。  
現れたのは、なんとアンリエッタ王女であった。

「姫殿下！！」

ルイズが慌てて膝をつく。

アンリエッタは涼しげな、心地よい声で言った。

「お久しぶりね。ルイズ・フランソワーズ」

第1-6訓 姫はむちゅやなお願いをすむものだ（前書き）

完成…なんかあれだな、うん。

あつ、まだまだ投票受付中です

## 第16訓 姫はむちゅなお願いをするものだ

ルイズの部屋に現れたアンリエッタ王女は感激してルイズを抱きしめた。

「ああ、ルイズ、ルイズ、懐かしいルイズ！」

「姫殿下、いけません。こんな下賤な場所へ、お越しになられるなんて……」

ルイズはかしげまつた声で言った。

「ルイズ、ルイズ・フランソワーズ！ そんな堅苦しい行儀はやめてちょうどだい！ あなたとわたくしはお友達じゃないの！ …」

「もつたいたいお言葉でござります。姫殿下」

ルイズは硬い緊張した声で言った。銀時はショックから立ち直ると二人の美少女が抱き合つているのに気付き眉を寄せた。

「何これ？」

銀時がボソッと呟くも王女は聞こえてないのか口を開いた。

「やめて！ ここには枢機卿も、母上も、あの友達面をしてよつてくる欲の皮の突つ張つた富廷貴族たちもいないのですよ！ ああ、もうわたくしには心を許せるお友達はないのかしら。あなたまで、そんなよそよそしい態度を取られたら、わたくし死んでしまう

わーー

「姫殿下……」

王女は叩叩叩と崩れ落ちた。そんな王女にルイズは慌てて近寄る。そんな様子を銀時はベッドに座つてポカーンと見ていた。突然悲劇のヒロインぶつた劇のよつなものが始まつたのだ……この反応は仕方ないだろ？

そんな銀時を置いて小1時間劇のよつなものが続いた。

しばらくすると劇が終わつたのか…

アンリエッタは、窓の外の月を眺めた。それからルイズの手を取つて、ニッコリと笑つて言つた。

「結婚するのよ、わたくし」

「……おめでとハヤヒキサ

その声の調子に、なんだか悲しいものを感じたルイズは沈んだ声で言つた。そこでアンリエッタは、ベッドに寝ている銀時に気づいた。あまりの長さに寝てしまつたのだ。

「あら、じめんなさい。もしかして、お邪魔だつたかしら

「お邪魔?..」

「だつて、そこの彼…あなたの恋人なのでしょう？」

「はい？ 恋人？ アレが？」

ルイズは寝ている銀時をチラシと見ると慌てて言った。

「姫さま…！ あればただの使い魔です…！ 恋人だなんて『冗談じやないわ…！』

ルイズは思いきり首をぶんぶんと振って、アンリエッタの言葉を否定した。

「使い魔？」

アンリエッタはきょとんとした面持ちで、銀時を見つめた。  
寝ているせいかいつもより上品な存在に見えた。

「はあ、ルイズ…相変わらず照れ屋さんね」

アンリエッタの中では銀時がルイズの恋人と認識したようだ。

「姫さま…！ 本当に違います…！ よ… あんたも起きて誤解を解きなさいよ…！」

ルイズは銀時を揺さぶるが銀時は眉を寄せるだけで起きる気配が無さそうだ。

ルイズは起こしつとより強く揺さぶる。そんな様子を見ながらアンリエッタは再びため息をついた。

「姫さま……どうなさいたんですか？」

「いえ、なんでもないわ。『めんなさい』……、いやだわ、自分が恥ずかしいわ。あなたに話せるようないじじやないのに……」

「おひしゃりでぐだれ……にかお悩みがあありますのでしょひ……」

「いえ、話せません。悩みがあるなんて忘れておりうだい。ルイズ「いけません……昔はなんでも話しあつたじや『やせんか……！』わたしをおともだちと呼んでぐだれったのは姫さまです。そのおともだちに悩みを話せないのですか？」

ルイズがそういつと、アンリエッタは嬉しそうに微笑んだ。

「わたくしをおともだちと呼んでくれるのね、ルイズ・フランソワズ」

アンリエッタは決心したように口を開いた。

「今から話すことば、誰にも話してほしくません」

それから銀時をチラシと見ると寝ているのを確認して語り出した。

「わたくしは、ゲルマニアの皇帝に嫁ぐことになったのですが……」

「ゲルマニアですつて……！」

ゲルマニアが嫌いなルイズは、驚いた声をあげた。

「あんな野蛮な成り上がりのもの国に……」

「やつよ。でもしかたがないの。同盟を結ぶためなのですか？」

アンリエッタはハルケギニアの政治情勢をルイズに説明した。  
どうやらアルビオンの貴族たちが反乱を起こし、今にも王室が倒れ  
そうなること。反乱軍が勝利したらトリステインに侵攻してくること。  
それに対抗するためアンリエッタ王女がゲルマニア皇室に嫁ぎ同盟  
を結ぶこと。

そして……その同盟を結ばせないため、アルビオンの貴族たちが婚  
姻をさまたげるための材料をさがしていること。

「……そうだつたんですか……もしかして、婚姻をさまたげるよう  
な材料が？」

ルイズが顔を蒼白して尋ねるとアンリエッタは悲しそうに頷いた。

「おお、始祖ブコミルよ……この不幸な姫をお救いください……」

アンリエッタは顔を両手で覆うと呻呻呻と崩れ落ちた。

「姫さま……婚姻をさまたげる材料とはなんなのですか？」

ルイズが尋ねると、アンリエッタは苦しそうに咳いた。

「……わたくしが以前したためた一通の手紙なのです」

「手紙？……どんな内容なんですか？」

ルイズの言葉にアンリエッタは軽く首を振った。

「……それは……言えません。しかし、それを読んだら、ゲルマニアの皇室はわたくしを赦さないでしょう。婚姻は潰れ、同盟は反故。トリスティンは一国であるアルビオンに立ち向かわねばならなくなります」

ルイズは息せきりて、アンリエッタの手を握った。

「こいつた、その手紙はどこにあるのですか？」

アンリエッタは少し俯いて答えた。

「実はアルビオンにあるのです」

「アルビオンですって！……では、すでに敵の手中に？」

「いえ、……その手紙を持っているのは、反乱勢と骨肉の争いを繰り広げている……王家のウーハー・ルズ皇太子が……」

「プリンス・オブ・ウーハー・ルズ？あの凛々しき王子さまが？」

アンリエッタはのけぞると、再度ヨヨヨと崩れた。

「ああ……破滅です……遅かれ早かれ、ウーハー・ルズ皇太子は反乱勢に囚われてしまつわ。あの手紙も明るみに出てしまつ」

ルイズは息をのんだ。

「では、姫さま……わたしに頼みたいことは……」

「無理よルイズ！－わたくしつたらなんてことでしょう。反乱軍との争いを繰り広げているアルビオンに赴くなんて危険なこと、頼めるわけないもの」

アンリエッタは崩れ落ちたままきつぱり言った。銀時が起きていたら突っ込みと説教をされているだろ。しかし、幸か不幸か銀時はまだ寝ている。

「何をおっしゃいます！－たとえ地獄の釜の中だらうが、竜のアギトの中だらうが、姫さまのためならば…このラ・ヴァリエール公爵家の二女、ルイズ・フランソワーズ何処なりと向かいしますわ－！」

ルイズはきつぱり言つと膝をついて恭しく頭を下げた。

「『土くれ』のフーケを捕まえた、このわたしにその一件、是非ともお任せ下さい」

「まあ、このわたくしの力になつてくれるの？……しかし、危ないわ」

アンリエッタが言つとルイズは寝ている銀時をチラッと見た。

「大丈夫ですか…わたしには守つてくれる使い魔が居ます」

ルイズはそう言つと、銀時をベッドから蹴り落として起こした。

「こつ…つな、なんだ？」

銀時は眉を寄せて起き上がつた。そしてルイズとアンリエッタを交互に見つめた。

「ギントキ、明田の朝出かけるか？」

ルイズと田代が合ひつとあひぱりと言つた。銀時は何がどうなつてゐるのか分からずあきよと云つた。

「は？ お前何言つ…」

銀時が眉を寄せてルイズに尋ねようとした。そのとき、ドアがばたーんと開いて誰かが飛び込んできた。

「ちよつと待つたアアア…ぼくも連れて行つて下さ…」

飛び込んできたのは、ギーシュだつた。銀時とアンリエッタは突然の訪問者にきよとんとした。ルイズは眉を寄せて言つた。

「ギーシュ…あんた、立ち聞きしてたの？ 今の話を…」

ギーシュはルイズの問いかけに答えずアンリエッタの方を向いて膝まついた。

「姫殿下…！ その困難な任務、是非ともこのギーシュ・ズ・グラモンに仰せつけますよ！」

「グラモン？ あの、グラモン元帥の？」

アンリエッタがきよとんとした顔でギーシュを見つめた。

「息子で、います。姫殿下」

ギーシュは立ち上がると恭しく一礼した。

「あなたも、わたくしの力になつてくれるとこ'うの？」

「任務の一員にくわえてくださるなら、これはもう…望外の幸せに  
『じぞこまわ』

熱っぽいギーシュの口調に、アンリエッタは微笑んだ。

「ありがとうございますわ。ギーシュさん」

「姫殿下が…ぼくの名前を呼んでくださつた…！微笑んでくださつ  
た！」

ギーシュは感動のあまり、失神した。

「キザアアアアアアツ…！」

銀時がその光景に叫ぶもルイズは目もくれず、真剣な声で言つた。

「では、明日の朝アルビオンに向かつて出発します」

アンリエッタはそれを聞くと懐から手紙を出した。そして手紙をじ  
つと見つめる。密書だというのに、まるで恋文のような表情でみつ  
めているアンリエッタに、ルイズは何も言えなかつた。そしてルイ  
ズに手紙を渡した。

「ウェールズ皇太子にお会いしたら、この手紙を渡して下さい。す  
ぐに件の手紙を返してくれるでしょ？」

それからアンリエッタは、右手の薬指から指輪を引き抜くと、ルイズに手渡した。

「母君から頂いた『水のルビー』です。せめてものお守りです。お金が心配なら、売り払って旅の資金にあててください」

ルイズは深々と頭を下げた。

「この任務にはトリステインの未来がかかっています。母君の指輪が、アルビオンに吹く猛き風から、あなたがたを守りますよ」

## 第1-6訓 姉はむちゅなお願いをすむものだ（後書き）

神楽「やつとりまできたアルな」

新八「うん、そつだね…ってか僕達ここに出てて良いの？」

神楽「大丈夫ヨ、友情出演だと思つてくれるね……それにしても今回の」

新八「うん」

神&新「銀ちゃん／銀さん…影つすつーーー」

第1-7訓 出発時には何かと事件が起りますのだと（前書き）

お待たせいたしました。

感想返信もうしづらくなっていますが、お待ちくださいませ

それでは、どうぞ

## 第17訓 出発時には何かと事件が起るものだ

朝もやの中、銀時とルイズとギーシュは馬に鞍をつけていた。……  
いや、訂正しよ。銀時は腰にテル公と洞爺湖を下げてお菓子を頬張りながらギーシュが鞍をつけるのを見ていた。

出発の用意をしていると、ギーシュが困ったように言つた。

「ギンちゃん… お願いがあるんですが…」

「ん？」

銀時はモグモグとお菓子を食べながら首を傾げた。

「ぼくの使い魔も連れていつてもいいかな？」

銀時はチラッとルイズを見るも頷いた。

「いいんじゃねえ? ってかビコニ居るんだ?」

「」

銀時の言葉にギーシュは嬉しそうになると地面を指差した。

「いないじゃないの」

ルイズがすました顔で言つて、ギーシュはこわつと笑つた。そして足で地面を叩く。すると、モコモコと地面が盛り上がり茶色の大きな生き物が顔を出した。

ギーシュはすわつーーと膝をつくと、その生き物を抱きしめた。

「ヴェルダンテーーーああ、ぼくの可愛い、ヴェルダンテーーー」

「なんだそれ？」

銀時はきょとんとしてじつと見つめた。するとギーシュは銀時に誇らしげに紹介した。

「ギンちゃんーーーの子がぼくのーーーぼくの可愛い使い魔、ヴェルダンテです」

「あなたの使い魔ってジャイアントモールだったの？」

反応したのは銀時ではなくルイズだった。ちなみにギーシュの使い魔は小さなクマほどの大きさの巨大なモグラだった。

「ああ、ヴェルダンテきみはいつ見ても可愛いねーー困ってしまうほど可愛いねーーー」

ギーシュは巨大なモグラに顎を擦り寄せた。それを見ながら銀時は思つた、うちの定春の方が可愛いこと…

「ねえ、ギーシュ。ダメよ…その生き物、地面を進んでいくんでしょ？？わたしたち馬で行くのよ」

「そうだ。ヴェルダンテはモグラだからな…けど地面を掘つて進むの速いんだぜ」

巨大モグラはギーシュの言葉に頷いた。

「わたしたち、これからアルビオンに行くのよ。地面を掘つて進む生き物はダメよ」

ルイズがそう言つて、ギーシュは地面に膝をついた。

「お別れなんて…つらー、つらこよ…ヴェルダンテ…」

そのとき、巨大モグラが鼻をひくつかせた。くんかくんか、ヒルイズに擦り寄る。

「な、なにこのモグラ」

巨大モグラはルイズを押し倒すと薬指に光るルビーへと鼻を擦り寄せた。

「姫さまに頂いた指輪に鼻をくつつけないで…！」

ギーシュが納得したように頷いた。

「なるほど、指輪か。ヴェルダンテは宝石が好きだからな」

「やつ…ちよ、助けなさいよ…！」

ルイズは指輪を庇つあまり、地面にのたうち回った。スカートは乱れ、派手にパンツをさらけだす。

「おいおい、嫁入り前の娘がなんつー格好だよ」

銀時は助けようとルイズに手を伸ばした。

すると突然一陣の風が舞い上がり、ルイズに抱きつくモグラを吹き飛ばした。銀時はとっさに風の来ない位置まで下がったため被害はなかつた。

「誰だッ！！」

ギーシュが激昂してわめいた。

朝もやの中から、一人の長身ストレートの貴族が現れた。羽帽子を被っている。銀時は眉を寄せた。

（あのストレートは…）

「貴様、ぼくのヴェルダンデになにをするんだ…！」

ギーシュは薔薇の花を掲げた。一瞬早く、ストレート貴族が杖を引き抜き薔薇の花を吹き飛ばす。

「僕は敵じゃない。姫殿下より、きみたちに同行することを命じられたね」

ストレート貴族は、帽子を取ると一礼した。

「女王陛下の魔法衛士隊、グリフォン隊隊長、ワルド子爵だ」

文句を言おうと口を開きかけたギーシュは相手が悪いと知つてうなだれた。魔法衛士隊は、全貴族の憧れである。ギーシュも例外でない。

すると銀時が憎々しげにワルドのストレートを見ながら口を開いた。

「おー、マリオだか…ワリオだか…知らねえが。あぶねえだろうが

「……謝れコノヤロー」

「ギントキー！」

ルイズは立ち上がると銀時の言葉をたしなめた。  
そしてワルドは銀時の言葉に目を見開いた。まさか…文句を言つて  
くるとは思わなかつたのだ。

「……すまない。婚約者が、モグラに襲われているのを見て見ぬ振  
りはできなくてね。そして僕はワルドだ」

ワルドの言葉に銀時は目を見開いた。

（「…、こ、婚約者だと…？」このストレートがルイズの……お、お父  
さん絶対許さねえぞ…！…）

銀時はワルドを睨みつけた。  
するとルイズが震えた声で呼ぶ。

「ワルドさま……」

「久しぶりだな…！ルイズ…！僕のルイズ…！」

（僕のルイズだ？何言つてんだこの口コソンヤロー）

銀時はイライラしながら腕を組み眉を寄せた。  
ワルドは人なつこい笑みを浮かべると、ルイズに駆け寄り、抱え上  
げた。

「お久しぶりで」  
「お久しぃびりで」  
「います」

ルイズは頬を染めて、ワルドに抱き抱えられている。

「相変わらず軽いなきみは……まるで羽のようだね……」

「……お恥ずかしいですわ」

「彼らを、紹介してくれたまえ」

ワルドはルイズを地面に下ろすと、再び帽子を頭深にかぶって言った。

「あ、あの……、ギーシュ・ド・グラモンと……使い魔のギントキです」

ルイズは交互に指差して言った。ギーシュは深々と頭を下げる。銀時はじつとストレートを見つめた。

「きみがルイズの使い魔かい？ 人とは思わなかつたな。それにしても見事な天パだね」

ワルドは氣さくな感じで銀時に近寄つた。銀時は口端をひくつかせる。

「ほくの婚約者があ世話になつてゐるよ。これからもよろしくへ

「ああ、ロリコン変態野郎がルイズに近付かなよう氣をつけるわ

銀時はこつこりと微笑み嫌みをきつぱりと言つた。

しかし、ワルドは笑い出した。

「そりだね、僕のルイズがロリコン変態野郎の毒牙にからないう見張つてくれよ」

銀時は眉を寄せた。ワルドは自覚がないのか…それとも、分かつて銀時にその言葉を返したのか…分かつているのは気に入らない奴だといつところだけだった。

ワルドは口笛を吹くと、朝もやの中からグリフオントが現れた。鷲の頭と上半身に、獅子の下半身がついた幻獣である。立派な羽も生えている。

ワルドはひらりとグリフオントに跨ると、ルイズに手招きした。

「おいで、ルイズ」

ルイズはちょっと躊躇つゝして頷いた。その仕草は恋する少女に見えた。

（ケツ。なんだあれ…！…すげえイラつくんですけど…ってかなんであんな野郎がストレート…）

銀時は心底不機嫌そうに馬へとまたがった。ルイズはしばらくモジモジしていたが、ワルドに抱き抱えられ、グリフオントに跨った。

「では諸君…！…出撃だ…！」

アンリエッタは出発する一行を学院長室の窓から見つめていた。そして目を閉じて、手を組んで祈る。

「彼女たちに、加護をお『えぐださい』。始祖ブリミルよ……」

隣でも、オスマンがじつとその一行を見つめていた。

すると、扉がドンドンと叩かれた。オスマンが入室の許可を出すと、慌てた様子のミスター・コルベールが飛び込んできた。

「いいいい、一大事ですぞ！ オールド・オスマンー！」

「きみはいつでも一大事ではないか。どうもきみは慌てん坊でいからん」

「慌てますよ！ ……わたしだってたまには慌てます！ ……城からの知らせです……なんと、牢獄からフーケが脱獄したそうです！ ……」

「ふむ……」

オスマンは、口ひげを捻りながらうなつた。

「門番の話では、さる貴族を名乗る怪しい人物に『風』の魔法で気絶させられたそうです！ ……何者かが脱獄の手引きした！ ……つまり、城下に裏切り者がいるということです！ …！」

コルベールの言葉にアンリエッタの顔が蒼白になった。オスマンは手を振ると、コルベールに退室を促す。

「わかったわかった。その件についてはあとで聞いくではないか」

「ゴルベールがいなくなると、アンリエッタは机に手をついてため息をついた。

「城下に裏切り者が！－絶対アルビオン貴族の暗躍ですわ－－」

「… そうかもしませんな

オスマンは落ち着いて頷いた。

そんなオスマンの様子にアンリエッタは眉を寄せた。

「トリステインの未来がかかつているのですよ。なぜ、そのような余裕の態度を…」

「すでに杖は振られたのですぞ。我々にできることとは、待つことだけ。違いますかな？」

「そうですが……」

「なあに、あのお方ならば道中どんな困難があるひつとも…やつてくれますでな」

「あのお方とは？あのギーシュが？それとも、ワルド子爵が？」

オスマンは首を振った。

「ならば、あのルイズの使い魔の男性が？ま、まさか！－彼はただの平民ではありますんか！－」

「姫！－姫はあのお方を見ぐびり過ぎです。それに姫は始祖ブリミ

ルの伝説を』存知かな?』

「通り一遍のことなら知っていますが……」

オスマンはこいつと笑った。

「では『ガンドールヴ』のくだりは存知か?』

「始祖ブリミルが用いた、最強の使い魔のこと?まさか彼が?』

オスマンはしゃべりすぎたことに気づいた。『ガンドールヴ』のことは自分の胸一つに収めている。アンリエッタが信用できないわけではないが、まだ王室のものに話すのはまずい、そう思っていた。

「えーおほん、とにかくあのお方は『ガンドールヴ』並みに使えると、そういうことですな。ただ、あのお方は異世界から来た青年なのです」

「異世界?』

「そうですね。ハルケギニアではない、どこか。そこからやつてきたあのお方ならばやつて下さると、この老いぼれは信じております」

オスマンがきつぱりと言つとアンリエッタはルイズの使い魔の青年を思い出した。そして遠くを見るような目になつた。

「そのような世界があるのですか……ならば祈りましょう。異世界から吹く風に』



## 第18訓 勘違いと眞実は紙一重……だつたりいな（前書き）

お待たせしました。

そして今回は報告があります。気が付いたらすでにPVアクセス20万突破しております。

なので記念に何かしたほうがよいのか考え中です。

ちなみに10万突破の記念小説は、この2章が終わりましたら書きます。ちなみにまだまだ投票中ですのでお気軽にどうぞ

それでは、ゼロ白始まり～始まり～

## 第18訓 勘違いと眞実は紙一重……だつたらいな

港町ラ・ロシャールは、トリステインから離れること早馬で一町、アルビオンへの玄関口である。港町でありながら、狭い峡谷の間の山道に設けられた小さな街である。人口はおよそ三百ほどだが、アルビオンと行き来する人々で常に十倍以上の人間が街を闊歩している。

さて、この街は峡谷に挟まれた街なので昼間でも薄暗い。狭い裏通りの奥深く、さらに狭い路地裏の一角には、はね扉のついた居酒屋があつた。

酒樽の形をした看板には『金の酒樽亭』と書かれていた。その居酒屋の中は満員御礼であった。内戦状態のアルビオンから帰ってきた傭兵たちで店は溢れていたのだ。

「アルビオンの王さまはもう終わりだね！？」

「いやはやー！『共和制』ってヤツの始まりなのか

「では、『共和制』に乾杯！？」

そう言つて乾杯しあつて、がははと笑つているのはアルビオンの王党派についていた傭兵たちである。彼らは、雇い主の敗北がほぼ決定的になつた会戦のおり、逃げ帰ってきたのであつた。別段恥じる行為ではない。ただ、職業意識より命のほうが惜しい……それだけの話なのである。

そしてひとしきり乾杯が済んだとき、はね扉を開けてフードを被つ

た女が入ってきた。女はワインと肉料理を注文すると隅っこに腰掛けた。酒と料理が運ばれてくると女は給仕に金貨を渡した。

「い、こんなに…よろしこんで？」

「泊まり賃も入ってるのよ。部屋は空いてる？」

その女の言葉に主人は頷いて去つていった。幾人かの男たちが、目配せをしながら立ち上がり、女の席に近づいた。

「お嬢さん。一人でこんな店に入っちゃいけねえよ」

「そそ。あぶねえ連中が多いからな。でも、安心しな。俺たちが守つてやるからよ」

そして下卑た笑いを浮かべ、男は女のフードを持ち上げた。ひょお、と口笛がもれる。女が、かなりの美人だつたからだ…切れ長の目に細く高い鼻筋。女は『土くれ』のフーケだった。

「いじや、上玉だ。見ろよ、肌が象牙みてえじやねえか

男がフーケの顎を持ち上げる。その手がぴしゃりとはねられた。一人の男がフーケの頬にナイフを当てた。

「男を漁りにきたんだろ？俺たちが相手してやるから」

ナイフに物怖じした様子を見せず、フーケは体を捻り杖を引き抜いた。一瞬、呪文を唱える。男の持つたナイフが、ただの土くれに変わりテーブルの上に落っこちる。

「さ、貴族！！」

男たちは後ずさつた。マントを羽織つていないので、メイジと氣づかなかつたのである。

「わたしはメイジだけど、貴族じゃないよ。あんたたち傭兵なんでしょう？」

男たちは呆氣にとられて、顔を見合せた。貴族でないなら、とりあえず命を落とす心配はなさそうだ。今みたいなことを貴族にしたら、それはもう殺されたつて文句言えないのである。

「そ、そりだが。あんたは？」

男が口を開くとフーケは眉をよせた。

「誰だつていいじゃない。とにかくあんたたちを雇いに来たのよ」

フーケの言葉に男たちは顔を見合せた。

「金はあるんだろうな？」

フーケは金貨のつまつた袋をテーブルの上に置いた。中を確かめて、男の一人が呟いた。

「おほ、エキュー金貨じゃねえか」

ばたんとはね扉を開いて、白い仮面にマントの男が現れた。フーケを脱獄させた貴族だ。

「おや、早かつたね」

フーケが男を見て呟く。

「連中が出発した」

仮面の男は言った。

「こいつもあんたに言われたとおり、人を雇つたよ」

白仮面の男は、フーケに雇われた傭兵たちを見回した。

「ところで貴様ら、アルビオンの王党派に雇われてたのか？」

傭兵たちは薄ら笑いを浮かべて答えた。

「先月まではね」

「でも、負けるようなやつは、主人じゃねえや」

傭兵たちは笑つた。白仮面の男も笑つた。

「金は言い値を払つ。でも、俺は甘つちよろい王をまじやない。逃げたら殺す」

魔法学院を出発して以来、ワルドはグリフロンを疾駆せつぱなし

であった。銀時たちの乗っている馬は途中の駅で一回ほど交換したが、ワルドのグリフォンは疲れを見せず走り続ける。乗り手のようによつた。幻獣であった。

「ちよっと…ペース速くない？」

抱かれるような格好で、ワルドの前に跨つたルイズが言った。雑談を交わすうちに、ルイズのしゃべり方は昔の丁寧な言い方から今の口調に変わっていた。ワルドがそうしてくれ、と頼んだせいもある。

「ギントキはどちらが分からぬいけど…ギーシュはくばつむわ

ワルドは後ろを向いた。確かに、ギーシュは半ば倒れぬよつな格好で馬にしがみついている。ギントキは器用に馬の上で寝転がつて空を見上げていた。よくあれで馬から落ちないものだ。ある意味ワルドは尊敬してしまった。

「リ・ロシヤールの港町まで、止まらずに行きたいんだが…」

「無理よ。普通は馬で一〇かかる距離なのよ

「くばつたら、置いていけばいい

「そういうわけにはいかないわ

「どうして？」

ルイズは、困ったよつた。言つた。

「だつて、仲間じゃない。それに……使い魔を置いていくなんて、

メイジのする」とじやないわ」

ルイズの言葉にワルドは首を傾げた。

「きみの使い魔はへばつてなさそうだけど…」

ワルドが言つとルイズはきつぱりと言こきつた。

「ギントキは、ギーシュを見捨ててついてくる奴じやないもの」

「そう、やけにあの一人の肩を持つね。どちらかがきみの恋人かい？」

ワルドが笑いながら言つた。

「」、恋人なんかじやないわ」

ルイズは顔を赤らめた。

「そうか。なら良かつた。婚約者に恋人がいるなんて聞いたら、シヨックで死んでしまうからね」

そう言いながらも、ワルドの顔は笑つてゐる。

「お、親が決めたことじやない」

「おや？僕の小さなルイズ！！僕のことが嫌いになつたのかい？」

昔と同じ、おどけた口調でワルドが言つた。

「もつ小さくないもの。失礼ね」

ルイズは頬を膨らました。

「僕にとつては未だに小さな女の子だよ。それに僕の大切な妻になる女の子だ」

ワルドはにっこりと笑いながら言った。

「冗談でしょ。ワルド、あなた、モテるでしょう？わたしみたいなちっぽけな婚約者なんか相手にしなくても…」

ワルドのことは、夢を見るまで忘れていた。ルイズにとつてワルドは現実の婚約者というより、遠い想い出の中の憧れの人だった。婚約だって、とうに反故になつたと思っていた。戯れに、一人の父が交わしたあてのない約束……それぐらいにしか思つていなかつたのだ。

それに十年前に別れて以来、ワルドにはほとんど会つこともなかつたし、その記憶は遠く離れていた。

だから先日ワルドを見かけた時、ルイズは激しく動搖をした。想い出が突然現実になつたのだ。どうすればいいかわからない。

「旅はいい機会だ」

ワルドは落ち着いた声で言つた。

「こつしょに旅を続ければ、またあの懐かしい気持ちになるわ」

ルイズは思った。自分はワルドのことを好きなんだろうか？そりや、嫌いじやない。確かに憧れていた。それは間違ひない……しかし、

それは想い出の中の出来事である。

いきなり婚約者だの、結婚だの言われてもどうすればいいのかまるで分からぬ。なんていうか、離れていた分だけ本当に好きなのかどうか分からぬのだ。

ルイズは後ろを振り向いた。

後ろではぐつたりとしたギーシュと、のほほんとし馬の上で寝転がつている銀時がいた。ルイズは舌打ちをした。

(「主人様が悩んでいるのに…なんて緊張感ないの…」)

ルイズはそう思つとなんだかやきもきして、胸が震えた。

「もう半日以上、走りっぱなし。どうなつてるんだ。魔法衛士隊の連中は化け物か…つといつか…ギンさん器用ですね」

ギーシュはブツブツ独り言のように呴いた後、銀時を見て感心したよつに呴いた。

銀時は馬の背に乗せた荷物を枕にし寝転がつたままチラチラとルイズとワルドを見ていた。

「やうだな…あの口リコン野郎をどうにかしないとな

銀時は一応返事をするも微妙に会話が合つてない。ギーシュは先ほどから銀時が見ている方を見るとハツとした。

( ゼット きから ギンさん は あの 一人 を 見て いる。 ま、 まさか 恋 !? )

ギーシュはさう考へつゝと雷が全身に流れたかのよつたショックを受けた。

そして、銀時とルイズをチラチラと見つめ決心したかのよつ口を開いた。

「 ギンさん !.. ギンさんは 辛い 恋を して いるんだね .. けど 大丈夫。 あの 魔法衛士 より ギンさん の 方が 素敵 だから !.. 」

ギーシュはグッと握り拳を作り銀時を見つめた。

「 チツ、 あの 変態 口リ !.. つて お前 何 言つて んだ ? 」

銀時は懶々しげにワルダのサラサラした髪を睨みつけたが、ギーシュが変なことを言つてゐることに気付き眉を寄せた。するとギーシュは薔薇をひとつ取り出し格好をつけた。

「 ギンさんの 考えてる ことは もつ 分かって る。 ほくも 協力 するよ 」

銀時はさう言つてくる、ギーシュに一瞬キョトンとするも、自分の命令の良さに考へニヤニヤと笑つた。

「 よく 言つた。 一緒に 口リ !.. 野郎 を 倒すぞ 」

## 第19訓 ショックは頑張って乗り越へり（前書き）

なんか… 文章がかなり変ですが…

まあ、どうぞ…

## 第1-9訓 ショックは頑張って乗り越えろ

馬を何度も替え、飛ばしてきたので銀時たちはその日の夜中にラ・ロシヨールの入り口についた。銀時は身体を起こして辺りを見回した。港町だと言っていたので海が見えるのかと思つていたのだが、海どころかここはどう見ても山道である。

（オイオイ、海ないじゃねえか。せっかくあのロココン野郎を沈めてやるうと思つてたのによオ）

銀時は危険なことを考えながら眉を寄せた。そしてチララッとギーシュを見ると尋ねた。

「キザ、なんで港町なのに山なんだ？その理由を30文字でまとめる」

銀時の言葉にギーシュは目をパチクリとした。

「え？ ギンさんはアルビオンを知らないのかい？」

「あ？ 知…」

銀時は眉をよせて何かを言おうとした。そのときだ。

不意に銀時たちの跨つた馬めがけて、崖の上から松明が何本も投げ込まれた。

「な、なんだ…！」

ギーシュが怒鳴った。

するといきなり飛んできた松明の火に、戦の訓練を受けていない馬が驚き前足を高々とあげたので、ギーシュと銀時は馬から放り出された。

「いっつつ…なんだよ

銀時は軽く受け身を取ると急そうに立ち上がった。ギーシュは受け身が綺麗に取れなかつたのかまだ倒れている。

そこを狙つて、何本もの矢が夜風を裂いて飛んでくる。銀時は瞬時に木刀を抜き矢を叩き落とす。サクッサクッと軽い音を立てて、矢は地面に突き刺さつた。

「き、奇襲だ…！」

ギーシュが慌てて喚いた。すると無数の矢が銀時とギーシュめがけて殺到した。

銀時は矢の多さに軽く舌打ちをするも木刀を構えた。しかし、銀時の射程距離に入る前に一陣の風が舞い起こり、銀時たちの前で空気がゆがみ小型の竜巻が現れた。竜巻は飛んできた矢を巻き込むとあさつての方に弾き飛ばした。

グリフィオンに跨つたワルドが杖を掲げている。

「大丈夫か…！」

ワルドの声が銀時の耳に届いた。

「ああ、大丈夫だ」

銀時は眉を寄せ苦い顔をした。助けは別にいらなかつたのだが、結

果的に助けてもらった。自分のコンプレックスを刺激するサラサラ口リコン野郎に借りを作ってしまった。気分は最悪である。

「夜盗か山賊の類か?」

ワルドが呟いた。ルイズが、はつとした声で言った。

「もしかしたら、アルビオンの貴族の仕業かも……」

「貴族なら、弓は使わんだろう」

そのとき……、ぱつぱつぱつと羽音が聞こえた。そして崖の上から男たちの悲鳴が聞こえてくる。どうやら、いきなり自分たちの頭上に現れたものに恐れおののいている声だった。

男たちは夜空に向けて矢を放ち始めた。しかし、その矢は風の魔法で逸らされた。次に小型の竜巻が舞い起こり、崖の上の男たちを吹き飛ばす。

「おや、『風』の呪文じゃないか」

ワルドが呟いた。

ガランガランと、弓を射つていた男たちが崖の上から転がり落ちてきた。男たちは、硬い地面に受け身も取れず身体をぶつけ痛そうにうめき声をあげた。

月をバックに見慣れた幻獣が姿を見せた。ルイズが驚いた声をあげた。

「シルフィード……」

確かにそれはタバサの風竜であった。シルフィードが降りてくると

赤い髪の少女と見事な巻き髪の少女がひょんと飛び降りてきた。そして巻き髪の少女は降りるや否や慌ててギーシュくと近付いた。

「ギーシュー！ 怪我はない？ 大丈夫？」

「え？ もしかして……モ、モンモランシーかい？」

そう巻き髪の少女は新生万事屋の突っ込み担当モンモランシーであった。

さて、もう一人の赤い髪の少女はとこうと髪をかきあげて言った。

「お待たせ」

そんな少女の態度にルイズがグリフォンから飛び降りて怒鳴った。

「キュルケー！ 何がお待たせよッ！ 何しこきたのよーー！」

「助けにきてあげたんじゃないの。朝がた、窓から見てたらあんたたちが馬に乗つて出かけようとしてるもんだから、急いでタバサを叩き起こして後をつけたのよ。ちなみにモンモランシーはついでに連れてきてあげたの」

キュルケはギーシュと話しているモンモランシー、そして風竜の上のタバサを順番に指差した。寝込みを叩き起こされたらしく、パジヤマ姿であった。それでもタバサは気にした風もなく本のページをめくっている。

「ツェルプスター。あのねえ、これはお忍びなのよ？」

「お忍び？… だつたら、そう言いなさいよ。言つてくれなきやわからぬじやない。とにかく、感謝しなさいよね… あなたたちを襲つた連中を捕まえたんだから」

キュルケはむちやくちやなことを言いながら、倒れた男たちを指差した。怪我をして動けない男たちは口々に罵声をルイズたちに浴びせかけている。ギーシュが近付いて、尋問を始めた。ギーシュの後ろにはモンモランシーが心配そうに見ている。

ルイズは腕を組むと、キュルケを睨みつける。

「勘違いしないで。あなたを助けにきたわけじゃないの。ねえ？」

キュルケはしなをつくるとグリフロンに跨ったワルドに元氣に寄つた。

「おひげが素敵よ。あなた、情熱はござ存知？」

ワルドは、キュルケをチラツと見つめて左手で押しあつた。

「あら？」

「助けは嬉しいが、これ以上近付かないでくれたまえ」

「なんで？あたしが好きつて言つてゐるのに…」

とつつく島のない、ワルドの態度であった。今までこんなに冷たい態度を取られたことはない。銀時もキュルケには冷たいのだが、それとはまったく違つ冷たさである。

「婚約者が誤解するといけないのでね」

そう言つてワルドはルイズを見つめる。ルイズの頬が染まつた。

「なあに？ あなたの婚約者だつたの？」

キュルケはつまらなさうに言つた。ワルドは頷く、ルイズは困つた  
ようにもじもじし始めた。キュルケはワルドを再度見つめる。遠目  
では分からなかつたが、目が冷たい。まるで氷である。キュルケは  
つまらなさうに鼻を鳴らした。それから銀時を見た。なんだか、元  
気がない。銀時はいまだにワルドに借りを作つたことによるショック  
が癒えてないのである。

（あら？ もしかして、あたしがワルドに色目を使つたから元気ない  
のかしら？）

キュルケは自分の都合の良いように解釈すると銀時に抱きついた。

「ほんとはね。ダーリンが心配だつたからよーー！」

銀時は突然抱きつかれて驚くが今はそれどころでない。

「あー… 嘘だる」

ため息をつき助けられたのは嘘にしてくれと思いながら呟いた。

（… やきもひ？）

キュルケは再度自分の都合の良いように解釈した。

「可愛い。可愛いわ……あなた、やきもち焼いてるのね？」

「あ？」

銀時はキュルケの言葉に眉を寄せた。

「『』めんなさいね……あたしが冷たくしたもんだから怒ってるんでしょう？」

キュルケはそう言つてきやあきやあ騒ぎながら銀時の胸に自分のメロンのような胸を押し付ける。

「許してちょうだい……ちよつとよそ見はしたけれど、あたしはなんたつてあなたが一番好きなのよ……。」

ルイズは唇を噛んだあと、怒鳴ろうとした。ツェルプスターの女に使い魔が取られるのは我慢できない。

そんなルイズの肩にワルドがそつと手を置いた。ワルドはルイズを見て、にっこり微笑みかける。

「ワルド……」

一人の間にピンク色の空気が漂い出しが、それをかき消すため慌てギーシュが戻ってきた。

「子爵、あいつらはただの物取りだつと言つてます

「ふむ……、なら捨て置く」

ひらりとグリフロンに跨ると、ワルドは颯爽とルイズを抱きかかえ

た。

「今日はラ・ロシェールに一泊して、朝一番の便でアルビオンに渡りつ

ワルドは一行にそう告げた。

キュルケは銀時の馬の後ろに跨つて、楽しそうにきやあきやあ騒いでいる。風竜の上のタバサは、相変わらず本を読んでいる。そしてモンモランシーはギーシュの馬の後ろに跨つて何やら真剣に会話をしている。

ところどころ、ギンさんがライズを…だの。あの魔法衛士がライバルだの。三角関係だの聞こえてくるが気のせいであろう。

一行の進む道の向こうではラ・ロシェールの街の灯りが怪しく輝いていた。

まるで今から起る出来事を予測するかのようだ。

お待たせしました。… 完成であります！！

そして今回はメール執筆文字を越えたので初めて結合を使ってみました

「それでは、どうぞ。

## 第20訓 男女七歳にして席を回じよひせす

ラ・ロシヨールで一番上等な宿、『女神の杵』亭に泊まることにした一行は、一階の酒場でくつろいでいた。いや、一日中馬に乗つていたせいでクタクタになつてゐる者もいる。

『女神の杵』亭は、貴族を相手にするだけあって豪華なつくりである。テーブルは床と同じ一枚岩からの削り出しで、ピカピカに磨き上げられていた。その磨き方は顔が映るぐらいである。

そこに、『桟橋』への乗船の交渉を行つてゐたワルドとルイズが帰つてきた。ワルドは席につくと、困つたように言つた。

「アルビオンに渡る船は明後日にならないと、出ないそうだ

「急ぎの任務なのに……」

ルイズは口を尖らせて頬を膨らました。するとキュルケが不思議そうに口を開いた。

「あたしはアルビオンに行つたことないからわからんけど、どうして明日は船が出ないの？」

その質問にキュルケの方を向いて、ワルドが答えた。

「明日の夜は月が重なるだろ？『スヴェル』の月夜だ。その翌日の朝、アルビオンが最もラ・ロシヨールに近づく

銀時はそれを聞きながら店員に頼んだ酒を飲んだ。嫌なこと（口）（口）に借りを作つたこと（口）は酒を飲んで忘れようとしているのだ。

「わい、じゃあ今日はまつ寝よ。部屋を取った」

ワルドは鍵束を机の上に置いた。

「キュルケとタバサ…そしてモンモランシーは三人部屋だ。そして、ギーシュとギントキが相部屋」

ギーシュは嬉しそうに酒を飲んでるギントキを見つめた。

「僕とルイズは同室だ」

「ブゥウウーッ…お、おま…今なんて…」

ワルドの言葉を聞くと銀時は思い切りお酒を吹いた。そして聞き間違えたのかと思い聞き返した。

「聞いてなかつたのかい？僕とルイズは同じ部屋だと言つたんだよ」

ワルドは銀時を見ながらにっこりと笑つて言つた。  
するとルイズはハッとしてワルドを見た。

「そんな、ダメよ…まだ、わたしたち結婚してるわけじゃないじ  
やない！…」

「やうだ…ダメに決まつてんだろッ」

ルイズが言い、次に銀時もワルドを思い切り睨みつけて言つた。  
するとワルドは銀時を気にせずじつとルイズを見つめた。

「大事な話があるんだ。一人きりで話したい」

貴族相手の宿、『女神の杵』亭で一番上等な部屋だけあつてワルドとルイズの部屋はかなり立派なつくりであつた。誰の趣味なのか、ベッドは天蓋付きの大きなものだつたし高そつたレースの飾りがついていた。

テーブルに座ると、ワルドはワインの栓を抜いて杯についてだ。そしてそれを飲み干す。

「きみも腰掛け、一杯やらいか? ルイズ」

ルイズは言われたままにテーブルにつく。するとワルドはルイズの杯に、ワインを満たしていく。自分の杯にも再度ワインを注いで掲げた。

「二人に」

かちんつとグラスが触れ合つた。なんとまあ…ギーシュ並みにキザな男である。

「姫殿下から預かつた手紙はきちんと持つていいかい?」

ルイズはポケットの上から、アンリエッタから預かつた封筒を押さえた。そしてウェールズから返して欲しい手紙の内容とはなんのだろうかと考えた。そしてなんとなく内容の予測がつく気がした。ルイズが考え事をしているとワルドが自分を見つめていることに気

づいた。ワルドと田が合づ。

「心配なのかい？無事にアルビオンのウェールズ皇太子から姫殿下の手紙を取り戻せるのかどうか」

「ええ、そうね。心配だわ……」

ルイズは心配そうに眉を寄せた。するとワルドはクスッと笑う。

「大丈夫だよ。さつとつまへくくなにせ、僕がついているんだから」

「そうね、あなたがいればきっと大丈夫よね」

（それにギントキもいるし）

ルイズは無意識に口ひるの中で付け加えた。

「それで？大事な話つて？」

ルイズが聞くとワルドは何かを思い出すよう遠い田をした。

「覚えてるかい？あの日の約束、ほら、いつも同じ両親に怒られたあときみはお屋敷の中庭でいじけていただろ」

「わ、へんことばかり覚えてるのね」

「そりゃ、覚えてるわ」

ワルドは楽しそうに笑った。

「きみはいつもお姉さんと魔法の才能を比べられて……『キガ悪い  
なんて言われてた』

ルイズは恥ずかしそうに俯いた。

「でも僕は、それはずっと間違いだと思つていた。確かにきみは不  
器用で失敗ばかりしていたけど……」

「まあ、意地悪ね」

ルイズはワルドの言葉に頬を膨らませた。するとワルドは慌てて言  
う。

「違うんだルイズ。きみは失敗ばかりしていたけれど、誰にもない  
オーラを放っていた。魅力といつてもいい!! それはきみが他人に  
はない特別な力を持つているからさ。僕だって並のメイジじゃない。  
だからそれがわかる」

「ま、まさか」

「まさかじやない。例えば……そつ、きみの使い魔……」

ルイズの頬が赤く染まった。

「ギントキ……のこと?」

「そうだ。彼が武器をつかんだときこそ、左手に浮かび上がるルーン。  
あれはただのルーンじやない……伝説の使い魔の印さ」

ワルドの言葉にルイズは目をぱちくりさせた。

「伝説の…使い魔の印？」

「そう…あれば『ガンダールヴ』の印だ。始祖ブリミルが用いた  
という伝説の使い魔さ」

ワルドは少し興奮したように言つと手を光らせた。

「ガンダールヴ？」

ルイズは怪訝そうに小さく呟く。

「誰もが持てる使い魔じゃない…！…きみはそれだけの力を持つたメ  
イジなんだよ」

「そ、そんな…信じられないわ

ルイズはぶんぶんと首を振つた。ワルドは、冗談を言つてゐるのだ  
と思った。確かに銀時は強い…しかし、それは武器を持たなくとも  
…もとから強いのだ。

ワルドは勘違いしている…それに自分はゼロのルイズだ。  
落ちこぼれ…どう考えたつて、ワルドが言つのような力が自分にある  
なんて思えない。

「きみは偉大なメイジになるだろ？。僕はそう予感している

ワルドは熱の入つた口調でルイズに言つと見つめた。

「この任務が終わつたら、僕と結婚しようルイズ」

「……え？」

いきなりのプロポーズにルイズは戸惑った声をあげた。

「僕は魔法衛士隊の隊長で終わるつもりはない。いずれは、国を…」  
…」のハルケギニアを動かすよつた貴族になりたいと思つてこる

「でも…わたし…まだ…」

「きみは十六だ。自分のことは自分で決められる年齢だし、父上だつてゆるじて下さつていてる。確かに…」

ワルドは一歩言葉を切るとルイズに顔を近付けた。

「確かに、ずっとほつたらかしだつたことは謝るよ。婚約者だなんて、言えた義理じゃないことも分かってる。けど、僕にはきみが必要なんだ」

「ワルド……」

ルイズは考えた。なぜか銀時のことが頭に浮かぶ。もし、ワルドと結婚したとして…自分は銀時を使い魔としてせばに置くことが出来るのだろうか…

なぜか、それは出来ない気がする。これがカラスやフクロウならこんなに悩まなくてすんだに違いない。

もし、銀時をほっぽりだしたらどうなるのだろうか…

キュルケやギーシュ…それとも厨房にいるメイドが銀時の世話を焼こうとするのかもしね。いや、銀時は器用だ。知らない異世界でも普通に生きていけそうである。

しかし、その場合銀時はルイズの知らない子と知らない所で生きていくのだろうか？

（いやだ！ そんなのいやだわ）

ルイズは心の中で叫んだ。どうしてこんなにも嫌なのかはルイズ自身にはまだ分からぬ。分かっていることは銀時は他の誰のものでもない。ルイズの使い魔なのである。

ルイズは顔をあげた。

「でも……わ、わたしはまだ……あなたに釣り合つような立派なメイジじゃないし……もつともつと修行して……」

ルイズはだんだんと俯いていく。

「あのねワルド。小さい頃、わたし思ったの。いつか皆に認めてもらいたいって……立派な魔法使いになつて父上と母上に誓めてもらつて」

ルイズは顔を上げるとワルドを見つめた。

「まだわたし……それができない……」

「きみの心の中には、誰かが住み始めたみたいだね」

ワルドはルイズの言葉に視線を微かに外して言った。

「や、そんなことないの……！ そんなことないのよ……」

ルイズは慌てて否定した。

「いいや、僕にはわかる。…わかつた今は取り消そつ。でも、この旅が終わつたらきみの気持ちは僕にかたむくはずだ」

ワルドが自信満々に言つた。

「それじゃあ、もう寝よつか…疲れただひつ~」

ワルドはそういうとルイズに近付いて唇を含ませよつとした。先ほど言葉を取り消したくせに…なんて男なんだろう。当然ルイズの体はこわばり、ワルドを押し戻した。

「ルイズ?」

「『じめん…でも、なんか…その…』

ルイズはもじもじとした。ワルドはそんなルイズを見て首を振つた。

「急がないよ。僕は」

ルイズは再び、俯いた。

どうしてワルドはこんなに優しくて、凛々しいのに…。ずっと憧れていた…もちろん結婚してくれと言われて、嬉しくないわけじゃない。

けど何かが心にひつかかるのだ…

さてその頃、銀時はこうと屋上からロープで身体を吊し窓の外枠に器用に捕まりながらリーズとワルドの部屋の様子をつかがっていた。

腰にぬいつもの洞爺湖…ではなくデルフリンガーがぶら下がっている。

そう、洞爺湖のような殺傷能力の低いものではなく…デル公。つまり鋭い剣だ…さつとリーズに手を出した瞬間チャンスだと思い殺る気なのだろう。

「なあ、相棒」

デル公が銀時に話しかけた。

「あ？ なんだよ」

銀時はワルドとリーズを見ながらデル公に返事をした。

「相棒は、あの女に惚れてんのか？」

「…は？ 今なんて？」

「だから、相棒はあの女に惚れてるんだ。だから今もこうして覗いてる」

銀時はデル公の言葉に目をぱちくりさせた。そして少し困惑うつような…慌てた感じで言った。

「こやいやいや、お前何言つてんの…銀さんは別にあれだ…口、口つ口ソンとかじゅねえし…俺がムカついてんのはあのサラサラが…

…

銀時は言にながらふと思つた…確かにワルダはサラサラロソモである。しかしサラサラ度で言えばヅラ（桂）のまづが上である。では、何故こんなにムカツくのだから…銀時は眉を寄せてもう一つの理由を出した。

「ライズはまだ幼いし…俺の娘や妹みてえなもんどうの誰とも知れねえ馬の骨にはやれねえんだよ…！」

銀時があつぱりとツバトール公は何も言わずにじぱり黙つた。

「なあ、相棒…それって…」

しまじくじびテル公が何かを言おうとしたその時、上から何かが降つてきた。ばわっと、肩に重いものがのしかかる。

「こなとこでなにしてるの？」「探したのよ」

降つてきたのはキルケである。キルケは落ちなつて銀時につきつと抱きついた。

「ちよ、どうから降つてきてんだ。離れやつ…」

銀時があつぱりと云つてもキルケは全く気にしてない…それどころか別の話を始める。

「そんなことより、何を見てるの？」

キルケは銀時が見ていたように窓の中を覗き込んだ。それからた

め息をつき銀時を見つめる。

「あら？ ダメよ。新婚さんを覗くなんて… それより、あたし思つた  
んだけど、こんな風に逢い引きするのも割となものね。ほら、向  
こうに見える明かりなんてまるであたしたち一人を祝福してゐた  
いじゃない？」

キュルケがそう言つと銀時はため息をはいた。その時である、窓が  
突然バタンと音を立てて開けられた。

窓から現れたのは、腰に手を当て鬼のように顔を歪め銀時とキュル  
ケを睨んだルイズであった。

「あんたらなにしてんの？ 窓で」

ルイズの見た二人の様子とは、屋上からフローランとロープで吊られ  
た銀時にべつたりとキュルケが抱きついてる光景だった。

「見ればわかるじゃない。逢い引きよ」

キュルケがきつぱりと言つとルイズの肩がブルブルと震えた。もち  
ろん銀時は違うと言つていたのだが… 頭に血が上つたルイズには聞  
こえない。

「よよよ、よそでサカリなさこよーー。」

「いやよ。それにダーリンはここので逢い引きしたいって言つんだも  
の」

キュルケが勝ち誇つたように言つと、ルイズはキュルケに飛びかか  
つた。

もちろん足場は銀時である。

「あんたねえ、誰彼構わず逢い引きなんてしてんじやないわよーー！」

ルイズが銀時の上に乗りながら言った。するとキュルケはにんまり笑う。

「あら、いいじゃない。あなたには関係ないでしょ！－ヴァリエ－

「関係あるわ！！わたしの使い魔だもの！！」

銀時の上で一人の少女がバチバチと火花を散らし睨みあつた。今にも取つ組み合いが始まりそうである。

「ちよ…お前ら落ち着け…」

「あんたは」

「ダーリンは」

「黙つてて！！」

銀時は一人に言われて仕方なく黙つた。

（あー…なんでこんなことになつてんだ？俺はロリコン野郎を殺る  
気だったのによオ）

銀時はそう思ふと上を見た。二人の言い争いはまだまだ続きそうである。

さて、すっかりルイズに忘れられたワルドは部屋の中からそんな様子を興味深そうに見つめていた。

## 第21訓 寝起きは危険です

翌日、ギーシュが田を覚ますと扉がノックされた。ギーシュは隣で気持ちよさそうに寝ている銀時を見ると起きたないよつて窓にてて扉へと向かった。銀時を起こしてしまつのは忍びないからだ。

今日は船が出ないのに……やつくつ寝かせてくれよつと思つながら、ギーシュはドアを開けた。

ドアの向こうには羽帽子をかぶつたワルドがいた。

「おはよ。使い魔くんは居るかな？」

ギーシュは田をぱりくつとわせた。

（魔法衛士がギンさんになんのよつだとこつのだ… そつこえは昨日ギンさんの帰りが遅かった……）

ギーシュはとつとつ銀時がルイズを好きなことがバレて修羅場が始まるのではないかと思つた。

「おはよ。ギンさん何かよつですか？」

ギーシュは少し警戒した感じで聞いた。何故なら銀時はまだ寝ている。そんなとこにこの男を入れるのは危険だ。

「いや……実はフーケの一件で、僕は彼に興味を抱いてね。2人きりで話したいと思つて……」

ワルドの言葉にギーシュは田を見開いた。この男は今なんと言つた

…銀時に興味があると言ったのだ。違う意味でギーシュの警戒は高まつた。

（冗談じゃない！…ルイズだけじゃ飽きたらず、その使い魔のギンさんにも興味があるなんて…ギンさんの右腕は僕なのに…）

「すいませんが、ギンさんは今睡眠中です…」

ギーシュは力強くワルドを追い返すように言った。  
するとワルドは少し考えるよう顎に手を置いた。

「ふむ…では起きるまで少し待たせてもらひつよ」

「え？」

ギーシュがワルドの言葉に驚いている間にワルドは強引と中へと入っていた。

ギーシュは困るなど言つたのだが、ワルドは銀時の寝ているベッドに向かつて歩いていく。

ワルドは銀時が起きる気配が無いだろうかと顔を覗き込んだ。そして感嘆する…起きてるときにはあの死んだ魚のような目とダルそうな雰囲気であまり気付かなかつたのだが、なかなか整つた顔立ちをしている。ルイズが気にするのも仕方ないのかもしれない。

ワルドがしばらく見ているとゆつくりと銀時の閉じられたまぶたが上がつた。ワルドは銀時の赤い瞳が自分を映したと認識した瞬間身体に凄まじい衝撃が走つたのを感じた、そして全身を壁にぶつける。ワルドは何が起こったのか分からぬまま意識が遠のいていくのを感じた。

銀時はノックの音で目を覚ました。目は開けてなかつたのだが……どうやら誰かが来たようだ。

(つたく……こんな朝から誰だよ)

銀時がそんな風に思つてみると隣でシーツの擦れる音が聞こえた。どうやらギーシュが出るようである。ギーシュはドアを開けて何かを話しているようだ。

どうやら、密は知り合いのようだ。銀時は安心してまた眠りについた。

再度銀時は目を覚ました。何やら誰かが自分を覗き込んでるような視線が感じるからだ。

(…なんだ? ……ツツ!?)

銀時はゆっくりと目をあける。そして目の前の光景に驚き声にならない悲鳴をあげながら目の前の人物を手加減無しでぶつ飛ばした。部屋の中にドカッ、バーンッ、ガラガラと殴った音、壁に打ちつけられた音、壁が少し崩れた音が響き渡つた。

「ギ、ギンセーん!! 大丈夫かいツ!!」

近くにいたギーシュが銀時に聞いた。つといつかギーシュよ。少しは氣絶中のワルドの心配してやれよ(笑)

「いや、俺は大丈夫だけじよ。なんでロココンがいるんだ?」

銀時は壁にもたれかかったままグッタリとしているワルドを見て頬をポリポリと搔いた。

(やべえな……いきなりだつたし思い切りやつちました。けど、寝起きに嫌いな顔見せられたら思わず殺るだり……つてことで銀さんは悪くない悪くない)

銀時は少し反省?しているとギーシュがワルドの来ていた理由を話始めた。どうやら銀時に何やら話があつたらしく。

銀時はチラッとワルドを見た……相変わらずグッタリとしている、ピクリとも動かない。

(し、死んでねえよな……)

銀時は少し不安になり、ベッドから起き上がりワルドのもとへ行き様子を調べた。どうやら、本当にただ気絶をしているだけのようだつた。銀時はホッと安堵の息をつく。それを見たギーシュは眉を寄せた。銀時がワルドに構つ? ことが面白くなかったのだろう。

「ギンさん、下で朝ご飯食べに行こ!」

ギーシュが言うと銀時は少し考えるとワルドを指差した。こいつはこのままでいいのか? と言いたいのだろう。

「大丈夫!! 腐つても魔法衛士隊だからね」

ギーシュがきつぱり言つと銀時もワルドのことは嫌いなのでどうで

もよこのか、一階へと朝ご飯を食べに降りていった。

さてさて、銀時たちが一階に降りて三時間はたつただろうか。ワルドの手がピクリと動いた。そしてゆっくりと目を開く。

「あれ？僕は何をしていたんだ？」

どうやら、気絶していたせいか殴られたせいかは知らないが少し記憶が飛んでいるようだ。

「確か、ルイズの使い魔に会おうと部屋を訪れて…」

ワルドは立ち上がりつて周りを見る。ギャグ補正済みなので変わったところは特になかつた。

ワルドが周りを見ていると机の下に一枚の紙が落ちていてことに気がついた。ワルドは拾つてそれを見ると驚きに目を見開いた。紙に書いてあったのは、『ギンさんとルイズのラブラブ大作戦』であつた。

内容はまあ、簡単に言えばワルドを蹴落とし、銀時とルイズがラブラブになるといったものである。

「なるほど…使い魔くんはルイズが好きなのか…面白い」

ワルドは口端を上げて笑つと当初の目的を果たそつと銀時の元へと向かつた。

この時、ワルドは幸か不幸か記憶がないまたはギャグ補正が済んで

いたせいで勘違いしていた。銀時は『ガンダールヴ』だから強いのだと。無いとは思うがいざ自分が不利になれば魔法で武器を飛ばしてしまえば絶対勝てる。

どれか一つでも覚えていれば、考えを改めていれば、これから起る悲劇を言い止めることが出来るのだが：

ワルドは意気揚々と一階へと降りて行った。

ワルドが一階に降りると銀時たちはテーブルに座つて話していた。銀時は頼んだらしいケーキを食べていたので機嫌である。

「あ、ワルド…どこに行つていたの？」

ルイズがワルドに気付くと近付いた。どうやらビリにもいないワルドを少し心配していたようだ。

まあ、ワルドは銀時とギーシュの部屋で気絶していたので見つからなかつただけなのだが。

「…まあ、その。ちょっとね

ワルドはルイズの問いかけに言葉に濁した。ルイズはそんなワルドに首を傾げる。しかし、ワルドはそんなルイズを気にせず銀時へと目線を移した。銀時はケーキを食べながら、ギーシュが話しかけてくる内容に適当に相づちをついていた。もちろんギーシュの隣には、モンモランシーがいる。

「やあ、使い魔くん」

ワルドは片手を上げると銀時に近付いた。銀時はそんなワルドにどんな文句を言われるのかと思い眉を寄せた。

するとワルドは口を開いた。

「僕はきみと話したくて…部屋に訪れたんだが、きみが起きる前に寝てしまつたようだ。すまないね」

銀時は皿をパチクリとさせた。殴つたことに對し、文句を言つて来たのかと思つたのだが何やら違つようだ。

(寝てしまつた?…ここつ記憶が飛んでるのか)

銀時はニヤリと笑つた。記憶が無いのなら好都合である。そしてケーキを一口食べるとワルドを見つめた。

「で?俺に話しつてなんだ?」

「僕はきみに興味があつてねえ、手合わせを願いたいんだ」

ワルドが言つと銀時は考え込んだ。ワルドをぶちのめすのは大歓迎だ。だが、先程気絶させてしまつたせいか罪悪感が募る。

「わるいけど、今はそういう気分じゃねえ

「そうよ。手合わせなんて…危ない、危険だわ」

銀時がきつぱり言つとルイズも反対するよつて言つた。そんなルイズにワルドは大げさに声をあげた。

「おや?おやおや、ルイズ。僕の可愛いルイズ。僕がきみの使い魔

に怪我をさせると、僕はそんなことしないよ。……それとも僕が怪我をすると思つてゐるのかい？」

「ち、違つわ。……けど、今はそんなことしてることも、じやないでしょ、う？」

ルイズはワルドを見つめきつぱりと言つた。ワルドはそんなルイズを見ると、こいつと微笑み銀時に見せ付けるように抱き寄せた。ワルドはあの紙のせいで銀時がルイズに惚れていると勘違いしているのだ。本当に勘違いかは分からぬが、

「ルイズ、貴族といふやつはやつかいでね。強いか弱いか、それが気になるとじうにもならなくなるのさ」

「ワルド、あなたがやつとも、ギントキは手合わせなんてしないわ、そうでしょ？ ギントキ」

ルイズはワルドの腕の中から離れるとケーキを食べていた銀時を見た。そして目を見開く、銀時はケーキを食べる手を休め何やら不機嫌そうに眉を寄せてくるのだ。

「ここが、やつてやるよ。その代わり、俺が勝つたら……」

銀時はある条件を言つて、タコと笑つた。ルイズたちは銀時の言葉に驚き、どう返事を返すのだからとワルドを見つめた。

「ああ、いいだろ？ その条件をのもう

ワルドは銀時の条件をのんだ。これが悲劇の始まりだと知らず、……



## 第21訓 寝起きは危険です（後書き）

次回は、ワールドファンの方は見ないうつが良いかもしません。

本当に悲劇なんで…（笑）

## 第22訓 なんてベタベタな罰ゲームなんだ（前書き）

### 『注意』

今回のゼロ日はワルドファンにとってはほんと許せないかもしれません。

ワルドが酷い目に合つのが嫌という方は見ないことをオススメします

そして戦闘描写やつぱり苦手

それでは、ゼロ日始まります！！

## 第22訓 なんてベタベタな罰ゲームなんだ

銀時とワルド、そしてルイズたちはこの宿の中庭にある、かつて貴族たちが集まり、陛下の閱兵を受けたという練兵場に来ていた。もちろんタバサやキュルケも来ている。

何故こんな宿の中庭にそんな場所があるのかというと、この宿は昔、アルビオンからの侵攻に備えるための砦だつたようだ。ちなみに今はただの物置き場になつており、樽や空き箱が積まれかつての栄華を懐かしむかのように石でできた旗立て台が苔まみれで佇んでいる。

「昔……」この場所で貴族たちが名誉と誇りをかけて魔法を唱え合い決闘をしていた。実際には下らないことで杖を抜きあつこともあつたものさ。そう、例えば女を取り合つたりね」

ワルドの言葉に銀時の眉はピクッと動き上に上がつた。そして「テル公の柄を握る。ちなみに何故洞爺湖ではないのかといふと……テル公の方が殺傷能力が高いからである。

「ねえ、本当にやるの? やめなさいよ」

ルイズが心配をして言つた。しかし、隣にいたキュルケが楽しそうに笑う。

「あら、いいじゃない。ダーリン頑張つて

「ギンさんー! 頑張つて下さいーー!」

キュルケの後にギーシュが銀時を応援した。するとモンモランシー

が不安そうに呟く。

「ギンさん、大丈夫かしら」

「モンモランシー。ギンさんなら大丈夫だよ」

そんなモンモランシーにギーシュは自信満々に言った。するとモンモランシーも頷く。

その隣ではタバサが珍しく本を読むのをやめ興味津々に銀時を見つめていた。

「もう……わたし知らないからね……」

ルイズがどつちに言ったのか分からぬが、大きな声で叫んだ。すると、それが戦いの合図になつたのかワルドが細身の剣を腰から抜いて構えた。

「じゃあ、始めようか使い魔くん」

決闘が始まり、先に仕掛けたのはワルドだった。ワルドは銀時に向かって剣を振り下ろした。ガーキンッと音が鳴り、銀時は難なくそれを受け止める。ワルドは眉を寄せると再度刀を振り下ろし激しい攻めを繰り返す。その剣裁きは、流石たくさんの貴族たち憧れの的魔法衛士隊隊長といったところか、スピードは申し分ない。大抵の者はこのスピードに翻弄され、手も足も出さずに終わるだろう。だが、残念ながら銀時はその大抵の者の中に入るレベルではない。

もともと、銀時の剣の技術は半端ない。それどころか、この異世界で『ガンドールヴ』という力を手に入れているのだ。

銀時はワルドの剣に合わせてデル公を動かし難なくその攻撃をさばいていった。

「す、すごい……」

銀時とワルドの攻防戦を見ながら誰かが小さく呟いた。

ワルドは何度目かの攻撃を仕掛けると一旦剣をひき、銀時から距離を取る。

このまま攻め続けても銀時の守りを崩すことが出来そうにない。それどころか、無駄に体力を消耗してしまつと考えたのだ。

「なあ、魔法つかわねえのか？」

銀時はデル公を構え直すとワルドを見て尋ねた。するとワルドは剣を納めると杖を取り出した。

「僕としては剣のみで決着を付けたかったのだが、そうはいかないみたいだね」

ワルドは杖を構えると銀時へと向けた。

銀時はデル公を構えるとワルドの攻撃に備える。ワルドは魔法の詠唱を始めた。

ワルドが詠唱を始めた瞬間、空気の流れが変わったのを感じた。銀時は眉を寄せると、ワルドの近くの風景が少し歪んでいるのに気がついた。まるで見えない何かを集めて視線のピントを外されているようだ。

（こいつは……）

「相棒！！魔法が来る、よけろーー！」

銀時が何かに気付いた瞬間、デル公が叫んだ。銀時は地面を強く蹴ると移動をする。

すると、先程銀時が居た場所に見えない何かが通り過ぎたのを感じた。その見えない何かに当たったのだろう……後ろにあつた樽が音を立てて壊れた。

「オイオイ、よりによつて見えない攻撃かよ」

銀時は厄介だといった感じに舌打ちをした。そしてデル公を構えるとワルドの元へと飛び剣を振り下ろした。ワルドは杖で銀時の剣を受け止めた。ガキーンッと火花が散る。

（くつ…なんて重たい一撃）

ワルドは杖を持った自分の手が攻撃を受けた衝撃で痺れたのを感じた。ワルドはもう一度、魔法を詠唱しようとするも銀時の剣を受け止めるのが精一杯でそんな余裕はない。完全に魔法をふうじられたのだ。

銀時の攻撃はどんどん激しくなっていく。  
とうとう、ワルドは手の尋常じゃない痺れに耐えきれず杖を落としてしまった。

銀時の剣がワルドに向かつて振り下ろされる。ワルドはギュッと目を閉じた。しかし、いつまでたつても斬られるという衝撃がこない。ワルドは恐る恐る目を開けて驚愕した。剣はちょうどワルドの頭の上で止まっていたのだ。

「勝負ありだ」

銀時はニヤリと笑った。すると見ていたレイズたちから歓声が上がった。

「う、うそ…」

「凄い！…凄いわ。ダーリン…！」

「ギンさん…ギンさんなら勝つと信じてました」

「ギンさん、そんなに強かったの！？」

「ギントキ…強い」

上からルイズ、キュルケ、ギーシュ、モンモランシー、タバサである。

ワルドはがっくりと肩を落とした。まさか負けるなんて思つてなかつたのだ。

ワルドはブルブルと震える自分の手を見つめた。当分手の痺れは取れそうにない。

（流石伝説のガンダールヴ…本気を出して無いにせよ、僕が負けるなんてね）

ワルドはそう思つと顔をあげた。そして、銀時を見ると口を開いた。

「僕の完敗だよ、使い魔くん……とても楽しい手合させだつた」

ワルドは爽やかに言つと長いサラサラの髪をなびかせ、宿へと戻ろうとした。

「おい、待てよ。まだ終わつてないだろ」

銀時はそんなワルドを呼び止める。ワルドは不思議そうに銀時を振り向き、銀時が持つてゐる物を見て首を傾げる。

「それは……なんだい？」

銀時が持つてゐる物を見るとワルドは不思議そうに聞いた。もちろん、ルイズたちも不思議そうにそれを見つめている。

「こいつは、バリカン。こんなこともあらうかとコルベールに作らせておいて良かつたわ……ってわけで覚悟しやがれ」

銀時は説明するのが面倒なのか、それとも早くやりたいのか早口で言いながらワルドへと近付いた。

「そのバリカンとは一体何を……ま、まさか……ちよ、待つてくれ使い魔く……ギャアアアアアア……！」

後に、これを見ていたルイズたちは語る。銀時の心底楽しそうな笑顔と、ワルドの悲鳴が頭から離れないと……



## 第23訓 戦いは突然始まるもの（前書き）

お知らせへ

皆様のおかげでPV30万突破！！

ありがとうございます

ひとそれではどうも

## 第23訓 戦いは突然始まるもの

ワルドに罰ゲームという名の悲劇を終えた夜……。

銀時は一人、部屋のベランダで月を眺めていた。ギーシュたちは一階の酒場で銀時の勝利を祝つて騒いでいる。ちなみにキルケが誘いにきたのだが、銀時は断つた。どうにも飲む気分にならなかつたのだ。

銀時は夜空を見上げた。瞬く星の夜空に銀時は感嘆したようにため息をついた。

「あいつらにむけの星空見せてやりてえなア」

銀時は夜空を見上げながら新ハと神楽に見せてやりたいと思つた。一旦そう思つと江戸に帰りたいと強く思つてしまつ。

「ギントキ」

そんな風に江戸を思つてゐる銀時の後ろからルイズが声をかけた。銀時はルイズの声に反応して振り向いた。

「お前が……どうしたんだ? 下でさわがねえのか?」

「ギ、ギントキじゃ……飲まなくていいの?」

銀時に言わるとルイズはじつと見つめて言い返した。そんなルイズに銀時はガシガシと頭を搔いた。

「あー……なんかよオ。そんな気分じゃねえんだよな」

銀時がボソッと呟くとルイズはゆっくりと銀時に近付いた。

「ねえ、ギントキ……隣いい？」

ルイズは銀時に聞くと返事をもらひつ前に隣に座つた。銀時はチラツチとルイズを見るとまた星空を見上げた。

「……」

「……」

「……ねえ、ギントキ……何考えてるの？」

二人の間沈黙が走る。暫くするとルイズが銀時に話しかけた。

「別に……」

「うそ、うそよ。そんな顔して何も考えてないわけないじゃない」

ルイズは銀時の言葉に眉を寄せ、声を高々にして言つた。そんなルイズに銀時は驚き目をパチクリさせる。

「なんでそんな興奮してるんだ？……あー星が綺麗だからよオ。あいつりにも見してやりてえなつて」

「あいつひつてギーシュたひ？」

「いや、俺の世界の……まあ、家族みたいなもんだ」

江戸はむづこんな星空見れねえからなつと思ひながら星を見続ける

銀時。

そんな銀時を見るとルイズは少し顔を俯かせた。

「家族……ギントキはやつぱり帰りたいの？」

「……帰つたらばまあが家賃取り立てに来るんだろうな。ヅラもウザいくらいやつてきては勧誘していくだろうし、そのせいでの税金泥棒たちがバズーカふつ放して玄関壊れるし、仕事もやらなきゃ食つていけねえし、時折化け物が来てパー子強制されるし」

銀時がぶつぶつ呟くのを聞いてルイズはホッとした。もしかしたら銀時は帰りたくないのかもしぬないと思つたからだ。しかし、次の言葉にルイズはドクリと脈をついた。

「……けど、そんな所でも俺にとつては大事な家族がいて、馬鹿なことする戦友がいて、喧嘩相手の税金泥棒、化け物たち……まあ、悪くはねえ」

「そ、そつか。じゃあ、この任務が終わつたら帰れる方法……探しであげるわ」

ルイズは少し声を落として言つた。分かつたのだ、何やかんや文句を言いながらも銀時は家族のいる所へ帰りたがつてること……

「……もし帰れなかつたらビーナスなんだ？」

銀時が聞くとルイズは微かに頬を染めてきつぱりと言つた。

「その時はわたしが一生あんたの面倒みるわよッ！…」

ルイズの言葉に銀時は目を見開いた。というか突然プロポーズ的な言葉を言われたら誰だって驚く。

「へ、へえ…お前が一生面倒みるんだ？けどよオ。それじゃああのハゲはどうするんだ？」

「ハゲ？…い、今はハゲのことなんて関係ないじゃない！…」

銀時の少し戸惑つた言葉にルイズはきつぱりと言つた。ちなみにハゲとはコルベールではなく、ワルドのことである。

「いやいやいや、関係なくないだろ？あのハゲ一応婚約者じやねえか。それともあれか？この国は一夫多妻ならぬ一妻多夫なのか。いや、もしそうでもダメだぞ！…お父さんは許しません。一人に絞りなさい！…」

銀時が慌てたように言つとルイズは首を傾げた、何か話が噛み合つてないのだ。

「ねえ、ギントキ何の話をし…え？何あれ！…」

ルイズが銀時に問いかけようとすると巨大な何かが月を隠していることに気づいた。

月明かりをバックに、巨大な影の輪郭が動いた。目をこらしてよく見るとその巨大な影は岩でできたゴーレムだった。

こんな巨大なゴーレムを操れるのは……。巨大ゴーレムの肩に、誰かが座っている。その人物は長い髪を、風になびかせていた。

「あんたは……」

「テ、テメエはッ！…」

ルイズと銀時が怒鳴った。肩に座つた人物が、嬉しそうな声で言った。

「感激だわ。覚えててくれたのね」

フーケが言うとルイズはどうしようと言つた感じで銀時を見つめる。銀時は暫くフーケを見つめると不敵な笑みを浮かべた。

「へえ……久しぶりじゃねえか。あのハムスターまだテカくなつてんのか？磯村さん」

「…………」「

銀時の言葉にルイズとフーケは黙つた。ここにモンモランシーがいれば鋭く突つ込んでくれるのだが、残念ながらモンモランシーは一階にいる。

「ギ、ギントキ……磯村さんじやないから……つてか磯村さんつて誰よ！…」

ルイズが銀時の服をグイグイ引っ張りながら言った。すると銀時は微かに苦笑いをしながら言った。

「あー、つてことはアレか。消しゴムが窓から落ちたことに驚いて消しゴムの自殺だアアアー！なんて騒いでクラスの皆に白い目で見られた佐和原くんか」

「ちょっとーーくんつて私をそんなバカな男にしないでよッーー」

今度はフーケが言つた。

「ちよつとあんた……」

「ギント井あんた…」

フーケとルイズはこいつ忘れてるんじゃないかなといつた疑いの目で銀時を見つめた。銀時は冷や汗を流し始めた。

「オイオイ、何その目。あれだよ……覚えてるから……ちょっとしたお茶田じゃねえか。あれだな……あー……そりゃあくつの掃除のオバチヤン」

「誰が掃除のオバチャン！－！フーケよ！－！土くれのフーケ！－！」

銀時の言葉にキレたように否定するフーケ。すると銀時は気にした  
素振りを見せせず頷いた。

「あ、やうか。やうやう、しゃべれのフーケだつたな」

「土くれエエエー！さつき言つたばつかりじやない！あんたの頭には脳みそぢやなく豆腐が詰まつてんのオオオー！」

銀時の言葉にフーケは怒鳴り散らしながら言った。もうかなりのお怒りモードのようだ。

そんなお怒りモードを押さえるかのようにルイズが口を開く。

「ギントキの頭に何がつまつてゐかはしらないけど…」

「いや、脳みそだからあまり銀さんバカにすると泣いちゃうんだ」

ルイズの言葉に銀時は否定するかのように言つても、とりあえず無視だ。

「フーケ、あんた牢屋に入つてたんぢやないの？」

ルイズは眉を寄せてフーケを見つめながら言った。

「親切な人がいてね。わたしみたいな美人はもつと世の中のために役に立たなくてはいけないと言つて、出してくれたのよ」

フーケはつそぶいた。暗くてよく見えなかつたが、フーケの隣に黒マントを着た貴族が立つてゐる。きっとその貴族がフーケを脱獄させたのだろう。貴族はしゃべるのをフーケに任せてだんまりを決め込んでいる。白い仮面をつけ、フードを田深くかぶつてゐるので顔と頭は分からぬが男のようだつた。

「へえ…醉狂な野郎もいたもんだ。で? 何しにきやがつた」

銀時はデル公へと手を伸ばす。

「あら、素敵なバカנסをありがとつて、お礼を言いにきたんじやないの…！」

フーケの目がつり上がり、狂的な笑みが浮かんだ。フーケの巨大ゴーレムの拳がうなり、ベランダの手すりを粉々に破壊した。硬い岩でできた手すりである。岩でできたゴーレムの破壊力は以前より強

くなつてゐるようだつた。

銀時は軽く舌うぢすとルイズの手をつかみ、駆け出した。部屋を抜け、一階へと階段を駆け下りた。

一階も修羅場だつた。いきなり玄関から現れた傭兵の一隊が、一階の酒場で飲んでいたギーシュたちを襲つたらしい。ちなみにワルドは騒ぎに気づいて駆け込んできたようだ。

ギーシュ、モンモランシー、キュルケ、タバサにワルドが魔法で応戦しているが、多勢に無勢。どうやらラ・ロシェール中の傭兵が束になつてかかつてきているらしく、手に負えないようだ。

キュルケたちは床と一体化したテーブルの脚を折り、それを立てて盾にして傭兵たちに応戦していた。歴戦の傭兵たちは、メイジとの戦いに慣れていて緒戦でキュルケたちの魔法射程を見極めると、まづ魔法の射程外から矢を射かけてきた。暗闇を背にした傭兵たちに、地の利があり、屋内の一行は分が悪い。

魔法を唱えようと立ち上がるものなら、矢が雨のように飛んでくる。

さて、銀時は困つた。階段は玄関側の方にあるため、入り口には鎧に身を纏つた傭兵どもがうじゅうじゅうしていたのだ。

「ちょっと、あんたたち邪魔よーー！」

ルイズが傭兵に怒鳴った。すると傭兵はルイズを見てニタリと笑つ。

「おいおい、ガキは下がつてな……今はトリステインのメイジを倒す仕事中だ」

「トリステインのー? まさかワルドたちのー?」

傭兵の言葉にルイズは驚くように叫んだ。すると傭兵の一人が何かに気付いたのだろう、ルイズへと手を伸ばそうとした。

「おい、ここのガキもしかし……ツ」

しかしその手はルイズに触れる前に銀時によつて遮られた。

「オイオイ、フーケが来たと思つたら今度は雑魚キャラがぞろぞろぞろぞろ」と

銀時は傭兵の手を掴んだままハアとため息をついた。そして傭兵たちを睨みつける。

「駄キャラが無駄にシーン使つてんじゃねえーよー?」

銀時は傭兵たちにキツいことを言つと思い切り蹴つ飛ばした。

傭兵たちはうじゅうじゅうじゅと群がついていたため何人もの傭兵たちが飛ばされた傭兵に巻き込まれ倒れていった。

まるでミニノ倒しのようである。

「よし、道は出来た。ルイズ行くぞ」

「え？ え？」

銀時は呆然としているルイズの手を握ると傭兵を飛ばした時に出来た隙間からキュルケたちの元へ行つた。

ちなみにその間他の傭兵たちはあまりの突然な出来事に攻撃するのも忘れて呆然としていた。

銀時はテープルを盾にしたキュルケたちのそばに行くとしゃがみ込んだ。そして上にフーケがいることを伝えた。しかし、巨大ゴーレムの足が吹きさらしの向こうに見えていたので、伝える必要はなかったようだ。

他の貴族の客たちは、カウンターの下で震えている。でっぷりと太った店の主人が必死になつて傭兵たちに「わしの店がなにをした！」と訴えかけていたが、矢を腕にくらつて床をのたうち回つた。

「参つたね… つというかさつきの使い魔くん見て何か思い出しそうだ」

ワルドは頭を押されて呟くとキュルケが言つた。

「やつぱり、この前の連中はただの物盗りじゃなかつたわね」

「あのフーケがいるつてことは、アルビオン貴族が後ろにいるということだな」

キュルケが、杖をいじりながら呟いた。

「……やつらはちびちびとこつちに魔法を使わせて、精神力が切れところを見計らい、一斉に突撃してくるわよ。そしたらどうしようダーリン」

キュルケが銀時に言つてギーシュが銀時の手を握つた。

「大丈夫ですギンさん……ほぐのゴーレムでふせいでみせます」

「ギーシュ…格好良い」

ギーシュの言葉にモンモランシーがキラキラ瞳を輝かせた。するとキュルケは淡々と戦力を分析して、言つた。

「ギーシュ、あんたの『ワルキューレ』じゃあ、一個小隊ぐらいで関の山ね。相手は手練れの傭兵たちよ?」

「やつてみなくちやわからない」

「あのねギーシュ。あたしは戦のことならあなたよりひょつとばかり専門家なの」

「ほくはグラモン元帥の……いや、ギンさんの右腕だぞ!…卑しき傭兵じきに後れをとつてなるものか」

そういうとギーシュは立ち上がり、呪文をとなえようとした。しかし、銀時がシャツの裾を引っ張つてそれを制した。

「キザちょっと待て」

「やつだな。使い魔くんの言つとおりだ。いいか諸君

ワルドは低い声で言つた。

「」のよつな任務は、半数が目的地にたどり着ければ、成功とされ

る

こんなときでも優雅に本を広げていたタバサが本を閉じて、ワルドの方を向いた。そして自分と、キュルケと、ギーシュと、モンモランシーを杖で指して「囮」と呟いた。

それからタバサは、ワルドとルイズと銀時を指して「桟橋へ」と呟いた。

「時間は？」

ワルドがタバサに尋ねた。

「今すぐ」

タバサはきつぱりと言った。

「お前らだけで大丈夫かよ」

今度は銀時が心配そうに尋ねた。するとタバサの含めた囮メンバー全員がコクンッと頷いた。

「聞いてのとおりだ。今から彼女たちが敵をひきつける。僕たちは裏口から出て桟橋に向かう。以上だ」

ワルドが言つとルイズはキュルケたちを見つめた。するとキュルケはルイズをじつと見つめる。

「ねえ、ヴァリエール。勘違ひしないでね？あんたのために囮にな

るんじゃないんだからね

「わ、分かつてるわよ」

ルイズはそれでも、キュルケたちにペニリと頭を下した。

銀時たちは低い姿勢で、歩き出した。矢がひゅんひゅんと飛んできた。タバサが杖を振り、風の防御壁を張つてくれるが…傭兵が多いため全ての矢を防御することは無理らしい。

「ギ、ギントキイ」

時折飛んでくる矢にルイズがビビり銀時を呼んだ。すると銀時はルイズをチラツと見ると目を閉じるように言った。そしてワルドの羽根帽子を剥ぎ取る。ワルドの頭がゴーレムの隙間から漏れた月明かりでピカピカと光る。

「ま、眩しいイイイ…！」

「め、目がアアア」

傭兵の何人かが眩しさに目を押さえた。

その隙に銀時たちは裏口へと走った。

「ふつ、みたか。銀さんの必殺技太陽ならぬ月明かり光線」

銀時が格好つけて走つているとワルドがプルプル震えながら話かけてきた。

「使い魔くん、お願ひだから一回殴らせてくれないかい？ほんと一

回でいいから

ワルドがハゲ頭を羽根帽子で隠しながら言つも銀時は無視つて桟橋へと向かつた。

第24訓 花びらの舞つ戦いは綺麗なものだ（前書き）

最近マジ暑いですね。

そしてお待たせしました。

## 第24訓 花びらの舞つ戦いは綺麗なものだ

裏口の方へ銀時たちが向かつたことを確かめると、キュルケはギーシュに命令した。

「じゃあ始めるわよ。ギーシュ、厨房に油の入った鍋があるでしょ」

「揚げ物の鍋のことかい？」

「そうよ。それをあなたのゴーレムで持ってきてちょうだい」

「分かつた、お安い御用だ」

ギーシュは、テーブルの陰で薔薇の造花を振った。花びらが舞い、青銅の戦乙女が現れる。「ゴーレムはぴょこぴょこと厨房に走った。ゴーレムめがけて矢が飛んだ。

柔らかい青銅に何本もの矢がめり込みゴーレムがよろめいた。ギーシュははつとした顔になつたが、ゴーレムはなんとかカウンターの裏の厨房にたどり着き、油の鍋をつかんだ。

「それを、入り口に向かつて投げて！！」

キュルケは、手鏡を覗き込んで化粧を直しながら呟いた。

「こなんときに化粧するのか。きみは」

ギーシュが呆れた声で言った。それでもゴーレムを操り、言われた

通りに鍋を投げた。

キュルケは杖をつかんで立ち上がる。

「だつて歌劇の始まりよ？ 主演女優がすつぴんじゃ……」

油を撒き散らしながら飛ぶ鍋に向かつて杖を振る。

「しまらないじゃないの！――」

キュルケの魔法で鍋の中の油が引火して、『女神の杵』亭の入り口の辺りに炎を振りました。どよめきが起こつた。今しがた、突撃を敢行しようとした傭兵の一隊が、突然現れた燃え盛る炎にたじろいだ。

キュルケは色氣たっぷりの仕草で呪文を詠唱し再び杖を振る。すると炎はますます燃え盛り、入り口でたらを踏んだ傭兵たちに燃え移る。燃え移つた傭兵たちはのたうち回つた。

立ち上がつたキュルケは、優雅に髪をかきあげて杖を掲げた。そんなキュルケめがけて矢が何本も飛んだが、タバサの風の魔法が、その矢をそらす。

「名もなき傭兵の皆様がた。あなたがたがどうして、あたしたちを襲うのか……まったく存じませんけども――」

降りしきる矢嵐の中、キュルケは微笑を浮かべて一礼した。

「この『微熱』のキュルケ、謹んでお相手しますわ」

巨大ゴーレムの肩の上、フーケは舌打ちをした。今しがた突撃を命じた一隊が炎に巻かれて大騒ぎになつてゐる。隣に立つた仮面に黒マントの貴族にフーケは呟いた。

「つたく、やつぱり金で動く連中は使えないわね。あれだけの炎で大騒ぎじゃないの」

「あれでよい」

「あれじゃあ、あいつらをやつつけんことなんかできないじゃないの……」

「倒さずとも、かまわぬ。分散すればそれでよい」

「あんたはそもそも、わたしはそういうかないね。あいつらのおかげで恥をかいたからね」

しかし、マントの男は答えない。耳を澄ますようにして立ち上がるど、フーケに告げた。

「よし、俺はラ・ヴァリエールの娘を追つ」

「わたしはひとつすんのよ」

フーケは呆れた声で言った。

「好きにじる、残つた連中は煮ようが焼こうがお前の勝手だ。合流は例の酒場で」

男はひらりと「ゴーレムの肩から飛び降りると暗闇に消えた。

「つたく、勝手な男だよ。なに考えてんだか、ちつとも教えてくれないんだからね」

フーケは苦々しげに呟いた。

下では男たちの悲鳴があがつてゐる。

「ええいもう！…頼りにならない連中ね！…どいてなさい！…」

「ゴーレムがずしん！…と地響きを立てて入り口に近づく。そして拳を振り上げると入り口にそれを叩きつけた。

酒場の中からキュルケは炎を操り、外の傭兵を苦しめた。矢を射かけてきた連中もタバサが風で炎を運ぶと後ずさりだす。そこにモンモランシーが香水を振りまいた。バタバタバタと傭兵は倒れしていく。

「おっほっほ！…おほ！…おっほっほ！…」

キュルケは勝ち誇つて、笑い声をあげた。

「見た？分かつた？あたしの炎の威力！…それにしても、あなた… その香水なんなの？」

キュルケは笑いながらも面白いくらい傭兵がバタバタ倒れていく原

因の香水を持つてゐるモンモランシーに聞いた。

「「これ？」これは香水に神経麻痺の毒を混ぜてゐるよ。こぞれとこづときのために作つといつて良かつた」

モンモランシーが言つて同時に轟音と共に、建物の入り口がなくなつた。

もうもうと立ちこめる土ぼこいつの中に、巨大ゴーレムの姿が浮かび上がつた。

「あぢやあ、忘れてたわ。あの業高く張りのお姉さんがいたんだつけ」

キュルケが舌を出して咳いた。

「調子にのんじやないよッ……小娘どもがッ……まとめてつぶしてやるよッ……！」

ゴーレムの肩に立つたフーケが口をつりあげて怒鳴つてゐる。

「どうする？」

キュルケはタバサの方を見た。

「香水……ある？」

タバサはモンモランシーに聞く。するとモンモランシーは首を振つた。どうやら全て傭兵たちに使つたようだ。

タバサは両手を広げると、首を振つた。

ギーシュは、巨大なゴーレムを見て、激しくパニックに陥り、喚き

出した。

「諸君……突撃だ……突撃……トリステイン貴族の意地を今こそ見せるときである……ギンさん……見ててください……ギーシュは今から男になります」

ゴーレムに向かつて駆け出したギーシュの足をタバサが杖で引っ掛けた。ギーシュは派手にすつ転ぶ。

「なにをするんだね……」

「いいから逃げるわよ」

「やつよ。ギーシュ危ないわ」

「逃げない……ぼくは逃げません……」

キュルケとモンモランシーがギーシュに言つてゐるのを見ながらタバサはため息をつく。そして近づくゴーレムを見て何か閃いたらしい。ギーシュの袖を引っ張つた。

「なんだね？」

「薔薇……花びらたくさん」

ギーシュが持つた薔薇の造花を指差す。そしてそれを振る仕草をタバサはしてみせた。

ギーシュは怪訝そうにするも言われた通り造花の薔薇を振つた。大量の花びらが宙に舞う。タバサが魔法を唱え舞つた花びらをゴーレムに絡みつかせる。

そしてすぐ『タバサはまつとキーシュに命じた。

「鍊金」

ゴーレムの肩に乗ったフーケは、自分のゴーレムに花びらがまとわりついたのを見て鼻を鳴らした。

「なによ。贈り物？ 花びらで着飾らせてくれたつて手加減なんかしないからね！！」

ゴーレムは拳を振り上げた。一撃で、キュルケたちが盾代わりにしているテーブルごとぶつ潰すつもりである。

そのとき、まとわりついた花びらが、ぬらつと何かの液体に変化した。油のにおいが立ちこめる。『土』系統のエキスパートであるフーケは、すぐに花びらが油に液化した理由に気づいた。『鍊金』の呪文である。

やばい、と思つたときには手遅れだった。キュルケの唱えた『炎球』がフーケのゴーレムめがけて飛んできた。

一瞬で巨大ゴーレムはぶわっと炎に包まれた。燃え盛る炎に耐えきれず、ゴーレムが膝をつく。しばらくためらうようにゴーレムは暴

れていたが、そのうちに地面に崩れ落ちた。キュルケたちは手を取り合つて喜んだ。

「やつた！――勝つたのね！――わたしたち

「ぼ、ぼくの『鍊金』で勝ちました！――ギンさん！――ギーシュは勝ちましたよ！――」

「タバサの作戦で勝つたんじゃないの！――」

キュルケがその頭を小突く。

「じづじうと燃え尽きようとする『ゴーレム』をバックに、物凄い形相のフーケが立ち上がった。

「よ、よくもあんたら、――一度までもこのフーケに土をつけたわね！――」

見るも無残な格好である。長く、美しかつた髪はちりぢりに焼け焦げ、ローブは炎でボロボロになつていた。顔は煤で真つ黒になり、美人が台無しであった。

「あら、素敵な化粧じゃない。おばさん。あなたには、そのぐらい派手な化粧が似合つてよ？なにせ年だしね」

キュルケは、止めとばかりにフーケめがけて杖を振つた。しかし、さつきまでの戦いで、魔法を唱える精神力は消耗しきつていたし、ぽつと小さな炎が飛び出て、すぐに消えた。

「あら、打ち止め？」

キュルケは頭をかいた。

それはタバサもギーシュも同じらしい。もちろんフーケもだつた。唯一魔法が使えるモンモランシーも周りの炎を水の魔法で消火しなくてはならないため使えない。

フーケは魔法を唱えずに、真っ直ぐにこちらに向かって歩いてくる。

「年ですって？小娘が！－わたしさはまだ二十三よッ－！」

フーケは拳を握り締め、キュルケに殴りかかった。キュルケも思いつきり殴り返す。二人はあられもない格好で殴り合いを始めた。タバサは、座り込むともう興味ないといつた風に本を読み始めた。ギーシュは美人同士の殴り合いを、ほんのりと顔を赤らめて見守つていたが、モンモランシーにその様子を見られ顔を青ざめた。

## 第25訓 雷門ロード落雷危険

キュルケがフーケと殴り合ひをしている頃、桟橋へと銀時たちは走つた。月明かりで道は明るい。

とある建物の間の階段にワルドは駆け込むと、そこを上りはじめた。

(桟橋なのに山?)

銀時は上へと上がつて行くことに不思議そうにするもとりあえず着いて行つた。

長い、長い階段を上ると丘の上に出た。現れた光景を見て、銀時は目を見開いた。

巨大な樹が、四方八方に枝を伸ばしている。大きさは山ほどある、巨大な樹である。

樹の枝にはそれぞれ、大きな何かがぶら下がつてゐる。どうやら飛行船のようだ。銀時は少し驚いた、この世界は魔法が発達しているためあまり化学が進んでいない、なので飛行船なんてあると思つてなかつたのだ。

「これが『桟橋』…… であれが『船』かよ」

「そりよ。ギントキの世界じゃ違うの?」

「いや、違わねえ」

ルイズの問いに銀時は首を振り、江戸の空に飛んでゐる飛行船や宇宙船を思い出し眉を寄せた。そんな銀時の様子に首を傾げるルイズ。

ワルドは、樹の根元へと駆け寄る。樹の根元は、巨大なビルの吹き抜けのホールのようになっていた。枯れた大樹の幹をうがつて造られたものらしい。

夜なので人影はなく、各枝に通じる階段には、鉄でできたプレートが貼つてあった。

そこにはなにやら文字が書かれており、まるで駅のホームを知らせる看板のようなものであった。

ワルドは、目当ての階段を見つけると駆け上がり始めた。

木でできた階段は、一段ごとにしなる。手すりがついているものの、ボロくて心もとない。階段の隙間からラ・ロシェールの街の明かりが見えた。

踊り場に入つてすぐ、銀時は後ろから人の気配が近付いてくるのを感じた。

「ルイズ、ちょっとこっち

「え？ な、何よ」

銀時は眉を寄せて自分の方へルイズを引き寄せると後ろを向いた。そして、銀時はデル公を抜いて構える。しばらくすると足音がし始める。そして足音の人物の姿が見えた、どうやら先ほどフーケのゴーレムの肩にのっていた、白い仮面の男のようだった。

男はワルドと同じくらいの背格好、黒塗りの杖を持っていた。銀時は構えを崩さずルイズに向かって言った。

「ルイズ！！あまり離れるんじゃないぞーー！」

「う、うんーー！」

その言葉が開始の合図になつたのか、白い仮面の男は銀時へと向かつてきた。

銀時は『デル公』で男の攻撃を受け流す。銀時は受けながら眉を寄せた。仮面の男の攻撃する動き、どこかで見たことがある。いや、戦つたことがあるようにも感じる。

銀時が答えを出す前に男は突然吹き飛ばされた。ワルドが杖を振り攻撃をしたのだ。

男は体をひねらせ器用に着地をすると杖を振り出した。男の頭上の空気が、冷え始めた。ひんやりとした空気が銀時の肌を刺す。

(「マイツはやべえ）

「相棒！…構えるーー！」

銀時は嫌な予感がした。『デル公』が叫んだと同時に男の呪文は完成したようだ。銀時はすぐさまルイズを突き飛ばし、『デル公』を構えた。

銀時が身構えた瞬間、空気が震えた。『ばちんーー』と弾け、男の周辺から稻妻が伸びて銀時の身体を直撃する。

「『ライトニング・クラウド』ーー！」

呪文の正体に気づいた『デル公』が叫ぶ。したたかに身体に通電して、銀時は膝をついた。

「ツグアアアアアアーー！」

銀時は微かにうめく。左腕に焼け付くような激痛が走ったのだ。見ると、電撃の痕が服を焦がして左腕が、大火傷していた。

「ギ、ギントキイイイーー！」

銀時に突き飛ばされて尻餅をついていたライズが立ち上がり銀時に駆け寄る。

「だ、大丈夫だ」

銀時はそう言つと無事な右手でデル公を握り立ち上がり構えた。そつ、まだ白い仮面の男は居るのだ。戦いは終わつてない。

「無理よツーーギントキそんな身体でツーー！」

「そうだよ、使い魔くん。後は僕に任せてくれ」

ワルドはそう言つと白い仮面の男へと向かつて行つた。

それを見ると銀時はその場に座り込んだ。ライズは慌てて銀時の傷を確かめる。

電撃の痕が、剣を握つていた左手から腕へと、服を焼け焦がしていった。

「相棒、大丈夫か？ 今の呪文は『ライトニング・クラウド』。『風』系統の強力な呪文だ。あいつ相当の使い手のようだな」

デル公が心配そうに言った。

しばらくするとワルドが戻ってきた。どうやら白い仮面の男は逃げ

たようだ。

「しかし、腕ですんでよかつた。本来なら、命を奪つほどの呪文だぞ。……まあ、使い魔くんはしぶとそつだから死にそうにないけど」

ワルドはボソツと本音を呟いた。しかし銀時に見られすぐに誤魔化すよう口を開く。

「それにしても……この剣が電撃を和らげたよつだな。よくわからんが、金属ではないのか？」

「知らん、忘れた」

デル公が答える。

「インテリジョンスソードか。珍しい代物だな」

銀時は眉を寄せた。怪我が痛いのもあるが、またもやワルドに借りが出来てしまつたのだ。かなり不服そうにしているとルイズが泣きそうな顔で見つめてくる。

「ギントキ……」

まるで、自分が怪我をしたかのように痛々しい顔である。

ルイズのそんな様子に銀時は大丈夫だという風に右手でルイズの頭を撫でた。

「そろそろ、行くか」

銀時はデル公を腰におさめると痛む腕を無視して立ち上がった。

階段を駆け上がった先は、一本の枝が伸びていた。その枝に沿つていつそうの船……が停泊していた。帆船のよつたな形状だが、空中で浮かぶためだろうか、船の横に羽が突き出している。上からロープが何本も伸び、上に伸びた枝につるされていた。銀時たちが乗った枝からタラップが甲板に伸びていた。

ワルドたちが船上に現れると、甲板で寝込んでいた船員が起き上がつた。

「な、なんでえ？ もめえらーーー！」

「船長はこーむか？」

「寝てるぜ。用があるなら、明日の朝、改めて来るんだな」

男はラム酒の瓶をラップ飲みにしながら、酔つていた田代が答えた。

「オイオイ、勘弁してくれよ。朝とか銀さん待てないんだけど」

ワルドが杖を出でるとするのを制して銀時は前に出て言った。

「いや、そう言われてもな……って兄ちやん……その座我じつたよ？」

船員は銀時の腕をじつと見つめながら言った。あまりにも酷い怪我に船員たちは目をパチクリさせた。

しかし、銀時はそれを気にした素振りも見せずまるで昔話をするかのように淡々と語りだした。

「なあ、お前らは知つてゐるか？シップって名の船乗りの話

船員たちは最初は皆、銀時の怪我に目を奪われていたが話が進むにつれて、その話にのめり込んでいった。

銀時は淡々としかし、少し感情を込めて話す。そして、最後に船員たちを見回して言った。

「どうだ？お前らはシップになれるか？」

『シップウウウ！』

「ちくしょ、なんて話しやがる。おめえら、船長呼んでこい！」

「はい……」

船員たちは銀時の話を聞くとシップの名前を呼び泣き始めた。

そして、副船長である男は涙を堪えて泣いている船員のひとつに言った。

船員が船長室に繋がる扉に向かおうとした時、その扉はバタンッと音を立てて開いた。

「呼ぶ必要はない！－此処にいる」

扉を開けて出てきたのは帽子を被つた40ぐらいの男だった。男の瞳は先ほどまで泣いていたのであるう少し赤かった。

「船長ッ！――何故こゝに」

「お前らがつるやこから様子見に来たらこんな素晴らしい話が聞け  
るとみな」

船長は思つ出したのか涙ぐんだ。すると船員たちも声を上げてシッ  
プ、シップつと男泣きである。

「何よ、これ」

「なんか凄いな、けどこれで交渉は成立か」

シップの話が始まつた時からポカーンとしていたルイズ、そしてワ  
ルドはボソッと呟いた。

するとワルドの言葉が聞こえたのか、船長が口を開いた。

「交渉？」

船長が尋ねるとワルドが説明し始めた。

ワルドの話を聞くに連れて船長の眉間にシワが寄る。

「なるほど……俺としてはシップを裏切るつて嫌なんだが、それ  
は無理だ」

とても悔しそうに船長が言つた。

「何故無理なんだい？」

ワルドが眉を寄せて聞くと、船長はゴホンと咳払いをした。

「あんたらが行きたいアルビオンが最も」「ラ・ロシユールに近付くのは朝。今から出たんじゃ風石が足りねえ」

「風石ってなんだ?」

銀時が口を挟むと船長は眉を寄せた。

「『風』の魔法力を蓄えた石のことさ。それで船は宙に浮かぶんだ」

それから船長はワルドに向き直った。

「まあ、今当船が積んだ『風石』は、アルビオンへの最短距離分しかねえ。それ以上積んだら足が出ちまうからな。したがって今は出港できない。途中で地面に落っこちまつからな」

「『風石』が足りぬ分は、僕が補う。僕は『風』のスクウェアだ」

船長と船員は、顔を見合わせた。それから船長がワルドの方を向いて頷く。

「まさか、貴族とはね。良いだろ? ここで断つたらシップに合わす顔がないしな」

船長はやつと顔を向けて手をあげて命令をくだした。

「出港だ! もやいを放て! 帆を打て!」

船員たちは船長の命令に従い、船を枝に吊るしたもやい網を解き放ち、横静策によじ登り、帆を張った。

戒めが解かれた船は、一瞬空中に沈んだが、発動した『風石』の力で宙に浮かぶ。

帆と羽が風を受け、ぶわっと張り詰め船が動き出す。

「アルビオンにはいつ着く」

「明日の昼過ぎには、スカボローの港に到着する」

ワルドが尋ねると船長は先を見据えて答えた。

銀時は舷側に乗り出し、地面を見た。『桟橋』……、大樹の枝の隙間に見えるラ・ロシェールの明かりがぐんぐん遠くなつていく。結構なスピードのようだ。

ルイズが銀時に近寄り、服の裾を握った。

「ねえ、ギントキ……傷は大丈夫?」

ルイズが心配そうに覗き込んだ。

「あー……大丈夫だ。あれくらいもう治つたしよオ」

銀時はルイズに怪我を見せないように平気な顔で言った。

ルイズは眉を寄せる、そんなすぐに治るような怪我ではなかつたはずだ。

「けど、ギントキ」

「二人とも、船長の話では、ニユーカッスル付近に陣を配置した王軍は、攻囲されて苦戦中のようだ」

ルイズが何かを言おうとした時、一人の元ヘワルドが寄ってきた。ワルドの話を聞くとルイズがはつとした顔になつた。

「ウェーレズ皇太子は？」

ワルドは首を振った。

「わからん。生きてはいるようだが……」

「どうせ、港町はすべて反乱軍に押さえられているんでしょう？」

「そうだね」

「どうやって、王党派と連絡を取ればいいのかしら」

「陣中突破しかあるまいな。スカボローから、ニユーカッスルまでは馬で一日だ」

「反乱軍の間をすり抜けて？」

「そうだ。それしかないだろ？まあ、反乱軍も公然とトリスティンの貴族に手出しきはできんだろ？スキを見て、包囲線を突破しニーカッスルの陣へと向かう。ただ、夜の闇には気をつけないといけないがな」

ワルドとルイズが相談してゐるを見ながら銀時は舷側に座り込んだ。

（チツ、やべえな。痛みが酷くなつてきてやがる）

銀時は怪我した腕を押さえると怪我や戦いで消費した体力を回復させらべく、眠りについた。

## 第26訓 嫌がらせは計画的に（前書き）

あー……なんかもう言い訳しようがないくらいダメダメです

そして、更新お待たせしました

## 第26訓 嫌がらせは計画的に

銀時が目を覚ますとそこは万事屋の自分の部屋だった。銀時はガバツと起き上がり周りを見渡す。

「は？え？ちよ、……夢だつたのか？」

銀時は自分の左腕を見た。そこには先ほどまで酷い火傷があつた筈なのだが、何もなかつた。

「夢……つたく魔法とか貴族とかファンタジーな夢を見ちまつとな」

銀時がブツブツと呟いてるとバタンと勢いよく寝室の襖が開けられた。

「銀ちゃん……」

「おー、神楽じゃねえか。どうした？大きな声出して」

入ってきたのは神楽だった。銀時は声の下ほうへ振り向くも神楽は悲しそうに目を伏せる。

「神楽？」

銀時はそんな神楽へと手を伸ばすがスッとその手は神楽に触れず通り抜けてしまった。

銀時は目を見開き驚いた。そして、もう一度神楽に触りついた時、

此方へと向かつてバタバタと足音がし始めた。

「神楽ちゃん！…どうしたの…」

足音の人物は新ハだ。新ハは神楽のそばに行くと心配そうにした。そんな新ハに神楽はブンブンと首を振る。

「何でもないね。なんか気配したから銀ちゃんが帰ってきたのかと思つただけヨ…けど違つたアル」

「そ、そつか…全く…銀さんつてば1ヶ用もビリで何してるんだが…帰つてきたらつーーんとお仕置きしなきや…ねえ、神楽ちゃん」

新ハは神楽を元気づけるように明るい声で言つた。そんな新ハに神楽は、でかけていた涙をゴシゴシ拭くと同じく明るい声で言つ。

「ほんとア。銀ちゃん見つけたらギタギタにぶちのめしてやるネ！新ハイ、早くご飯食べて銀ちゃん搜すアルよ！」

「うん」

新ハと神楽は話が終えると、飯を食べるため、銀時の寝室から出て行く。そんな2人に銀時は慌てた。

「おい、神楽！…新ハ！…俺は…」…かぐ…ら、しんぱ…」

しかし、銀時の言葉は2人には聞こえない。銀時は何度も2人を呼ぶが、2人は別の部屋へと消えていった。

「しんぱ……ち、かぐ……らアアア……」

銀時はガバッと起き上がった。勢いよく起き上がったせいかズキンと火傷をした左腕が激しく痛む。しかし、今の銀時はそれどころではないらしく痛むのも気にせずキヨロキヨロと辺りを見渡した。どうやら寝る前に居た船の舷側らしい。上を見上げると綺麗な青空が広がっている。

「夢？いや、それにしては……」

銀時は右手で頭を押さえる。そして先ほど見た夢の内容を思い出し眉を寄せた。

（夢にしてはさつきのリアル過ぎのよつな。そういうや前に源外のじじいが…………ってかさつきから肩が重い、……つたくるルイズは意外と甘えん坊なんだな）

集中するため目を閉じ銀時は夢について考え込むも先ほどから肩にズッシリと重みがあるのを感じた。

誰かが銀時にぴったりくつ付いて寝ているのだ。

銀時はルイズだと思いクスリと笑う。神楽を思い出したのか銀時は無事な手で肩に乗った人物の頭を優しく撫で始める。そして、撫でながらあることに気付く。頭を撫でてるはずなのに髪の毛の感触がない……ツルツルなのだ。

（あれ……なんでツルツル？ルイズツルツルだつけ？……まさか口

イツ。……いやいやいや、ないない。あれだろ、実はルイズカツラ  
被つてたとか）

銀時はないない咳きながら恐る恐る田を開けた。そして田を開けたことを後悔する。何故なら田の前に居たのは少し頬を赤らめたワルドが居たのだ。

「使い魔くん、なんか照れグハアアアアツ」

「ギャアアアアアアツ！－イデエエエツツ」

銀時はあまりの光景に絶叫を上げた。そして思わず火傷をした左手でワルドの顔を正面から殴り飛ばした。ズキズキと殴った手に激痛が走る。

さて、ここで読者の皆さんに言つときます。この小説はB「ではありません！！この小説はB」ではありません！！大事なことなので2回言いました。

では、何故このような状態なのか……それはワルドの嫌がらせである。物理的攻撃が効かない銀時を精神的攻撃で追い詰めようとしているのだ。

「ん……もつづるかいわね

ワルドと反対側……銀時の隣に居たルイズは田を擦りながら起き上がりつて周りを見た。

何故か腕を押さえて怯えている銀時と鼻血をボトボト出して満足げにしているワルドが目に入った。

「ふ、一人とも……どうしたの？」

ルイズは一人の様子に目をパチクリとさせる。そして銀時の元へと近付いていく。銀時はワルドを警戒しながらルイズが近付いてくるのを横目で確認した。

ルイズは銀時の傍に行くとワルドと銀時を見て眉を寄せた。

「一人とも仲良くしないとダメじゃない！？」

二人の様子に喧嘩したのだろうとルイズは思った。そして腰に手を当てて言うとワルドはクスリッと笑い弁解を始める。

「いや、違うんだよ。僕のルイズ……ちょっと使い魔くんに悪戯したら防衛反応されちゃってさ。ね、使い魔くん」

ワルドはルイズに言い訳をしながら銀時に向けてパチンッとウインクをした。

それを見てしまつた銀時は顔を真っ青にさせ身体中に鳥肌がたつた。そんな風に過ごしていると突然鐘楼の上に立つた見張りの船員が大声をあげる。

「アルビオンが見えたぞー！？」

船員の言葉に銀時はホッとした。船から降りたらワルドから確実に離れられるからだ。銀時は天の助けとばかりに舷側から眼下を覗き見る。

しかし、広がるのは白い雲ばかり。どこにも陸地など見えない。

「あー、陸地なくねえ？」

「あつちよ」

銀時が呟くとルイズは空中を指差した。

銀時はルイズの指差した方向を見ると微かに目を開かせる。そこには、雲の切れ間から黒々と大陸が覗いていた。大陸ははるか視界の続く限り延びている。地表には山がそびえ、川が流れていた。

「驚いた？」

ルイズが銀時に言った。

「ああ、ラピュタはマジであつたんだな」

銀時はしみじみと呟く。そんな銀時にルイズは説明を始めた。

「ラピュタ？よく分からぬけど……あれは浮遊大陸アルビオン。ああやつて、空中を浮遊して主に大洋の上をさまつてゐるわ。でも月に何回か、ハルケギニアの上にやつてくる。大きさはトリステインの国土ほど……通称『白の国』とも呼ばれてゐるの」

「『白の国』だア？」

銀時が眉を寄せて聞くよつとルイズはおもむろに大陸を指差した。

大河から溢れた水が、空に落ち込んでいる。その飛沫が白い霧となって大陸の下半分を覆っていた。

「なるほどな、確かにこりゃあ『白の国』だわ」

銀時がアルビオンを見つめて言ったそのときである。鐘楼に上がった見張りの船員が大声をあげた。

「右舷上方より、船が接近しています……」

言われた方へと向くと、確かに船が一隻近付いてくる。銀時たちが乗り込んだこの船よりも一回り……いや、下手したらもっと大きい船である。

舷側に開いた穴からはたくさん大砲が突き出している。

「オイオイ、えらい物騒な船だな」

銀時がボソッと呟くとルイズは眉をひそめた。

「いやだわ。反乱勢……、貴族派の軍艦かしら」

## 第27訓 意外なところ見てとあるへとかべタ過ぎだら（前書き）

なんかあれですね……キャラが違つよつた気がして、いつもより完成度かなり低いです。

もうキャラがキャラじゃないみたいだ。

そして、今回も例のあの人可哀想な感じです

## 第27訓 意外なところ見てときめくとかベタ過ぎだろ

銀時たちは船倉に閉じ込められていた。

何故こうなったのか話せば長くなるのだが……実は26訓の最後に現れた船は空賊だったのである。ちなみに空賊とは海賊の空バージョンだと思ってくれ。

まあ、とりあえずその空賊となんやかんやあって捕まつたのだ。

「もう……最悪よ、あの下郎共……」

ルイズは閉じこめられた船倉で怒りのあまり言葉を発した。

「まあ、落ち着きたまえ。僕の可愛いルイズ」

ワルドは興味深そうに周りを見ながらルイズに落ち着くようになりた。ちなみに周りには酒樽やら穀物のつまつた袋やら、火薬樽が雜然と置かれている。部屋の隅には重たそうな砲弾がつたかく積まれていた。

「ハ……ワルド」

そんなワルドの言葉にルイズは振り向いた。

「……え？ ルイズ、僕のルイズ。なんで最初にハって言つたんだい？ え？ まさかハゲつて言いかけたん？」

「つむせえな、ハゲド。ほら、ルイズもそっち口リコンがいるから」

ハゲドージやなかつた。ワルドの言葉を遮りながら銀時はルイズに向かって手招きをした。どうやらあの精神攻撃のせいでいつも以上に自分にもルイズにもワルドを近付けさせないようにしているようだ。ルイズは頷くと銀時の隣へと座つた。それを見たワルドは落ち込んだのか床にしゃがみ込んだ。

そのようなことをしていると、突然太つた男が扉を開けて入つてきた。手にはスープの入つた皿を持っている。

「飯だ」

太つた男が言うと、銀時はワルドを見た。ワルドは今だに落ち込んでいるらしく受け取ろうとしない。その姿を見ると銀時はため息をつきスープを受け取ろうと痛む左腕を庇いながら立ち上がつた。

銀時が太つた男のそばに行き、皿を受け取ろうと右手を伸ばすと男はひょいと皿を持ち上げた。

「質問に答えてからだ」

「あ、あ？ 質問だア？」

男はニヤリと笑うときつぱり言った。そんな男に向かつて銀時は眉を寄せ不機嫌そうに低い声を上げて睨み付ける。

今の銀時は色々あつたせいかとても機嫌がわるい。そんな銀時を見るルイズは立ち上がり銀時同様、男を睨みつけて言った。

「いいわ。言つてござらんなさい」

ルイズの言葉にとりあえず銀時は様子を見ることにして近くの壁に身体を預けた。

「お前たち、アルビオンに何の用なんだ?」

「旅行よ」

ルイズは腰に手を当てて、毅然とした声で言った。

「旅行? 今のアルビオンの何を見物に行くつもりだい?」

「あなたに言う必要ないわ!..」

ルイズは顔を背けた。すると空賊は肩をすぼめ、銀時に皿と水の入ったコップを寄越し去つて行つた。

銀時はルイズの元へ持つて行くと差し出す。

「ほれ、飯だぞ」

「あんな連中の寄越したスープなんかいらないわ!..」

「オイオイ、食べねえといぢつて時動けないぜ」

「使い魔くんの言つ通りだ。ルイズ、食べないと体がもたないぞ」

銀時とやつと落ち込みから抜け出したワルドが言った。その言葉にルイズはしぶしぶといった顔でスープの皿を手に取つた。

三人は一つの皿から、同じスープを飲んだ。飲み終わると三人はすることがなくなったのだろう、ワルドは壁に背をついて、なにやら物思いにふけっている様子。

ルイズは銀時をじっと見ると話しかけてきた。

「やういえば銀時。怪我は大丈夫なの?」

「あ?なんだよ、突然」

突然のルイズの言葉に銀時は微かに顔を寄せた。  
そんな銀時にルイズは腰に手を当ててきつぱり言つた。

「突然なんかじゃないわ!!わたし……ずっと心の中で思つてたもの……」

「へえー、そんなに俺のこと心配なんだ……銀さんつてば愛されてるなア」

ルイズの言葉に銀時は一いやいやとからかいつぶつやらしく笑つた。  
そんな銀時にルイズは顔を真つ赤に染め上げる。

「あ、あ、愛…………ち、ち、違つ……違つわよ。わ、わたしは、わたしは主人として使い魔のあんたを心配してただけで!!愛してなんて……」

怒鳴るように喋っていたルイズの言葉が語尾に近づくたびにだんだんと声が小さくなつていいく。そんなルイズを銀時はじつと見つめた。  
(なんだあ?)こつ……こんな反応して、可愛ことあるじやねえか)

江戸の女どもを見てきた銀時にとっては新鮮なルイズの反応を素直

に可愛く感じ、銀時はクスリッと笑う。するとルイズはバカにされたと感じたのか、突然火薬樽のある方に向かった。

「「、「主人様をからかうなんて」、「、「このバカバカバカギントキイイイ！」」

ルイズは顔を真っ赤にしたまま火事場の馬鹿力でズシッと重い火薬樽を持ち上げ、銀時に向かつて思い切り投げつけた。

「グハッ……や、やっぱ可愛くねえ……ガクッ」

見事火薬樽は銀時の顔面目掛けで当たり銀時の意識を数秒飛ばした。そんな様子を横目で見ていたワルドは銀時が酷い目に合うのを喜び、そしてルイズに恐れを感じたとか感じてないとか……

ルイズたちは答えない。

「おーおー、黙つてたらわからねえよ。まあ、もしそうだつたら失礼したな。俺たちは貴族派の皆さんのおかげで商売してんだ。時々王党派に味方しようとする醉狂なヤツらがいてな。そいつを捕まえてるのや」

「じゅあ、やつぱりこなま反乱軍の軍艦なのね」

空賊の言葉にルイズは眉を寄せて言った。そんなルイズの言葉に空賊は首を軽く振る。

「いやいや、俺たちは雇われてるわけじゃあねえ。あくまで対等な立場で協力しあつてゐるのさ。まあ、そんなわけだからおめえらが貴族派ならきみかんと港まで送つてやるよ」

「あー、それなら俺たちは……」

そんな空賊の言葉に銀時が反応して言おうとするもルイズがそれを遮り眉を寄せときつぱりと呟つた。

「バカ言わないで、わたしたちがあんな薄汚いアルビオンの反乱軍なわけないじやない！！わたしは王党派への使いよ。まだあんたたちが勝つたわけじやないんだから、正統なる政府はアルビオンの王室！！わたしはトリステインの代表。つまり大使よ。だから大使としての扱いをあんたたちに要求するわ」

銀時はルイズの言葉に口を開けて呟いた。

「お、お前バカか？」

「誰がバカよ。バカって言つた方がバカなんだから！－！バカはあんたでしょ！－！」

「いやいや、ルイズだつてバカって言つてるからお前だつてバカです。……つてそうじやねえよ！－！なんでそんな正直に言うんだよ。ここは、油断させといて後々酷い目に合わせるフラグだろ？が！－！」

「フラグって何よ。だいたいあんたは黙つてわたしの言つことに従つてればいいのよ！－！」

ルイズと銀時が言い合いを始めるとワルドはやれやれと言つた感じで一人にゅつくつと近づく。

「まあ、使い魔くんもルイズも落ち着きたまグハツ」

「つぬせえツ！－！」

「つぬせ！－！」

二人の肩に手を置き落ち着かせようとしたが、そんなワルドが二人にとつて邪魔だつたのだろうワルドに向かつて一人は拳を放つた。

その様子を見ていた空賊は笑つた。

「いや、下手な漫才より面白いわ

ケタケタ笑い続ける空賊にルイズと銀時はハツとしどりあえず言い合ひをやめた。

「まあ、正直なのは、美德だが……お前たちただじゃ済まないぞ」  
「あんたたちに嘘ついて頭を下げるぐらいなら、死んだほうが断然  
マシだわ」

ルイズは胸を張つて言い切つた。

「いや、銀さんは死にたくないんだけど」

銀時がボソッと呟く。

「あんたはわたしの使い魔でしょ。」ひなつたひ、覚悟しなせこよ  
ね」

「頭に報告してくる。その間にやつくり考えるんだな」

空賊は言いたいことを語つと抜つていぐ。

銀時の言葉にルイズは毅然としてきつぱり言った。

「破滅？冗談じゃないわ。わたしは最後の最後まで諦めないわ。地面に叩きつけられる瞬間までロープが伸びると信じてるわ」

真っ直ぐと言うルイズにワルドが寄ってきて肩に手を置いた。

「いいぞルイズ。さすがは僕の花嫁だ」

「いやいや、さすが俺のご主人様だろ」

銀時はムツと眉を寄せるときつぱり言い直す。その時、再び扉が開いた。先ほどの痩せすぎの空賊が戻ってきたのだ。

「頭がお呼びだ」

## 第28訓 空氣の正体（繪書卷）

明けましておめでとうござりますーー。

やっと復活です。今年度もよろしくお願ひしますーー。

## 第28訓 空賊の正体

狭い通路を通り、階段を上がった先にある立派な部屋へと三人は連れていかれた。後甲板の上に設けられたそこは、頭……いや、この空賊船の船長室であるらしい。

がちやりつと扉を開けると豪華なディナー・テーブルが見えた。そのディナー・テーブルの上座にはヒラヒラとした派手な格好の空賊が腰掛けていた。

大きな水晶のついた杖をじつと見つめとはいじつている。空賊の頭のくせにどこかメイジらしい雰囲気を漂わせている。

頭の周りには、ガラの悪そうな空賊たちがニヤニヤと笑いルイズたち三人を見つめる。ここまでルイズを連れてきた瘦せすぎの男が後ろからルイズをつづいた。

「お前たち、頭に挨拶しろ」

しかし、ルイズはきっと頭をにらみ、ワルドはその様子を見つめ、銀時は耳に指を入れ緊張感のない表情で様子を窺っていた。頭はにやつと笑つた。

「気の強い女は好きだぜ。たとえ子供でもな」

頭の言葉に銀時はチラツと空賊を見る。ルイズは頭を睨みつけたまま言つた。

「大使としての扱いを要求するわ……そつじやないなら、誰があんたちになんか口をきくもんですか……」

ルイズの言葉を頭は無視して聞いた。

「王党派と言つたな？」

「ええ、言つたわ」

「なにした行くんだ？ あたしは明日戻りでも泊まつた」

「あんたらに言つてじやないわ」

頭は、ヒュウーっと口笛を吹き楽しげな声でルイズに言つた。

「貴族派につく氣はないかね？ あいつらはメイジを欲しがつていて。たんまり礼金も弾んでくれるだらうな」

「死んでもイヤよーーー！」

ルイズは勇敢に言つせよはり怖いのだろう、微かに震えながら銀時の服の裾を握つた。

銀時はギュッとルイズの手を握ると何やら空賊の頭の言つ葉が可笑しいことに気づく。

（おかしくねえ？ 明日にも消えそうなぐらいってことは余裕の勝ち戦だろ？ なのに無駄な金使つてメイジを増やしたがるか？ それに…）

銀時は周りを見渡した。ルイズが思い切り断つたのに周りがまったく怒つてないのだ。それどころか雰囲気が穏やかになつた気がする。銀時が考えていると、空賊の頭が再度口を開いた。

「 もつ一度言ひつ。貴族派につく氣はないかね？」

頭の言葉に銀時はピコンとまたのカルレイズが口を開く前に喋り出した。

「 つかねえよ。だいたい俺たちが貴族派についたら困るんじやねえのか？」

銀時がさつぱりこうと周りの空賊がざわざわと騒ぎ出した、じつやら動搖しているようだ。その様子を見て銀時は自分の考えがあつてるのでと一やりと笑う。

「 ギントキー…どつこつことなの？」

ルイズが周りの様子を見て尋ねてきた。

「 あー、ルイズ。俺達は騙されんんだ。こいつらは貴族派でも空賊でもねえ。王党派だ」

銀時の言葉にルイズは目を真ん丸くし、ワルドは興味深そうに見つめた。

「 け、けどギントキ」

ルイズが何かを言おうとしたその時空賊の頭が口を開いた。

「 貴様は何者だ」

「 万事屋銀ちゃんのオーナー坂田銀時。まあ、今はこいつの使い魔もやつてる」

銀時はルイズの頭を撫でながらきつぱりと言つ。

「使い魔？」

「ああ

頭の繰り返した言葉に銀時はコクンッと頷いた。すると頭は大声で笑い出した。

「まさか、氣づくとは……トリステインの貴族は、なかなか鋭いな頭はそう言つと笑いながら立ち上がつた。そして、一通り笑うと、ホンッと咳払いをする。

「失礼した。貴族に名乗らせるなり、一いちから名乗らなくてはな頭がそう言つと、周りに控えた空賊たちは一や一や笑いをおさめ、一斉に直立した。

頭は自分が付けていた作り物のカツラ、眼帯、ヒゲを取つた。現れたのは、凜々しい顔立ちの金髪の若者であつた。

「私はアルビオン王立空軍大将、本国艦隊司令長官……、本国艦隊といつてもすでに本鑑『イーグル』号しか存在しない無力な艦隊だがね。まあ、その肩書きよりこちらのほうが通りがいいだろ?」

若者は居住まいをただし、威風堂々と名乗つた。

「アルビオン王国皇太子、ウェールズ・テューダーだ」

ルイズは口をあんぐりと開けた。銀時もまさか王子自らとは思わず微かに目を見開かせた。ワルドは興味深そうに、皇太子を見つめた。ウェールズは、にっこりと魅力的な笑みを浮かべるとルイズたちに席を勧めた。

「アルビオン王国へようこそ。大使殿。さて、ご用の向きをうかがおうか」

あまりのことに、ルイズたちは口を開けずぽけっと、呆けたように立ち尽くす。

「その顔は、どうして空賊風情に身をやつしているのだ?といった顔だね。いや、金持ちの反乱軍には続々と補給物質が送り込まれる。敵の補給路を絶つのは戦の基本。しかしながら、堂々と王軍の軍艦旗を掲げたのでは、あつという間に反乱軍のフネに囲まれてしまう。まあ、空賊を装つのも、いたしかたない」

ウェールズは、イタズラっぽく笑つて言つた。

「いや、大使殿には誠に失礼をいたした。しかしながらきみたちが王党派ということだが、なかなか信じられなくてね。外国に我々の味方の貴族がいるなどとは、夢にも思わなかつた。きみたちを試すような真似をしてすまない。まあ、使い魔の方は気付いてたみたいだが」

ウェールズはそこまで言つとチラッと銀時を見て、ルイズへと目線を戻した。

ルイズは口を開けたまま微動だにしない。いきなり目的の王子に出会ってしまったので心の準備ができていないのであつた。

「アンリエッタ姫殿下より、密書を預かって参りました」

ワルドは前に出ると、優雅に頭を下げて言った。

「ふむ、姫殿下とな。きみは？」

「トリステイン王国魔法衛士隊、グリフォン隊隊長、ワルド子爵」  
それからワルドはルイズたちをウェールズに紹介した。

「そしてこちらが姫殿下より大使の大任をおおせつかつたラ・ヴァリエール嬢とその使い魔の青年にござります。殿下」

「なるほど！－きみのよう立派な貴族が、私の親衛隊にあと十人ばかりいたら、このような惨めな今日をむかえることもなかつたろうに！－して、その密書とやらは？」

ルイズが慌てて、胸のポケットからアンリエッタの手紙を取り出した。

恭しくウェールズに近づいたが、途中で立ち止まる。それから、ちよつと躊躇つように口を開いた。

「あ、あの……」

「なんだね？」

「その、失礼ですが、ほんとに皇太子さま？」

ウェールズは笑った。

「まあ、さっきまでの顔を見れば無理もない。僕はウェールズだよ。正真正銘の皇太子さ。なんなら証拠をお見せしよう」

ウェールズは、ルイズの指に光る、水のルビーを見つめて言った。自分の薬指に光る指輪を外すと、ルイズの手を取り、水のルビーに近づけた。二つの宝石は共鳴しあい、虹色の光を振りまいた。

「この指輪は、アルビオン王家に伝わる、風のルビーだ。きみがはめているのは、アンリエッタがはめていた、水のルビーだ。そうだね？」

ルイズは頷いた。

「水と風は、虹を作る。王家の間にかかる虹さ」

「大変、失礼をばいたしました」

ルイズは一礼をすると、手紙をウェールズに手渡す。

ウェールズは、愛しそうにその手紙を見つめると、花押に接吻した。それから慎重に封を開き、中の便箋を取り出し、読み始めた。真剣な顔で、手紙を読んでいたが、そのうちに顔を上げた。

「姫は結婚するのか？あの、愛らしいアンリエッタが。私の可愛い……、従妹は」

そんなウェールズにワルドは無言で頭を下げ、肯定の意を表した。再び、ウェールズは手紙に視線を落とす。最後の一行まで読むと、微笑んだ。

「了解した。姫は、あの手紙を返して欲しいとの私に告げている。何より大切な、姫から貰った手紙だが、姫の望みは私の望みだ。そのようにしてよ」

ルイズの顔が輝いた。そんなルイズを見て銀時も少し嬉しそうに目を細めた。

「しかしながら、今、手元はない。ニュー・カッスルの城にあるんだ。姫の手紙を、空賊船に連れてくるわけにはいかぬのでね」

ウェールズは笑って言った。

「多少、面倒だが、ニュー・カッスルまで足労願いたい」

## 第29訓 ニューカッスルの城（前書き）

もひ、……キャラ割り込み辛い…

銀時とワルド…あつ、居たの？って感じの存在感です

## 第29訓 ニューカッスルの城

『イーグル』号は、浮遊大陸アルビオンのジグザグした海岸線を、雲に隠れるようにして航海した。だいたい三時間くらい進んだらうか……大陸から突き出た岬が見えた。岬の突端には、高い城がそびえている。

どうやらあれがニューカッスルの城のようだ。だが、『イーグル』号は真っ直ぐにニューカッスルに向かわず、大陸の下側に潜り込むような進路を取った。

「なぜ、下に潜るのですか？」

そんな船の進路を不思議に思つたルイズがウェーラズに聞いた。ウェーラズは、城の遙か上空を指差した。遠く離れた岬の突端の上から巨大な船が降下してくるのが見えた。

「叛徒どもの鑑だ」

その船は本当に巨大としか形容できない、禍々しい巨艦であった。長さは『イーグル』号の優に二倍はある。その巨艦は降下してくると突然ニーカッスルの城めがけてたくさん並んだ砲門を一斉に開いた。そしてどこどこどこどん、とけたたましい斉射の音と振動が『イーグル』号まで伝わつてくる。

砲弾は城壁を砕き小さな火災を発生させていた。

「あの忌々しい鑑は、空からニューカッスルを封鎖しているのだ。あのようにたまに嫌がらせのように城に大砲をぶつ放していく。備砲は両舷合わせて百八門。おまけに竜騎兵まで積んでいる」

ウェールズの言葉を聞き巨艦の上を見るとドライゴンが舞っているのを見つけた。

「我々のフネではあんな化け物を相手にできるわけない。だから雲中を通り、大陸の下からニューカッスルに近づく。そこには我々しか知らない秘密の港があるのだ」

ウェールズの言葉通り雲中を通り、大陸の下に出ると辺りは真っ暗になった。大陸が頭上にあるため日が指さないのだ。おまけに雲の中である。視界がゼロに等しく、頭上の大陸に座礁する危険があるため、反乱軍の軍艦は決して近づかないのだ、とウェールズが語つた。

「地形図を頼りに、測量と魔法の明かりだけで航海することは、王立空軍の航海士にとつては造作もないことなのだが

貴族派、あいつらは所詮、空を知らぬ無粋者さ、とウェールズは笑つた。

しばらく航行すると、頭上に穴が開いてる部分に出た。穴は直径三百メイルほどである。

「一時停止」

「一時停止、アイ・サー」

『イーグル』号は穴の真下でぴたりと停船した。

「微速上昇」

「微速上昇、アイ・サー」

今度はゆるゆると『イーグル』号は穴に向かつて上昇していく。

穴に沿つて上昇すると頭上に明かりが見えた。眩いばかりの光にさらされたかと思うと、鑑はニュー・カッスルの秘密の港に到着していた。そこでは大勢の人々が待ち構えており、『イーグル』号を繩で止め停船させた。

ウェーラズは、ルイズたちを促し、船から降りた。

ウェーラズが降りると背の高い年老いた老メイジが近寄ってきた、ウェーラズはそれを見ると両手をあげて言つた。

「喜べ、パリー。今日の戦果は硫黄だ、硫黄！――」

ウェーラズの言葉に集まつた兵隊が、うおおーっと歓声をあげた。

「おお！――硫黄ですと――火の秘薬では」やうやうか――これで我々の名譽も守られるというのですな！――」

老メイジは、おいおいと泣き始めた。

「反乱が起つてからは、苦渋を舐めつぱなしでありますたが……これだけの硫黄があれば……」

老メイジの言葉にウェールズはにつりと笑った。

「ああ、王家の名誉と誇りを叛徒どもに知らしめて敗北することができるだろ？」

「栄光ある敗北ですな！ つと、ところで『報告』のですが叛徒どもは明日の正午に攻城を開始すると伝えて参りました。まったく、殿下が間に合つてよかつたですわい」

「なるほど。それなら聞一髪とはまさにこのこと……戦に間に合わぬは、これ武人の恥だからな……」

ウェールズたちは心底楽しそうに笑いあつてゐる。そんな様子をルイズは不思議そうに見つめ、銀時は気に入らなさうに眉を寄せ、ワルドは当たり前のように眺めていた。

「おや？ その方たちは？」

しばらくすると老メイジがルイズたちに気付いたのかウェールズに尋ねる。

「トリステインからの大使殿だ。重要な用件で王国に参られたのだ」

老メイジはウェールズの言葉に眉を寄せた。しかし、すぐに表情を改めて微笑んだ。

「これはこれは大使殿。殿下の侍従を仰せつかつております、パリードゴざいます。たいしたもてなしはできませんが、今夜はささやかな祝宴が催されます。是非とも出席くださいませ」

ルイズたちは、ウェールズに付き従い、城内の彼の部屋へと向かつた。ウェールズの部屋は王子の部屋と思えないほど質素な部屋だった。

木でできた粗末なベッドに椅子とテーブル。戦の様子が描かれたタペストリーが壁にかざられているだけだ。

ウェールズは机の引き出しから宝石が散りばめられた小箱を取り出した。首からネックレスを外し先に付いている鍵で箱を開ける。蓋の内側にはアンリエッタの肖像が描かれていた。

そして箱の中には一通の手紙、どうやらそれが王女のものであるらしい。ウェールズはそれを取り出し、愛おしそうに口づけたあとゆっくり読み始めた。手紙はボロボロで何度も読まれた形跡がある。読み返すとウェールズは大切そうに手紙をルイズに手渡した。

「これが姫からいただいた手紙だ。このとおり、確かに返却したぞ」

「ありがとうございます」

ルイズは手紙を受け取り深々と頭を下げた。

「明日の朝、非戦闘員を乗せた『イーグル』号がここを出港する。それでトリステインに帰りなさい」

ルイズは手紙をじっと見つめた。そして深々と頭をたれて、ウェールズに一礼した。どうやら何かを決意したようだ。

「陛下。先ほど、栄光ある敗北をおつしやつっていましたが、王軍は

「勝ち田はないのですか？」

「ないよ。我が軍は三百。敵軍は五万。万に一つの可能性もありえない、我々にできる」とは勇敢な死に様を連中に見せる」とだけだ」

ルイズはウェールズの言葉を聞き俯いた。

「殿下の討ち死になさる様もその中には含まれているのですか？」

「当然だ。真っ先に死ぬつもりだよ」

ルイズは息を呑みウェールズを見つめた。何故ならルイズに任務を頼む時のアンリエッタはまるで恋人を案じるような様子だったのだ。そして先ほどのウェールズの様子、アンリエッタとウェールズは恋仲だったのだろう。

ルイズは熱っぽい口調でウェールズに言った。

「殿下、亡命なされませ！－トリステインに亡命なされませ！－わたくしたちと共に、トリステインにいらしてくださいませ！－」

「それはできんよ」

ルイズの様子にウェールズは一瞬驚くもルイズが何故そう言ったのか気付いたのか笑いながら言った。

「殿下、これはわたくしの願いではございません！－姫さまの願いでござります！－姫さまの手紙にはそう書かれておりませんでしたか？わたくしは幼き頃、恐れ多くも姫さまのお遊び相手を務めさせていただきました！－姫さまの気性は大変よく存じております！－」

おっしゃってくださいな、殿下！！姫さまは、たぶん手紙の末尾であなたに亡命をお勧めになつていてるはずですわ！！

ウェールズは首を振つて否定した。

「そのようなことは、一行も書かれていない

「殿下！！」

ルイズはウェールズに詰め寄る。

「私は王族だ。嘘はつかぬ。姫と、私の名譽に誓つて言うがただの一行たりとも私に亡命を勧めるような文句は書かれていない」

ウェールズは苦しそうに言った。その口ぶりからルイズの指摘が当たつていたことがうかがえた。

「アンリエッタは王女だ。自分の都合を国の大目に優先させるわけがない」

ルイズはウェールズの意思がかたいのを感じた。ウェールズはアンリエッタを庇おうとしている。臣下のものにアンリエッタが情に流された女と思われるのが嫌なのだろう。

「きみは正直な女の子だな。ラ・ヴァリエール嬢。正直で真っ直ぐでいい目をしている。……忠告しよう。そのように正直では大使は務まらぬよ。しっかりしなさい」

ルイズは俯いた。するとウェールズはにっこり微笑む。

「しかしながら、亡國への大使としては適任かもしだ。明日に滅ぶ政府は、誰より正直だからね。なぜなら、名譽以外に守るものがないのだから」

ウェーラズはきつぱり言つと、机の上に置かれた水がはられた盆の上に載つた針を見つめた。どうやら時計のようである。

「そろそろ、パーティーの時間だ。是非とも出席してほしい」

ルイズと銀時は部屋の外へ出た。ワルドは居残つて、ウェーラズに一礼した。

「まだ、なにか御用がありかな? 子爵殿」

「恐れながら、殿下にお願いしたい議がござります」

「なんなりとうかがおう」

ワルドはウェーラズに、自分の願いを語つて聞かせた。ウェーラズはにっこりと笑つた。

「なんともめでたい話ではないか。喜んでそのお役目を引き受けよう

「う

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4009q/>

---

ゼロの白夜叉

2012年1月10日15時54分発行